

ICT利活用授業研究推進校 中間報告書2025



神奈川県立生田東高等学校

Contents

1. 計画の部

- 1-1 令和4年度指定 県立高校指定校事業 3年間計画書
- 1-2 令和7年度指定 県立高校指定校事業 3年間計画書
- 1-3 令和4年度指定 県立高校指定校事業 単年度計画書
- 1-4 令和7年度指定 県立高校指定校事業 単年度計画書
- 1-5 本プロジェクト全体計画

2. 1人1台端末の部

- 2-1 端末選定の方針
- 2-2-1 令和4年度の状況
- 2-2-2 令和5年度の状況
- 2-2-3 令和6年度の状況
- 2-2-4 令和7年度の状況

3. 環境整備の部

- 3 環境整備の方針と今後の課題

4. 研修の部

- 4 すべての教科でのICTの利活用を目指して

5. 授業研究の部

- 5-1 授業研究
- 5-2-1 令和4年度の公開研究授業
- 5-2-2 令和5年度の公開研究授業
- 5-2-3 令和6年度の公開研究授業
- 5-2-4 令和7年度の公開研究授業

6. 研究成果の部

- 6-1 各種アンケートからの分析と提言
- 6-2 令和4年度指定 県立高校指定校事業 実施報告書
- 6-3 令和7年度指定 県立高校指定校事業 実施報告書

付録

- 令和6年度実施 生成AIを利活用した授業実践シート
- 令和7年度実施 授業実践シート
- 令和7年度実施 公開研究授業指導案

1 . 計画の部

1-1. 県立高校指定校事業（令和4年度指定） 3年間計画書

学 校 名	県立生田東高等学校（全）	校 長 名	宮地 淳
指定名	ICT 利活用授業研究推進校		
研究主題	ICT を活用した「探究する力」「自ら学びを調整する力」「協働する力」を育む授業作り		
3年間の目標 （3年後のめ ざすべき姿）	○次の3つの力（生徒の姿）を育む授業を実現する ・探究する力「生徒が自分で知りたいと思うことを、探究しようとする姿」 ・自ら学びを調整する力「学んだことや考えたことを自ら振り返るとともに教師と共有し、評価やアドバイスを受けて次の学びに活かそうとする姿」 ・協働する力「学びや探究を他の生徒と共有しながら行い、お互いに学びを深めていく姿」 ○「すべての科目で常に」を目標に、特定の教科や教員に関わらず、必要と考えた時は常に ICT を活用した授業を行えるようにする。 ○「教科をチームに」を目標に、組織的な授業改善を行う文化を根付かせる。		
3年間の 研究内容	(1) 研究主題の設定理由とこれまでの本校における取組 OECD が進める「OECD Future of Education and Skills 2030 プロジェクト」では、「生徒が自分の受ける教育において能動的な役割を果たす」ことが重要とされている⁽¹⁾。本研究では、ICT を利活用することで、生徒が能動性を発揮しやすくなることが期待できる場面として、「探究する」「自ら学びを調整する」「協働する」という3つの場面に着目した研究主題とする。これは、本校において、これまで、「問い」をテーマとした授業研究会（研修会）を行い、「問い」を推進力とした授業づくりに教科を横断して取り組んできた積み重ねによる。これらの取り組みと ICT の活用を合わせることで、より「探究する力」の育成を進めることが期待できると考え、研究主題とした。 (1) Student Agency for 2030 仮訳 https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/student-agency/OECD_STUDENT_AGENCY_FOR_2030_Concept_note_Japanese.pdf (2) 研究の内容 ○ICT を活用した、探究的な学びを取り入れた授業実践 ○ICT を活用した、協働的な学びを取り入れた授業実践 ○生徒が「自ら学びを調整する」ための、1人1台端末や学習用クラウドサービスを活用した、評価や指導のあり方 具体的には、生徒の「3つの力」を育み、その力を発揮するような授業実践を研究する上で、以下のような様々な ICT やメディアの活用法のあり方を探究する。 ○1人1台端末やスマートフォンなどのさまざまな端末の、授業における適切な活用法 ○ロイロノートやGoogle Classroomなどの学習用クラウドサービスの適切な活用法 ○アナログ（ノートなど紙を媒体に記録する学習スタイル）とデジタル（デジタルワークシートなどの端末上で記録する学習スタイル）の適切な活用法 (3) 成果の検証方法及び成果指標 ・生徒アンケートの分析 1人1台端末やスマートフォン、学習用クラウドサービスを、授業の学習や、自らの探究にどのように活用しているか、教師からの ICT を活用したフィードバックがどのように学びの調整に役立っているかを調査し、分析する。 ・授業実践の分析 様々な教科において、「探究する力」「協働する力」「自ら学びを調整する力」を育もうとする授業の実践を計画し、それを実施できていたかを評価する。授業における様々な ICT の適切な活用法を考案し、その授業実践の過程で得られた成果や課題をとりまとめる。 ・評価方法 生徒の「自ら学びを調整する力」を育むために、教師が ICT を活用する等して授業で行う評価方法を各教科で考案する。それぞれの方法によって、生徒が学習活動の中で自らの学びを調整することができていたかを評価し、成果や課題をとりまとめる。		

研究計画の概要	令和4年度 ○目標 ・すべての教科で ICT を利活用し、生徒が3つの力を発揮することを目指した授業実践に取り組む。 ・研修の仕方、授業研究の進め方、授業実践の共有の仕方それぞれについて、方法を確立する。 ・公開研究授業を実施し、多くの知見を取り入れる。 ○手立て ・ICT を利活用した生徒が3つの力を発揮することを目指したモデル授業の計画・実施・評価（1人1台端末を導入している第1学年の授業を中心に実践を行う） ・研修の実施（集合研修、教科別研修、職員会議後などのミニ研修） ・授業研究会の実施 ・学習用クラウドサービスや端末の操作・運用マニュアルとガイドブックの作成 ・学習用クラウドサービスや端末の操作・運用マニュアルやガイドブック、モデル授業実践をまとめたポータルサイトの作成
令和5年度	○目標 ・多くの教員がより多くの授業で ICT を利活用し、生徒が3つの力を発揮することを目指した授業実践を行う。 ・研修の仕方、授業研究の進め方、授業実践の共有の仕方それぞれについて、改善を行う。 ・公開研究授業を実施し、他校への研究成果の情報提供につとめる。 ○手立て ・1人1台端末を導入している第1・2学年の授業を中心に実践を行う ・研修の実施（集合研修、教科別研修、職員会議後などのミニ研修） ・授業研究会の実施 ・学習用クラウドサービスや端末の操作・運用マニュアルとガイドブックの改善 ・授業実践をまとめたポータルサイトを活用した、授業実践の蓄積と共有
令和6年度	○目標 ・全ての教員が大半の授業で ICT を利活用し、生徒が3つの力を発揮することを目指した授業実践を行う。 ・研修の仕方、授業研究の進め方、授業実践の共有の仕方それぞれについて、改善を行う。 ・公開研究授業を実施し、他校への研究成果の情報提供につとめる。 ○手立て ・全学年の授業を中心に実践を行う ・研修の実施（集合研修、教科別研修、職員会議後などのミニ研修） ・授業研究会の実施 ・学習用クラウドサービスや端末の操作・運用マニュアルとガイドブックの改善 ・授業実践をまとめたポータルサイトを活用した、授業実践の蓄積と共有
研究体制	指導助言者 ↑↓ 教務 G ICT 利活用授業推進プロジェクトチーム 依頼とフィードバック 教科 学年 ・計画の作成 ・研修の実施、マニュアルの作成 ・研究結果のとりまとめ ・授業研究の実施 ・端末のトラブルなどの生徒対応
その他特記事項	

(様式1)

1-2. 県立高校指定校事業（令和7年度指定） 3年間計画書

学 校 名	生田東高等学校（  ・定・通）	校 長 名	水上 吉央
指定名	I C T利活用授業研究推進校		
研究主題	生成 AI や ICT 教材・機器を効果的に利活用して、深い学びを実現する。 深い学びが見られる授業とは『探究する姿』『協働する姿』『自ら学びを調整する姿』の3つの姿が見られ、『思考力・判断力・表現力』が育まれる授業と定義し、これを実現する。		
3年間の目標 （3年後のめ ざすべき姿）	○生成 AI や ICT 教材・機器を効果的に利活用して、深い学びを実現する。については、次の3つの姿（「探究する姿」「協働する姿」「自ら学びを調整する姿」）が見られる授業を実現することで、結果として「思考力・判断力・表現力」が育まれる授業を実現する ・『探究する姿』 自ら疑問や問いを生み出し続けるとともに、それを解決するためのプロセスを思考判断しながら、主体的に探究していく姿 ・『協働する姿』 問題の解決や目標の実現を協働しながら達成するために、必要な役割分担や協働方法を自ら見出し、自分の考えを適切に表現し合いながら、互いに学びを深めていく姿 ・『自ら学びを調整する姿』 学んだことや考えたことを自ら振り返るとともに、評価やアドバイスを基に自ら次の学びに活かそうとする姿(個別最適な学びの実現) 以上の3つの姿が、全ての教科で・いつでも、見られるようになることを目指す ○『教科をチームに』の合言葉のもと、『チームいくひ』で、組織的に授業改善を行う文化を定着させる。		
3年間の 研究内容	(1) 研究主題の設定理由とこれまでの本校における取組 3つの姿が見られる授業を目指した3年間の研究により、それらの姿が表れた授業実践が数多く積み重ねられてきた。同時に、「教科をチームに」を現実のものとして授業改善に取り組む体制や文化も構築できている。また、リーディング DX ハイスクール生成 AI パイロット校に指定されたことを契機に、生成 AI を活用した授業実践も多く行ってきた。 目標とする生徒の姿は、学習指導要領で述べられている「生きる力」など将来的に求められる人物像をもとに描いている。その背景に大きな変化はないため、次の3年間の目標を定めるにあっても、3つの姿には変更の必要はないと考えた。これらの背景から、今回は、これまで以上に生徒の主体性が発揮された3つの姿 — 「探究する姿」「協働する姿」「自ら学びを調整する姿」が見られる授業を目指すことを、研究主題とすることとした。		
	(2) 研究の内容 ○生成 AI を効果的に活用した授業実践 ○『問と回答の共有』を推進力とした授業づくりに教科を横断して取り組む。 ○ICT を効果的に活用した、探究する姿、協働する姿が見られる授業実践 ○生徒が「自ら学びを調整する」ための、1人1台端末や学習用クラウドサービスを活用した、評価や指導のあり方 具体的には、生徒の「3つの力」を育み、その力を発揮するような授業実践を研究する上で、以下のような様々な ICT やメディアの活用法のあり方を探究する。 ・1人1台端末や スマートフォンなどのさまざまな端末の、授業における適切な活用法 ・生成 AI の授業における適切な活用法 ・ロイロノートや Google Classroom などの学習用クラウドサービスの適切な活用法 ・アナログ（ノートなど紙を媒体に記録する学習スタイル）とデジタル（デジタルワークシートなどの端末上で記録する学習スタイル）の適切な活用法 ○以上を学校全体で風通しよく取り組めるための環境整備 ・教科をチームに、学校をチームにするための研修会の実施 ・ストレスフリーに ICT 教材を使用するためのネットワークやソフト、ハードの研究		

	(3) 成果の検証方法及び成果指標 ・生徒アンケートの分析 デバイスや生成AI、学習用クラウドサービスを、授業の学習や自らの探究にどのように活用しているか、教師からのICTを活用したフィードバックがどのように学びの調整に役立っているかを調査し、分析する。 ・授業実践の分析 すべての教科において、「探究する力」「協働する力」「自ら学びを調整する力」を育もうとする授業の実践を計画し、それを実施できていたかを評価する。授業における様々なICTや生成AIの適切な活用法を考案し、その授業実践の過程で得られた成果や課題をとりまとめる。 ・評価方法 生徒の「自ら学びを調整する力」を育むために、教師がICTを活用する等して授業で行う評価方法を各教科で考案する。それぞれの方法によって、生徒が学習活動の中で自らの学びを調整することができていたかを評価し、成果や課題をとりまとめる。	
研究計画の概要	令和7年度	○目標 ・教師の提示した問いに加え、生徒自身が生み出した問いを推進力とする授業づくりを行う。 ・問いを解決するプロセスを、生徒自身が選択することができる授業づくりを行う。 ・他校訪問や公開研究授業の実施などで、県全体へ研究成果の情報提供につとめる。
	令和8年度	○目標 ・協働的な探究活動において、必要な役割分担や協働作業のやり方を、生徒自身に委ねる授業づくりを行う。 ・限られた時間の中で、協働的な探究活動を効率的に行うことができる授業づくりを行う。
	令和9年度	○目標 ・ここまで積み重ねた実践を振り返り、より多くの教科・単元で、3つの姿が見られる授業づくりを行う。 ・組織的な授業づくりを継続的に行うために、効果的な授業研究のあり方をまとめ、翌年以降の実践につなげる。 ・持続的に授業研究を行うことができる組織づくりのためのフレームワークを定式化し、広く広報する。
	○手立て ・全学年の授業を中心に実践を展開 ・研修の実施（集合研修、教科別研修、職員会議後などのミニ研修） ・授業研究会の実施 ・Teamsを活用した、授業実践の蓄積と共有 ・持続的に授業研究を行うことができる組織づくりのためのフレームワークの定式化	
研究体制	・研究ICTGを中心に、各教科にICT担当を置き、教科が主体的に授業研究に取り組むよう促す。 ・「教科をチームに」をモットーに、組織的に取り組む体制を取る。 ・専修大学・鶴田先生を指導助言者として取り組む。	
他特記事項		

(様式2)

1-3-1. 県立高校指定校事業（令和4年度指定）単年度計画書

学 校 名	県立生田東高等学校高等学校（全）	校 長 名	宮地淳
指 定 名	ICT 利活用授業研究推進校	年 度	令和4年度
研究主題	ICT を活用した「探究する力」「自ら学びを調整する力」「協働する力」を育む授業作り		
本年度の研究内容	(1) 本年度の目標 ・すべての教科で ICT を利活用し、生徒が3つの力を発揮することを目指した授業実践に取り組む。 ・研修の仕方、授業研究の進め方、授業実践の共有の仕方それぞれについて、方法を確立する。 ・公開研究授業を実施し、多くの知見を取り入れる。 (2) 目標実現のための具体的な手立て ICT を利活用した生徒が3つの力を発揮することを目指したモデル授業の計画・実施・評価（1人1台端末を導入している第1学年の授業を中心に実践を行う） ・研修の実施（集合研修、教科別研修、職員会議後などのミニ研修） 集合研修 4月・6月（予定） 教科別研修 5月（予定） ミニ研修会 毎回の職員会議後 ・授業研究会の実施 先行教科でのモデル授業の作成と実践（6月予定） すべての教科での研究授業の実施（10月予定） 公開研究授業の実施（1月予定） ・学習用クラウドサービスや端末の操作・運用マニュアルとガイドブックの作成 ・学習用クラウドサービスや端末の操作・運用マニュアルやガイドブック、モデル授業実践をまとめたポータルサイトの作成 (3) 成果の検証方法及び成果指標 ・生徒アンケートの分析 1人1台端末やスマートフォン、学習用クラウドサービスを、授業の学習や、自らの探究にどのように活用しているか、教師からの ICT を活用したフィードバックがどのように学びの調整に役立っているかを調査し、分析する。 授業評価アンケートにおける指定質問項目について、以下の数値を目標とする。 2：単元（内容のまとまり）の学習の中で、他者の考えを知り、自らの考えを広げ深める機会がある 3.2 3：単元（内容のまとまり）の学習の中で、課題について自分の考えをまとめたり、解決方法について考える場面がある 3.2 6：授業で得た知識をもとに、自分の考えをまとめたり、課題の解決方法を考えたりすることができた 3.2 魅力と特色アンケートのうち指定された次の質問項目について、以下の数値を目標とする。 「課題の発見と解決に向けて 主体的に考えたり、発表しあうなどの協働的な学習活動を行うことによって、中学生のときよりも 思考力・判断力・表現力を高めることができたと思いますか。」 「1. そう思う」の割合 28% ・授業実践の分析 様々な教科において、「探究する力」「協働する力」「自ら学びを調整する力」を育もうとする授業の実践を計画し、それを実施できていたかを評価する。授業における様々な ICT の適切な活用法を考案し、その授業実践の過程で得られた成果や課題をとりまとめる。 ・評価方法 生徒の「自ら学びを調整する力」を育むために、教師が ICT を活用する等して授業で行う評価方法を各教科で考案する。それぞれの方法によって、生徒が学習活動の中で自らの学びを調整することができていたかを評価し、成果や課題をとりまとめる。		
その他 特記事項			

(様式2)

1-3-2. 令和5年度 県立高校指定校事業（令和4年度指定）単年度計画書

学 校 名	県立生田東高等学校高等学校（全）	校 長 名	宮地淳																								
指 定 名	ICT 利活用授業研究推進校	年 度	令和5年度																								
研究主題	ICT を活用した「探究する力」「自ら学びを調整する力」「協働する力」を育む授業作り																										
本年度の研究内容	(1) 本年度の目標 ・多くの教員がより多くの授業で ICT を利活用し、生徒が3つの力を発揮することを目指した授業実践を行う。 ・研修の仕方、授業研究の進め方、授業実践の共有の仕方それぞれについて、改善を行う。 ・公開研究授業を実施し、他校への研究成果の情報提供につとめる。 (2) 目標実現のための具体的な手立て ・1人1台端末を導入している第1・2学年の授業を中心に実践を行う。 ・研修の実施（集合研修、教科別研修、職員会議後などのミニ研修） 集合研修 4月・6月（予定） 教科別研修 5月・11月・3月（予定） ミニ研修会 毎回の職員会議後 集合研修は、昨年度の課題として見えてきた、「探究的な授業作り」に注目して行う。 ・公開研究授業（11月予定） ・学習用クラウドサービスや端末の操作・運用マニュアルとガイドブックの改善 ・授業実践をまとめたポータルサイトを活用した、授業実践の蓄積と共有 (3) 成果の検証方法及び取組指標 ◆検証方法 ・生徒アンケートの分析 1人1台端末やスマートフォン、学習用クラウドサービスを、授業の学習や、自らの探究にどのように活用しているか、教師からの ICT を活用したフィードバックがどのように学びの調整に役立っているかを調査し、分析する。 ・授業実践の分析 様々な教科において、「探究する力」「協働する力」「自ら学びを調整する力」を育もうとする授業の実践を計画し、それを実施できていたかを評価する。授業における様々な ICT の適切な活用法を考案し、その授業実践の過程で得られた成果や課題をとりまとめる。 ・評価方法 生徒の「自ら学びを調整する力」を育むために、ICT の活用を含めて教師が働きかける方法を各教科で考案する。それぞれの方法によって、生徒が学習活動の中で自らの学びを調整することができていたかを評価し、成果や課題をとりまとめる。 ◆取組指標 授業評価アンケート <table border="1"><thead><tr><th colspan="4">この授業の中では、ICT 機器（パソコン・スマートフォン等）を有効に活用していたと思う</th></tr><tr><th>回答</th><th>令和4年度（実績）</th><th>令和5年度（目標）</th><th>令和6年度</th></tr></thead><tbody><tr><td>4. かなり当てはまる</td><td>41.40%</td><td>45%</td><td>%</td></tr><tr><td>3. ほぼ当てはまる</td><td>40.55%</td><td>43%</td><td>%</td></tr><tr><td>2. あまり当てはまらない</td><td>12.77%</td><td>9%</td><td>%</td></tr><tr><td>1. ほとんど当てはまらない</td><td>5.28%</td><td>3%</td><td>%</td></tr></tbody></table>			この授業の中では、ICT 機器（パソコン・スマートフォン等）を有効に活用していたと思う				回答	令和4年度（実績）	令和5年度（目標）	令和6年度	4. かなり当てはまる	41.40%	45%	%	3. ほぼ当てはまる	40.55%	43%	%	2. あまり当てはまらない	12.77%	9%	%	1. ほとんど当てはまらない	5.28%	3%	%
この授業の中では、ICT 機器（パソコン・スマートフォン等）を有効に活用していたと思う																											
回答	令和4年度（実績）	令和5年度（目標）	令和6年度																								
4. かなり当てはまる	41.40%	45%	%																								
3. ほぼ当てはまる	40.55%	43%	%																								
2. あまり当てはまらない	12.77%	9%	%																								
1. ほとんど当てはまらない	5.28%	3%	%																								

	この授業の中では、自分の疑問や考えを記録したり、自分が知りたいと思ったことを探究したりする用途で、ICT 機器を有効活用していたと思う			
	回答	令和4年度（実績）	令和5年度（目標）	令和6年度
	4. かなり当てはまる	39.53%	43%	%
	3. ほぼ当てはまる	42.00%	43%	%
	2. あまりあてはまらない	13.17%	9%	%
	1. ほとんどあてはまらない	5.31%	5%	%
	この授業の中では、クラスメートの考えに触れたり、協力して作業したりする場面で、ICT 機器を有効活用していたと思う			
	回答	令和4年度（実績）	令和5年度（目標）	令和6年度
	4. そう思う	39.04%	43%	%
	3. どちらかといえばそう思う	41.79%	43%	%
	2. どちらかといえば満足していない	13.50%	9%	%
	1. ほとんどあてはまらない	5.67%	5%	%
	この授業の中では、クラスメートの考えに触れたり、協力して作業したりする場面で、ICT 機器を有効活用していたと思う			
	回答	令和4年度（実績）	令和5年度（目標）	令和6年度
	4. そう思う	40.12%	43%	%
	3. どちらかといえばそう思う	41.11%	43%	%
	2. どちらかといえば満足していない	13.36%	9%	%
	1. ほとんどあてはまらない	5.41%	5%	%
	魅力と特色ある県立高校づくりについてのアンケート（令和4年度卒業生対象）			
	質問項目 A-4：高校生活において、課題の発見と解決に向けて主体的に考えたり、発表しあうなどの協働的な学習活動を行うことによって、中学生の時よりも思考力・判断力・表現力を高めることができたと思いますか			
	回答	令和4年度（実績）	令和5年度（目標）	令和6年度
	4. そう思う	41.7%	43%	%
	3. どちらかといえばそう思う	45.5%	46%	%
	2. どちらかといえば満足していない	8.1%	7%	%
	1. ほとんどあてはまらない	4.7%	4%	%
その他 特記事項				

(様式2)

1-2-3. 令和6年度 県立高校指定校事業（令和4年度指定）単年度計画書

学 校 名	県立生田東高等学校高等学校（全）	校 長 名	水上 吉央																								
指 定 名	ICT 利活用授業研究推進校	年 度	令和6年度																								
研究主題	ICT を活用した「探究する力」「自ら学びを調整する力」「協働する力」を育む授業作り																										
本年度の研究内容	(1) 本年度の目標 ・全ての教員が大半の授業で ICT を利活用し、生徒が3つの力を発揮することを目指した授業実践を行う。 ・研修の仕方、授業研究の進め方、授業実践の共有の仕方それぞれについて、改善を行う。 ・公開研究授業を実施し、他校への研究成果の情報提供につとめる。 (2) 目標実現のための具体的な手立て ・全学年の授業を中心に実践を行う ・研修の実施（集合研修、教科別研修、職員会議後などのミニ研修） 集合研修 4月・6月（予定） 教科別研修 5月・11月・3月（予定） ミニ研修会 毎回の職員会議後 集合研修は、「自ら学びを調整する力」に注目して行う。 ・公開研究授業（11月予定） ・学習用クラウドサービスや端末の操作・運用マニュアルとガイドブックの改善 ・授業実践をまとめたポータルサイトを活用した、授業実践の蓄積と共有 (3) 成果の検証方法及び取組指標 ◆検証方法 ・生徒アンケートの分析 1人1台端末やスマートフォン、学習用クラウドサービスを、授業の学習や、自らの探究にどのように活用しているか、教師からの ICT を活用したフィードバックがどのように学びの調整に役立っているかを調査し、分析する。 ・授業実践の分析 様々な教科において、「探究する力」「協働する力」「自ら学びを調整する力」を育もうとする授業の実践を計画し、それを実施できていたかを評価する。授業における様々な ICT の適切な活用法を考案し、その授業実践の過程で得られた成果や課題をとりまとめる。 ・評価方法 生徒の「自ら学びを調整する力」を育むために、ICT の活用を含めて教師が働きかける方法を各教科で考案する。それぞれの方法によって、生徒が学習活動の中で自らの学びを調整することができていたかを評価し、成果や課題をとりまとめる。 ◆取組指標 授業評価アンケート <table border="1"><thead><tr><th colspan="4">この授業の中では、ICT 機器（パソコン・スマートフォン等）を有効に活用していたと思う</th></tr><tr><th>回答</th><th>令和4年度（実績）</th><th>令和5年度（実績）</th><th>令和6年度（目標）</th></tr></thead><tbody><tr><td>4. かなり当てはまる</td><td>41.40%</td><td>52.12%</td><td>53%</td></tr><tr><td>3. ほぼ当てはまる</td><td>40.55%</td><td>36.85%</td><td>39%</td></tr><tr><td>2. あまりあてはまらない</td><td>12.77%</td><td>7.61%</td><td>6%</td></tr><tr><td>1. ほとんどあてはまらない</td><td>5.28%</td><td>3.42%</td><td>2%</td></tr></tbody></table>			この授業の中では、ICT 機器（パソコン・スマートフォン等）を有効に活用していたと思う				回答	令和4年度（実績）	令和5年度（実績）	令和6年度（目標）	4. かなり当てはまる	41.40%	52.12%	53%	3. ほぼ当てはまる	40.55%	36.85%	39%	2. あまりあてはまらない	12.77%	7.61%	6%	1. ほとんどあてはまらない	5.28%	3.42%	2%
この授業の中では、ICT 機器（パソコン・スマートフォン等）を有効に活用していたと思う																											
回答	令和4年度（実績）	令和5年度（実績）	令和6年度（目標）																								
4. かなり当てはまる	41.40%	52.12%	53%																								
3. ほぼ当てはまる	40.55%	36.85%	39%																								
2. あまりあてはまらない	12.77%	7.61%	6%																								
1. ほとんどあてはまらない	5.28%	3.42%	2%																								

	この授業の中では、自分の疑問や考えを記録したり、自分が知りたいと思ったことを探究したりする用途で、ICT 機器を有効活用していたと思う			
	回答	令和4年度（実績）	令和5年度（実績）	令和6年度（目標）
	4. かなり当てはまる	39.53%	48.90%	50%
	3. ほぼ当てはまる	42.00%	39.68%	42%
	2. あまりあてはまらない	13.17%	8.12%	6%
	1. ほとんどあてはまらない	5.31%	3.29%	2%
	この授業の中では、クラスメートの考えに触れたり、協力して作業したりする場面で、ICT 機器を有効活用していたと思う			
	回答	令和4年度（実績）	令和5年度（実績）	令和6年度（目標）
	4. そう思う	39.04%	46.35%	50%
	3. どちらかといえばそう思う	41.79%	40.80%	42%
	2. どちらかといえば満足していない	13.50%	9.17%	6%
	1. ほとんどあてはまらない	5.67%	3.68%	2%
	この授業の中では、自分が学習したことをまとめたり、振り返ったりする場面で、ICT 機器を有効活用していたと思う			
	回答	令和4年度（実績）	令和5年度（実績）	令和6年度（目標）
	4. そう思う	40.12%	48.41%	50%
	3. どちらかといえばそう思う	41.11%	40.16%	42%
	2. どちらかといえば満足していない	13.36%	8.00%	6%
	1. ほとんどあてはまらない	5.41%	3.43%	2%
	魅力と特色ある県立高校づくりについてのアンケート（令和5年度卒業生対象）			
	質問項目 A-4：高校生活において、課題の発見と解決に向けて主体的に考えたり、発表しあうなどの協働的な学習活動を行うことによって、中学生の時よりも思考力・判断力・表現力を高めることができたと思いますか			
	回答	令和4年度（実績）	令和5年度（実績）	令和6年度（目標）
	4. そう思う	41.7%	31.6%	43%
	3. どちらかといえばそう思う	45.5%	52.6%	46%
	2. どちらかといえば満足していない	8.1%	10.5%	7%
	1. ほとんどあてはまらない	4.7%	5.3%	4%
その他 特記事項				

(様式2)

1-4-1. 令和7年度 県立高校指定校事業（令和7年度指定）単年度計画書

学 校 名	生田東高等学校（ 全 ・定・通）	校 長 名	水上 吉央																								
指 定 名	I C T利活用授業研究推進校	年 度	令和7年度																								
研究主題	生成 AI や ICT 教材・機器を効果的に利活用して、深い学びを実現する。 深い学びが見られる授業とは『探究する姿』『協働する姿』『自ら学びを調整する姿』の3つの姿が見られ、『思考力・判断力・表現力』が育まれる授業と定義し、これを実現する。																										
本年度の研究内容	(1) 本年度の目標 ・教師の提示した問いに加え、生徒自身が生み出した問いを推進力とする授業づくりを行う。 ・問いを解決するプロセスを、生徒自身が選択することができる授業づくりを行う。 ・他校訪問や公開研究授業の実施などで、県全体へ研究成果の情報提供につとめる。 (2) 目標実現のための具体的な手立て ・全学年の授業を中心に実践を行う ・研修の実施（集合研修、教科別研修、職員会議後などのミニ研修） 集合研修 4月（2回）・11月（予定） 教科別研修 5月・7月・9月・12月・1月（予定） ミニ研修会 毎回の職員会議後 集合研修は、「問いを推進力とする授業づくり」に注目して行う。 ・公開研究授業(11月予定)の実施 ・Teams を活用した、授業実践の蓄積と共有 ・持続的に授業研究を行うことができる組織づくりのためのフレームワークの定式化 (3) 成果の検証方法及び取組指標 ◆検証方法 生徒アンケートの分析 デバイスや生成 AI、学習用クラウドサービスを、授業の学習や自らの探究にどのように活用しているか、教師からの ICT を活用したフィードバックがどのように学びの調整に役立っているかを調査し、分析する。 ・授業実践の分析 すべての教科において、「探究する力」「協働する力」「自ら学びを調整する力」を育もうとする授業の実践を計画し、それを実施できていたかを評価する。授業における様々な ICT や生成 AI の適切な活用法を考案し、その授業実践の過程で得られた成果や課題をとりまとめる。 ・評価方法 生徒の「自ら学びを調整する力」を育むために、教師が ICT を活用する等して授業で行う評価方法を各教科で考案する。それぞれの方法によって、生徒が学習活動の中で自らの学びを調整することができていたかを評価し、成果や課題をとりまとめる。 ◆取組指標 ※令和7年度について、目標値を記載してください。 授業評価アンケート <table border="1"><thead><tr><th colspan="4">単元（内容のまとめ）の学習の中で、課題について自分の考えをまとめたり、解決方法について考える場面がある。</th></tr><tr><th>回答</th><th>令和7年度</th><th>令和8年度</th><th>令和9年度</th></tr></thead><tbody><tr><td>4. かなり当てはまる</td><td>35%</td><td>%</td><td>%</td></tr><tr><td>3. ほぼ当てはまる</td><td>35%</td><td>%</td><td>%</td></tr><tr><td>2. あまり当てはまらない</td><td>20%</td><td>%</td><td>%</td></tr><tr><td>1. ほとんど当てはまらない</td><td>10%</td><td>%</td><td>%</td></tr></tbody></table>			単元（内容のまとめ）の学習の中で、課題について自分の考えをまとめたり、解決方法について考える場面がある。				回答	令和7年度	令和8年度	令和9年度	4. かなり当てはまる	35%	%	%	3. ほぼ当てはまる	35%	%	%	2. あまり当てはまらない	20%	%	%	1. ほとんど当てはまらない	10%	%	%
単元（内容のまとめ）の学習の中で、課題について自分の考えをまとめたり、解決方法について考える場面がある。																											
回答	令和7年度	令和8年度	令和9年度																								
4. かなり当てはまる	35%	%	%																								
3. ほぼ当てはまる	35%	%	%																								
2. あまり当てはまらない	20%	%	%																								
1. ほとんど当てはまらない	10%	%	%																								

	授業で得た知識をもとに、自分の考えをまとめたり、課題の解決方法を考えたりすることができたか？			
	回答	令和7年度	令和8年度	令和9年度
	4. かなり当てはまる	35%	%	%
	3. ほぼ当てはまる	35%	%	%
	2. あまりあてはまらない	20%	%	%
	1. ほとんどあてはまらない	10%	%	%
	(学校設定) この授業の中では、ICT 機器や生成 AI を有効的に活用されていたか？			
	回答	令和7年度	令和8年度	令和9年度
	4. そう思う	40%	%	%
	3. どちらかといえばそう思う	40%	%	%
	2. どちらかといえば満足していない	15%	%	%
	1. ほとんどあてはまらない	5%	%	%
	魅力と特色ある県立高校づくりについてのアンケート（令和5年度卒業生対象）			
	主体的な学習活動を通じて、思考力・判断力・表現力等を高めることができたと思う高校生の割合			
	回答	令和7年度	令和8年度	令和9年度
4. そう思う	35%	%	%	
3. どちらかといえばそう思う	35%	%	%	
2. どちらかといえば満足していない	20%	%	%	
1. ほとんどあてはまらない	10%	%	%	
その他 特記事項				

1-5 プロジェクト全体計画

1. プロジェクト目標の設定の意図

ICT 利活用授業という名称から、利用率など ICT を利用することを目標としてしまいがちである。しかし、それでは「なぜ ICT を利用するのか」という重要な議論に答えないまま、プロジェクトが進んでしまう懸念があった。また、どのように ICT を利用するのか、という議論にも進みにくい。

そこで、本プロジェクトでは、授業で見られることが望ましい生徒の姿を目標として設定し、それを実現するために ICT を活用する、という形とした。その望ましい生徒の姿が、計画書にも記載した以下の3つになる。

- 探究する力「生徒が自分で知りたいと思うことを、探究しようとする姿」
- 自ら学びを調整する力「学んだことや考えたことを自ら振り返るとともに教師と共有し、評価やアドバイスを受けて次の学びに活かそうとする姿」
- 協働する力「学びや探究を他の生徒と共有しながら行い、お互いに学びを深めていく姿」

上記の目標には ICT という文言が含まれていないが、ICT を活用することで実現しやすい姿であることを意図して目標の文章を作成している。この姿を ICT の利用を抜きに実現する、むしろ ICT を利用しない方が実現しやすい、ということも理論的には考えられる。しかし、そのような結果が出た場合は、それも一つの研究成果として重要であると、本プロジェクトでは考えている。

2. プロジェクトのスコープ

プロジェクトのスコープとは、そのプロジェクトの担当する範囲のことである。目標がゴールや目指す方向であるとするなら、スコープはそのためにやるべき範囲という意味になる。プロジェクトの開始にあたって、以下のようにスコープを定めた。

- 3つの視点での授業改善の推進
 - ✓ ICT 機器の活用
 - ✓ 協働的・探究的な活動の導入
 - ✓ 指導と評価の一体化を効率的に進める
- ICT 機器と授業改善に関わる研修及び研究授業の推進
- 1人1台端末の推進
 - ✓ 機種を選定及び管理運用方法の策定
 - ✓ ネットワーク環境整備の推進

1年間たってみると、このスコープの表現を実態に合わせて改める必要が生まれている。実態に合わせたスコープは以下の通りである。

- 3つの姿を目指した授業改善・研究の推進
 - ✓ 教科が主役になった授業・研究が行われるような仕掛け作り
 - ✓ 各教科の取り組みの取りまとめ
- 研修会の実施
 - ✓ 授業改善のための研修
 - ✓ ICT 機器の利用方法に関する研修
- 一人一台端末利用の推進
 - ✓ 機種選定方針の策定や実施
 - ✓ 設定のサポート
 - ✓ 保守体制の整備
- 環境整備
 - ✓ ネットワーク環境の整備
 - ✓ プロジェクタ等の視聴覚環境の整備
- 教育用アプリケーションの導入・運用
 - ✓ Google workspace やロイロノートの管理・運用
 - ✓ 導入するアプリケーションの選定

スコープ中の重要な要素を図にしたものが図1である。この3つが、それぞれ重要であり、どれが欠けても ICT 利活用は上手くいかなくなってしまう。授業をよくするために、一人一台端末をスムーズに使用するため必要があるし、そのためには環境整備が必要となる。環境整備が進めば、より手軽に ICT を使用することができ、授業改善につながる、という好循環を産むことができる。

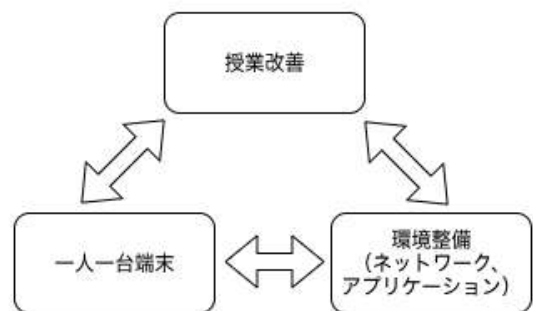


図1 スコープの柱

このスコープは、一人一台端末の導入と、ICT 利活用授業研究推進事業という、異なる施策を両方とも取り入れたものになっている。本校では、2022 年度に同時に始まった施策であるが、これは単なる偶然であった。しかし、このように並べてみると、本来は同時に取り組まなければならない施策であることは明確である。本校は幸運にも指定校となったため、授業改善にも焦点があつまり、先に述べた好循環を産むことができたと考えている。この教訓から、ICT 利活用授業研

究推進校の指定が外れたあとも、授業改善に焦点を当て続けることが重要であることがわかる。

3. プロジェクトの体制

3.1 学校全体の体制

学校全体のプロジェクト体制を図2に示す。



図2 プロジェクト体制

体制のポイント、教科内と学年内にそれぞれ担当者を置いたことである。この狙いの背景は、PJT チームが方針の策定と実施を全て担うのではなく、PJT チームは方針の策定とサポート、教科や学年が実施の主体者、という役割分担を作ることにある。この究極の狙いは、学校全体で取り組む、という文化を実現することである。

ICT という一部に詳しい人がいて、何かあればその人に聞く、ということになりがちである。これでは、その人がいなくなれば、ICT を活用することは難しくなってしまう。それを、何かあれば、まず学年の先生や教科の先生に聞く、という文化にすることで、学年や教科のノウハウとなるため、そう簡単には失われないものになる。

この部分での成果について述べると、学年の担当者や教科の担当者の役割の発揮はまだ限定的である。生徒の一人一台端末のサポートについては、機能している面もある。しかし、ICT についてわからないことがあると、教科の枠を超えてプロジェクトメンバーに質問が投げられる場面がとて多い。これは、風通しがよい職員室であると評価もできるが、結局はノウハウが偏っている証拠であるといえる。

聞かれた質問に答えないことには抵抗があるが、「それはまずは教科の先生に聞いてみよう」と促すことが必要だと考える。少なくとも、教科の担当者のいる場で答えるようにすることで、教科の担当者にもノウハウを蓄積することができる。このような意識づけが必要であると考えられる。

3.2 プロジェクトチームの位置付け

本校では、ICT 利活用授業研究推進に関わるプロジェクトチームを結成するとともに、教務 G 内の小グループとして位置付けた。基本的にメンバーは ICT 利活用プロジェクトに専念することとなっている。メンバーの役割を以下に示す。

表1 プロジェクトメンバーの構成

教務 G リーダ(兼務)	渉外、企画会議対応
ICT プロジェクトリーダー(専任)	全体の管理
メンバー1(専任)	プロジェクトの推進
メンバー2(専任)	プロジェクトの推進
メンバー3(専任)	プロジェクトの推進
メンバー4(教務 G 兼務)	プロジェクトの推進
メンバー5(教務 G 兼務)	プロジェクトの推進

メンバーは 6 人で、構成は 3 人が兼務、3 人が専任となっていた。スコープの広さに対して、このメンバーの人数は限界であった。各メンバーのモチベーションの高さによって、順調に進めることができたが、平均的なメンバーを想定するのであれば、5 人程度の専任者が必要となると考えられる。十分とは言えないとはいえ、独立したグループと専任メンバーを置けたことが、1 年目から推進できた大きな要因であった。

3.3 プロジェクトチームから独立したグループへ移行

3.2 で述べたプロジェクトチームで2年間運営を行った結果、ほとんどの教員が ICT を利活用しながらビジョンに沿った授業作りを試みている段階となり、立ち上げ段階のフェーズを脱することができた。また、本 PT を担当する教員の業務過多など弊害が出てきたこともあり、PT から独立したグループを立ち上げることとなった。このことにより、業務の偏りの解消をすることができ、結果として本事業をより強力に推進できる体制となった。

4. 全体方針に関する教訓

教訓をまとめると以下になる。

- ✓ 独立したグループにして、専任メンバーをアサインする
- ✓ 授業改善に目を向ける。どのような授業や教育を実現するか、という問いに真っ先に答える。
- ✓ 授業改善、一人一台、環境整備の3つを並行して進める。

このうち、独立したグループにするというのは、先行していた推進校からの聞き取りで、教訓として受け継いだものである。プロジェクトの成否は体制によって決まることがほとんどであるため、非常に重要な示唆であった。しかし、それは直接聞きに行ったから聞けただけで、行かなかったら耳にすることはなかったと考えられる。ここでのもう一つの教訓は、指定校に指定された場合は、県の指示や指導を待つことなく、直接、それまでの指定校に聞きに行くことが重要である、ということである。

2. 1人1台端末の部

2-1 端末選定の方針

1. はじめに

本校では一人一台端末として iPad を生徒に推奨している。本章ではその選定方針について述べる。

2. 選定の理由について

iPad を選定した理由は、以下の通りである。

2.1 「全ての授業でいつも」使える端末

本校では、「一人一台端末を全ての授業でいつも使える」ことを目標としている。この目標には、移動教室などに対応できる持ち運びやすさと、どこで使用しても故障しにくいという、堅牢さが求められる。iPad は軽量であるとともに、可動部品が少なく故障率がとても少ない。

また、この目標の達成には、簡単にかつ多様な使い方ができる端末であることが望ましい。その点でも iPad は、情報読み取る場面でも、キーボードを利用してコンテンツを作成する場面でも、活用しやすい。また、膨大な数のネイティブアプリがあり、芸術の分野を始め、コンテンツを作成する場面でも、パソコンよりも使いやすくかつ高度な成果物を作成することができる。そのため、職員のアイデアや生徒のアイデアを活かす使い方が見つかる可能性が高い。このように、本校の目標に沿った端末であることが第一の理由である。

2.2 保守性に優れていること

毎日、登下校において持ち運び、全ての授業で使用することを考えると、壊れにくく故障しにくいことが求められる。iPad は可動部品が少なく故障しにくいとともに、OS 自体が安定しておりほとんどトラブルがない。

なお、実績としてこの1年での故障は、落下させての破損のみであった。

2.3 陳腐化しにくいこと

学習用端末とはいえ高額であるため、学校のみならず家庭やレジャーなどのその他の場面や、卒業してからも活用できる可能性を持っていることが望ましい。この点では、Apple 社の製品はサポート期間が長く、3年間を経過しても十分に使用できる体制が整っている。また、iPad はネイティブアプリが豊富であるため、学習以外にも有用な使用方法が多様にある。そのため、費用に対する効果が非常に高い端末と言える。個人が負担し個人が管理する端末であることから、学習以外の目的も含めた費用対効果の高さという点も重要であると考え、iPad を選定した。

3. 端末の仕様について

3.1.1 令和4年度入学生 端末仕様

昨年度選定した iPad の端末仕様は、以下の通りである。

端末名	iPad(第9世代)Wi-Fiモデル
製造年	2021年以降に製造されたもの
ストレージ	64GB以上
付属品	スタイラスペン・タブレット対応キーボード ※それぞれ純正品と廉価品の2パターンが選択できること ※廉価品のキーボードはLightningケーブル接続、もしくはスマートコネクタ接続であること。 ※廉価品のスタイラスペンは、充電不要なもの。
画面サイズ	10.2インチ
LTE通信	なし
保障	メーカー保証及びオプションでの各業者の保証 問合せはコールセンターでの対応が可能なこと。
費用	端末本体・キーボード・スタイラスペン・オプション保証 ¥35,000～～¥45,000～程度

令和4年度の学校幹旋業者からの購入者は、入学者318名のうち290名であった。(iPad本体)

3.1.2 令和5年度入学生 端末仕様

今年度選定した iPad の端末仕様は、以下の通りである。

端末名	iPad(第 9 世代)Wi-Fi モデル iPad(第 10 世代)Wi-Fi モデル
製造年	2022 年以降に製造されたもの
ストレージ	64GB 以上
付属品	スタイラスペン・タブレット対応 キーボード ※それぞれ純正品と廉価品の 2パターンが選択できること ※キーボードは端末本体を保護 できること ※廉価品のキーボードは Lightning ケーブル接続、もしくは スマートコネクタ接続であること。 ※廉価品のスタイラスペンは、 充電不要なもの。
保障	メーカー保証及びオプションでの 各業者の保証 問合せはコールセンターでの対応 が可能なこと。
費用	端末本体・キーボード・スタイラ спен・オプション保証 ¥45,000～¥56,000-程度 ※端末本体が値上がりした。

令和5年度より第10世代も併売という形で、斡旋を行った。

令和5年度の学校斡旋業者からの購入者は、入学者
318名のうち270名であった。(iPad 本体)

3.1.3 令和6年度入学生 端末仕様

今年度選定した iPad の端末仕様は、以下の通りである。

端末名	iPad(第 9 世代)Wi-Fi モデル iPad(第 10 世代)Wi-Fi モデル
製造年	2023 年以降に製造されたもの
ストレージ	64GB 以上
付属品	スタイラスペン・タブレット対応キー ボード ※それぞれ純正品と廉価品の2パ ターンが選択できること ※キーボードは端末本体を保護で きること ※廉価品のキーボードは Lightning ケーブル接続、もしくはスマートコネ クト接続であること。

	※廉価品のスタイラスペンは、充 電不要なもの。
保障	メーカー保証及びオプションでの各 業者の保証 問合せはコールセンターでの対応 が可能なこと。
費用	端末本体・キーボード・スタイラス ペン・オプション保証 ¥40,000～¥57,000-程度

令和5年度同様、第9世代、第 10 世代を併売という
形で、斡旋を行った。

令和6年度の学校斡旋業者からの購入者は、入学者
319名のうち256名であった。(iPad 本体)

3.1.4 令和7年度入学生 端末仕様

今年度選定した iPad の端末仕様は、以下の通りで
ある。

端末名	iPad(第 10 世代)Wi-Fi モデル
製造年	2024 年以降に製造されたもの
ストレージ	128GB 以上
付属品	スタイラスペン・タブレット対応キー ボード ※それぞれ純正品と廉価品の2パ ターンが選択できること ※キーボードは端末本体を保護で きること ※廉価品のキーボードは Lightning ケーブル接続、もしくはスマートコネ クト接続であること。 ※廉価品のスタイラスペンは、充 電不要なもの。
保障	メーカー保証及びオプションでの各 業者の保証 問合せはコールセンターでの対応 が可能なこと。
費用	端末本体・キーボード・スタイラス ペン・オプション保証 ¥49,000～¥57,000-程度

令和7年度は第 10 世代のみ斡旋を行った。しかし
Apple から第 11 世代の販売発表が斡旋する数日前
にあり、令和7年度の学校斡旋業者からの購入者は、
入学者 317名のうち218名であった。(iPad 本体)

2-2-1. 令和4年度の状況

1. はじめに

1学年生徒を対象に、一人一台端末に関するアンケートを前期・後期の二度に分けて実施した。

本章では、そのアンケートの回答をもとに、今年度の一人一台端末に関する状況をまとめていく。

2. 実際に生徒が使用している端末

2.1 学習用端末について

「あなたが使用している学習用の1人1台端末はなんですか(スマートフォンは除く)」という質問に対して、前期後期ともに約98%の生徒がiPadを使用しているという回答であった。ほとんどの生徒が本校が推奨するiPadを使用しているという結果となった。

2.2 学習用端末とスマートフォンの使用頻度

「あなたは授業中の学習に、スマートフォンと1人1台端末のどちらを主に使用していましたか」という質問に対して、以下のような結果となっている。

回答	前期	後期
ほとんど1人1台端末	41.2%	56.9%
やや1人1台端末	17.3%	16.4%
どちらともいえない	15.6%	13.4%
ややスマートフォン	14.9%	7.8%
ほとんどスマートフォン	11.1%	5.6%

前期と後期を比較すると、後期になって1人1台端末の使用率が増加していることが読み取れる。

その理由として、まず、教員がiPadの使用を推奨したことが考えられる。このアンケートでは、「その端末を主に利用した理由を教えてください」という質問(自由記述)も同時に行っているが、その回答として「先生からの指示があったから」「学習用に買ったものだから」というものがあった。実際に、教員としても「せっかく生徒が1人1台端末を持っているので、それを活用しなくては」という意識があり、できるだけスマートフォンではなく1人1台端末を使うように呼び掛けていた。

ただし、1人1台端末の使用率が伸びたのは、そうした受動的な理由だけではないと思われる。生徒の意見として「画面が大きいから見やすいしペンで書きやすいから」「大きいしキーボードの方が打ちやすいから」というような使い勝手の良さが挙げられていた。ロイロノートを活用し、直接ペンで書き込むようなワークシートを使用している教員も多く、そうした場面で特に1人1台端末のメリットが生かされているのだろう。

とはいえ、後期において、合わせて13.4%の生徒が「ややスマートフォン」「ほとんどスマートフォン」と答えている。使い慣れて、持ち運びが楽なスマートフォンを

選択する生徒も一定数存在している。

また、「どちらともいえない」と答えた生徒の意見に、少数ながら「用途で使い分ける」というものがあった。場面に応じてデバイスを使い分けることも、ICTを活用するうえで大切な能力である。今後は1人1台端末をメインに置きつつも、こうした能力を育んでいきたい。

3. 1人1台端末に対する生徒の実感

3.1 授業における活用について

「1人1台端末を授業中に有効に活用できたかどうか」という質問に対して、以下のような結果となった。

回答	前期	後期
4(かなり当てはまる)	60.6%	63.2%
3	31.5%	29.4%
2	5.9%	6.3%
1(ほとんど当てはまらない)	2.1%	1.1%

前期・後期ともに4または3を選んだ生徒が90%を超えていることから、授業において端末を活用できていると実感しているということがうかがえる。

この回答に対する理由も同時に聞いたところ、様々な意見が挙がった。まず多かったのが、「授業でよく使うから」という理由である。教員が積極的に授業でICTを活用した結果、生徒の実感につながったのだと考えられる。

また、「すぐに調べることができる」、「意見交流がしやすい」、「英語の発音を録音したりすることで自分がどのように発音しているかがわかった」という理由もあった。それぞれ「探究的な学び」、「協働的な学び」、「学びを調整する力」に関わる活用方法となっている。ただ使って満足するだけではなく、このような深い学びにつながるような活用ができたという実感を、今後さらに多くの生徒に持たせていきたい。

この他、「プリントを無くす心配がなくなった」「簡単に文字を書き直せる」という意見も多く挙がった。デジタルデバイスならではの便利さも、生徒は実感しているようである。

3.2 家庭学習における活用について

「1人1台端末を家庭での学習において有効に活用できた」という質問に対する回答は、以下の通りである。

回答	前期	後期
4(かなり当てはまる)	37.7%	39.8%
3	35.3%	39.4%
2	17.6%	12.3%
1(ほとんど当てはまらない)	9.3%	8.6%

前期と比べて後期ではやや改善したもの、授業で

の活用に比べて家庭での活用は十分とはいえない結果となった。

家庭で活用していない理由として「持って帰るのが面倒」という記述がいくつかあった。本校では毎日充電のために持って帰るよう指導しているが、実際には持って帰っていない生徒も一定数存在していることがわかる。今後の課題としたい。

また、「スマホで代用できる」「紙のほうがやりやすい」といった理由で活用していない生徒がいる一方で、「家で調べ物がしやすい」「重い教科書を持ち帰らなくて済む」という理由で活用している生徒もいた。メリットを感じている生徒もいれば、そうではない生徒もいる。今後は我々教員も、家庭学習における効果的な活用方法を研究し、生徒に提案していきたい。

3.3 学習外における活用について

学習以外での端末活用方法についての生徒の回答を、以下に挙げる。

「気分転換(ゲーム、YouTube、Netflix 等)」

「球技大会のアンケート」

「部活動で動画を撮れる」

「部活動での休みの連絡や集合時間の連絡」

「演劇部の台本を読む」

「軽音楽部でTAB 譜を見る」

学校生活・日常生活の様々な場面で、生徒は自分なりの活用方法を見出しているようである。授業以外の場面においても、端末を有効活用しているのは大変喜ばしいことだと思う。

4. 来年度に向けての課題と展望

4.1 生徒の困り感から

まず、現状における生徒の困り感から、改善に向けたポイントを考えていきたい。

ここでは「1人1台端末を使用して、不便に感じたり、困ったりしていることはありますか」という質問に対する回答を見ていく。

まず多かった回答が、充電に関するものである。「充電が面倒、大変」「学校で充電できないのが困る」といった回答が寄せられた。本校においては現在のところ学校に充電スポットを設置していない。端末を管理するという観点からも、先述の通り、毎日持ち帰って充電するように指導している。しかし、生徒の中には重くて持ち帰るのが面倒で、結果として充電ができない、という者がいる。持ち帰り及び充電に対する生徒への意識付けや、充電スポット設置の是非について、今後検討していくべき課題である。

また、「字が書きづらい」「紙よりも書くのに時間がかかる」といった意見も多く寄せられていた。書き心地という点においては、まだまだ紙に敵わないと思われる。場面や意図、記入する分量などに応じて、デジタ

ルワークシートと紙のプリントをいかに使い分けていくかが、今後研究のポイントとなろう。

他に挙げられていたのは「Wi-Fi 回線が重くて、接続に時間がかかることがある」「たまにアプリがバグる」といった意見である。機械やシステムに不具合が起こる可能性はゼロにできないので、端末が使えない場合の代替措置を授業者は考えておく必要がある。

4.2 生徒の要望から

続いて、「1人1台端末をより有効に活用するためにはどうしたら良いと思いますか?」という質問に対する回答を見ていきたい。

「先生たちにもっと使ってほしい」「もっといろんな授業でつかうべき」という意見が多く挙がった。本事業における本校の目標のひとつに「全ての授業でICT 利活用を目指す」というものがある。今回の生徒の回答は、まだその目標が達成できていないことを示している。来年度は学校全体としてさらに ICT 利活用を推進していきたい。

「生徒同士の意見交換をもっと行う」「先生とか生徒同士とかの会話ができるようにしたい」「質問しやすいようにする」といったコミュニケーションツールとしての使用も要望として挙がっていた。「協働する力」に関連する部分でもあるので、こうした活用方法もさらに研究が必要である。

また、「教科書もプリントもすべてデジタル化すべき」という意見があった一方で、「端末と紙をしっかりと使い分ける」という意見もあった。デジタルと紙の使い分けについては、生徒の中でも考え方が割れているようである。4.1 でも述べた通り、この点については今後の授業実践において、しっかりと研究していく必要があるだろう。

2-2-2 令和5年度の状況

5. はじめに

今年度は、1・2学年生徒を対象に、一人一台端末に関するアンケートを1月に実施した。

本章では、そのアンケートの回答をもとに、今年度の一人一台端末に関する状況をまとめていく。

6. 実際に生徒が使用している端末

学習用端末について

「あなたが使用している学習用の1人1台端末はなんですか(スマートフォンは除く)」という質問に対して、今年度も、約99%の生徒がiPadを使用しているという回答であった。ほとんどの生徒が本校が推奨するiPadを使用しているという結果となった。

7. 1人1台端末に対する生徒の実感

7.1 授業における活用について

「1人1台端末を授業中に有効に活用できたかどうか」という質問に対して、以下のような結果となった。

回答	
4(かなり当てはまる)	70.5%
3	25.0%
2	2.1%
1(ほとんど当てはまらない)	2.4%

4 または 3 を選んだ生徒が95%を超えていることから、授業において端末を活用できていると実感しているということがうかがえる。

この回答に対する理由も同時に聞いたところ、様々な意見が挙がった。まず多かったのが、「授業でよく使うから」という理由である。教員が積極的に授業でICTを活用した結果、生徒の実感につながったのだと考えられる。

また、今年度も、「すぐに調べることができる」、「意見交流がしやすい」、「英語の発音を確認しやすい」という理由もあった。それぞれ「探究的な学び」、「協働的な学び」、「学びを調整する力」に関わる活用方法となっている。ただ使って満足するだけではなく、このような深い学びにつながるような活用ができたという実感を、今後さらに多くの生徒に持たせていきたい。

その他、「プリントを無くす心配がなくなった」「簡単に文字を書き直せる」「iPad だけ持ち帰ればよいので、活用しやすい」という意見が、昨年度以上に多く挙がった。デジタルデバイスならではの便利さも、生徒は実感しているようである。

7.2 学習における活用について

「1人1台端末を家庭での学習において有効に活用できた」という質問に対する回答は、以下の通りである。

回答	
4(かなり当てはまる)	51.0%
3	34.0%
2	9.0%
1(ほとんど当てはまらない)	6.0%

4 または 3 を選んだ生徒が85%を超えていることから、昨年度と比べ、家庭で活用している生徒は徐々に増加していると考えられる。

今年度も、「スマホで代用できる」「紙のほうがやりやすい」といった理由で活用していない生徒がいる一方で、「家で調べ物がしやすい」「重い教科書を持ち帰らなくて済む」という理由で活用している生徒もいた。また、「スタディサプリを見ているから」という生徒が多く、スタディサプリとの相性はよいと考えられる。今後も我々教員も、家庭学習における効果的な活用方法を研究し、生徒に提案していきたい。

7.3 学習外における活用について

学習以外での端末活用方法についての生徒の回答を、以下に挙げる。

「気分転換(ゲーム、YouTube、Netflix 等)」

「球技大会のアンケート」

「部活動で動画を撮れる」

「部活動での休みの連絡や集合時間の連絡」

「演劇部の台本を読む」

「学習以外での調べもの」

学校生活・日常生活の様々な場面で、生徒は自分なりの活用方法見出している。また教員のICT活用場面が増えたことで部活動においてもICTの波及が目立った結果となった。ICTの有効性が多様な環境で見られるのは大変喜ばしいことである。

8. 来年度に向けての課題と展望

8.1 生徒の困り感から

まず、現状における生徒の困り感から、改善に向けたポイントを考えていきたい。

ここでは「1人1台端末を使用して、不便に感じたり、困ったりしていることはありますか」という質問に対する回答を見ていく。

今年多かった回答が、「Wi-Fi 回線が重くて、接続に時間がかかることがある」という意見である。機械やシステムに不具合が起こる可能性はゼロにできないので、回線が使えない場合、端末が使えない場合の代替措置を授業者は考えておく必要がある。また、「1部の場所でWi-Fiがつかない」という意見があった。今年度は、生徒会役員選挙の時、「Wi-Fi のつかない場所をなくすよう学校に働きかける」という公約を掲げる生徒がいるほど、生徒の関心が非常に大きい

事柄でもある。次に多かった回答が、充電に関するものである。「スマホと比べバッテリーの減りが大きく、充電が大変」「学校で充電できないのが困る」といった回答が寄せられた。現在、学校に充電スポットを設置する予定であるため、来年度以降、この件での困り感がなくなることが期待できる。

また、昨年度と比べ、「字が書きづらい」「持ち帰るのが大変」といった意見が非常に少なかった。生徒がスタイラスペンの扱いに習熟してきた、iPad だけ持ち帰ればよくなってきている、などの理由が考えられる。

8.2 生徒の要望から

続いて、「1 人 1 台端末をより有効に活用するためにはどうしたら良いと思いますか？」という質問に対する回答を見ていきたい。

今年度最も多かった意見は、「十分活用できている」というものであった。思いつく限り十分活用できている、と感じている生徒が多いことは大変喜ばしいことである。

次に多かった意見が、「Wi-Fi がつながりやすくなる」「学校で充電できるようになる」といった、生徒の困り感からくる意見である。現状の課題を解決することが、より一層の生徒の活用に、直接つながることが示されたと考えられる。

他に多かった意見が、「ルールを守る」「授業は授業、休む時は休むの意識をはっきりさせる」といった、自身の iPad の使い方に関する意見である。生徒自身が、1 人 1 台端末のリスクを感じ、対策を練っていることがわかる。教員側が、iPad の使い方についても指導していくことも求められていると考えられる。

2-2-3 令和6年度の状況

9. はじめに

今年度は、全学年生徒を対象に、一人一台端末に関するアンケートを1月に実施した。

本章では、そのアンケートの回答をもとに、今年度の一人一台端末に関する状況をまとめていく。

10. 実際に生徒が使用している端末学習用端末について

「あなたが使用している学習用の1人1台端末はなんですか(スマートフォンは除く)」という質問に対して、今年度も、99%の生徒がiPadを使用しているという回答であった。iPadが故障しており学校貸出のChromebookを使用している生徒以外はほとんどの生徒が推奨するiPadを使用しているという結果であった。

11. 1人1台端末に対する生徒の実感

11.1 授業における活用について

「1人1台端末を授業中に有効に活用できたかどうか」という質問に対して、以下のような結果となった。

回答	
4(かなり当てはまる)	73%
3	23%
2	2%
1(ほとんど当てはまらない)	1%

4または3を選んだ生徒が96%を超えていることから、授業において端末を十分に活用できているということがうかがえる。

この回答に対する理由は、「授業でよく使うから」という理由である。特にロイロノートの使用頻度が導入当初と比べ爆発的に増えている。教員が積極的に授業でICTを活用した結果、生徒の実感につながったのだと考えられる。

また活用動機には、「すぐに調べることができる」、「意見交流がしやすい」、「英語の発音を確認しやすい」という前年度同様の回答の他、「ChatGPTを使ってより学びを深めた」という理由もあった。ICT機器を使って満足することが利活用授業研修推進校の目的ではない。アンケート結果から3つの姿「探究する姿」「協働する姿」「自ら学びを調節する姿」が見える授業展開ができているのではないかな。

その他、「どこでも持ち運びができる」という理由もあり、手軽さが端末使用率の向上にも繋がっているのではないかと考える。

11.2 学習における活用について

「1人1台端末を家庭での学習において有効に活用できた」という質問に対する回答は、以下の通りである。

回答	
4(かなり当てはまる)	55.0%
3	32.0%
2	8.0%
1(ほとんど当てはまらない)	5.0%

4または3を選んだ生徒が前年度より2%を増加。昨年度から引き続き、家庭でも生徒は活用しているということがわかる。

「教科書を持ち帰らずiPadのみで自宅学習ができる」「家から課題の提出ができる」と言った理由があり、Wi-Fi環境下であれば、どこでも端末を利用した学習(アプリなど)ができることが強みである。また、「スタディサプリを見ている」という声が約200名の生徒から回答があった。Googleやロイロノートだけでなくスタディサプリとの相性もよいと考えられる。今後も家庭学習における効果的な活用方法を研究していきたい。

11.3 学習外における活用について

学習以外での端末活用方法についての生徒の回答を、以下に挙げる。

「気分転換(アプリゲーム、YouTube)」

「各種アンケート」

「部活動で写真や動画を撮って動作の確認」

「部活動の連絡」

「イラスト部でデジタルの絵を描く」

「学習以外での調べもの」

学校生活・日常生活の様々な場面で、生徒は自分なりの活用方法を見出しているようである。授業以外の場面においても、端末を有効活用しているのは大変喜ばしいことだと思う。特に今年度は部活動での活用に関する回答が増え、授業だけでなく部活動でもICTを用いた戦略が練られていた。

12. 次年度以降に向けての課題と展望

12.1 生徒の困り感から

現状における生徒からの改善・要望は「Wi-Fi回線が重い」「接続に時間がかかる」という意見である。昨年度も同様の要望があり、アクセスポイントを新たに増設し、改善が見られた時期はあった。しかし、仮設校舎から本校舎への移設時に、機械やシステムに不具合が起こることがあり、回線が使えない場合、端末が使えない場合があった。生徒だけでなく教員もWi-Fiに繋げて端末利用をしているので、Wi-Fi環境の安定が急務である。もしもの時の代替措置を授業者は考えておく必要があるが、やはり安定した環境下で学びができることを望む。

次に、昨年度多くあった意見の中で「スマホと比べバッテリーの減りが大きく、充電が大変」「学校で充電できないのが困る」といった回答があったが、今年度

は大幅減少している。多くの生徒が携帯充電バッテリーを使い充電している様子が散見される。端末を学校や家だけでなく出先でも活用が増えたことが、この意見の減少につながったのではないかと考える。

12.2 生徒の要望から

「1人1台端末をより有効に活用するためにはどうしたら良いと思いますか？」という質問に対する回答を見ていきたい。

やはり前述したように「Wi-Fi がつながりやすくなる」といった生徒の困り感からくる意見である。現状の課題を解決することが、より一層の生徒の活用に、直接つながることが示されたと考えられる。

また「授業と休み時間の区別」というiPadの使い方に関する意見である。メリハリに関しては生徒自身も感じているように、使う場面を明確にすることが教員の指示から必要であると考えられる。

2-2-4 令和7年度の状況

13. はじめに

本章では、今年度(2025 年度)の 1 月に全学年を対象として実施した「1 人 1 台端末に関するアンケート」の結果をもとに、本校における端末利用の最新の実態と成果、および今後の課題について総括する。同時に、2022 年度以降の過去のデータと比較することで、ICT 活用の浸透度や生徒の意識の変化を分析していく。

14. 実際に生徒が使用している端末 学習用端末について

「あなたが使用している学習用の 1 人 1 台端末はなんですか(スマートフォンは除く)」という質問に対し、今年度も全体の 99%の生徒が推奨機種である iPad を使用していることが確認された。故障等により学校貸出の Chromebook を使用している一部の生徒を除き、ほぼ全員が指定端末を日々の学習に活用している。2022 年度に約 98%であった利用率は、2023 年度以降 3 年連続で 99%を維持しており、学校指定端末の利用が完全に定着した状況と言える。

15. 1人1台端末に対する生徒の実感

15.1 授業における活用について

「1 人 1 台端末を授業中に有効に活用できたかどうか」という質問に対して、2025 年度は以下のような結果となった。

回答	
4(かなり当てはまる)	74.6%
3	22.6%
2	2.2%
1(ほとんど当てはまらない)	0.6%

「4」または「3」と回答した生徒の合計が 97%を超え、過去最高水準に達している。肯定的な回答の割合は、2022 年度の約 90%から年々上昇を続け、授業内での端末活用が十分に浸透していることがうかがえる。

この高い実感の背景には、導入当初と比較して「ロイロノート」の使用頻度が爆発的に増え、教員が積極的に ICT を授業に取り入れていることが挙げられる。また、活用動機として「すぐに調べられる」「意見交流がしやすい」「英語の発音を確認しやすい」といった声に加え、2024 年度から引き続き「ChatGPT を使ってより学びを深めた」という先端技術を取り入れた意見も見られた。これらは、本校が目指す「探究する姿」「協働する姿」「自ら学びを調節する姿」が授業内で具現化されていることが示されている。

15.2 学習における活用について

「1人1台端末を家庭での学習において有効に活用できた」という質問に対する回答は、以下の通りである。

回答	
4(かなり当てはまる)	59.3%
3	29.1%
2	7.7%
1(ほとんど当てはまらない)	3.9%

「4」または「3」の肯定的な回答が前年度よりさらに増加し、約 90%近い数値であった。2022 年度は肯定的な回答が 40%未満にとどまっていたが、年々劇的な改善を見せており、家庭学習における活用が着実に進んでいることがわかる。

具体的な利点として、ロイロノートを活用して各教科の課題の提出ができることが挙げられたが、録音したデータや自身の英語スピーチを動画で撮り、それを提出するといった新たな課題の手法が見られたことで、家庭での学習で ICT 活用の方法が広がったと言える。

15.3 学習外における活用について

学習以外での端末活用方法についての生徒の回答を、以下に挙げる。

「気分転換(アプリゲーム、YouTube、TikTok)」

「各種アンケートの回答」

「戦術確認(サッカー部)」

「球速の計測や回転軸の確認(硬式野球部)」

「部活動での連絡や資料共有」

「各部活動の紹介ポスターや動画の作成と共有」

「学習以外での調べもの」

授業以外の様々な場面で、生徒が自ら活用方法を見出している。連携・広報グループでは学校説明会に向けて各部活の紹介ポスターや動画の作成を各部活動に依頼している。生徒たちは部員と協力し合いポスターや動画を作成しているが、クオリティの高いものを作成している。バスケットボール部員に話を聞くと、学校で活用している Canva や自身のインスタグラムの投稿に使用している Cap Cut を活用し、デザイン性に優れた作品を仕上げていているということだった。

また硬式野球部での ICT 活用では、画期的な改革が行われている。ICT の活用により全選手が球速や回転軸数を確認することができ、生徒自身がトレーニングの成果を可視化できるようになった。入学時に MAX104Km/h の生徒が3年次には 125Km/h を計測した。その生徒に話を聞くと、自身の投球が可視化されたことで、野球への学びが深まったという。ICT の活用が生徒の探究心に火をつけたことは、この事業の成功といっても過言ではない。

16. 次年度以降に向けての課題と展望

16.1 生徒の困り感から

2022 年度から一貫して解決が求められている最大の課題が、「Wi-Fi 回線が重い」「接続に時間がかかる」というネットワーク環境に関する意見については、若干ではあるが改善傾向が見られた。しかし、ほぼすべての授業で電子黒板や一人一台端末が活用されている関係から、時間によっては通信遅延が見られる場面があった。この件について生徒から「1時間目の授業時に Wi-Fi が重たい」という意見があった。

16.2 生徒の要望から

「1 人 1 台端末をより有効に活用するためにはどうしたら良いか」という問いに対しては、「生成 AI の活用を増やすのはどうか」という意見があった。授業内での活用で生徒はより探究できていると感じているようで、調べ学習として生成 AI を使うのではなく、生徒自身が立てた問いについて学び深めることが生成 AI を活用すると容易になり、多くのことを知るきっかけとなったという意見が寄せられた。多くの授業、多くの場面での活用が今後も期待される。

また、「授業と休み時間の区別」といった、メリハリに関する意見も継続して寄せられている。2022 年度は「教員にもっと使ってほしい」という要望が主であったが、活用が日常化した現在では、生徒自身が使う場面と控える場面の境界を意識し始めている。教員側からの明確な指示とモラル指導を継続し、自律的な運用をサポートしていくことが大切と考え、研究 ICT グループでは、生活支援グループと共に一人一台端末の使用ルールを見直している。次年度に施行できればと考えている。

3. 環境整備の部

3 環境整備の方針と今後の課題

1. はじめに

本校では一人一台端末として iPad を生徒に推奨し、授業においてロイロノートや Google for Education、生成 AI、スタディサプリなどを活用している。本章では端末の有効活用を目的とした環境整備の方針について述べる。

2. 環境整備の方針と整備状況

「すべての科目で常に効果的に」活用できるようにするための環境整備を整えることを前提として、次のような整備を行った。

2.1 「いつでもどこでもストレスフリーな」BYOD 回線の実現

いつでもどこでもストレスフリーに iPad を使うには、まず十分なネットワーク環境の整備が必要不可欠である。そこで本校では、2022 年度までにアクセスポイント (AP) を 51 台整備し、2023 年度では新たに 7 台を整備した(図 1)。

これにより、各ホームルーム教室はもちろんのこと、選択教室や特別教室、体育館、武道場にも整備し、校内どこでもストレスフリーでネットワークにつながる環境が整備された。

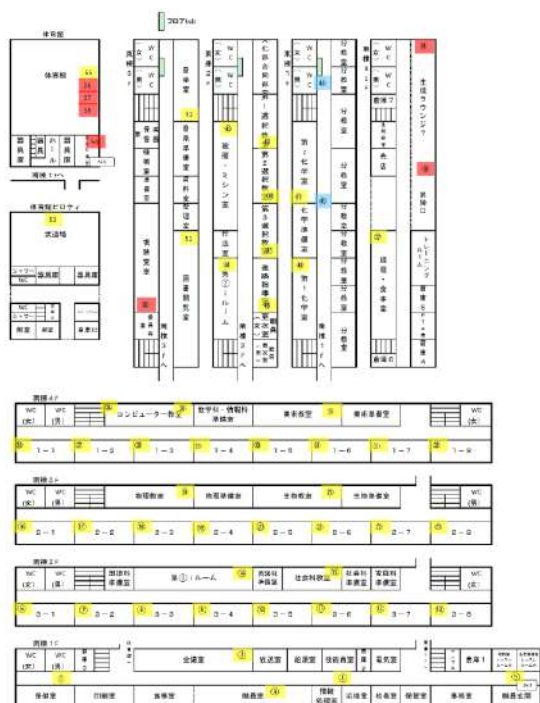


図1 本校 AP 設置場所一覧 (○数字がAPを示す)

2.2 「効果的な」ICT 利活用授業実現のための環境整備

前項では、ネットワーク環境の整備について示した。本項では「効果的な」ICT 利活用授業実現のための環境整備について示す。

2.2.1 天吊りプロジェクター

2021 年度までに各ホームルーム教室にプロジェクターを 1 台ずつ整備していたが、台の上に置いた状態での使用しかできないため、設置場所の確保や見やすくするための微調整などが必要であった。そこで、2022 年度にすべてのホームルーム教室でプロジェクターを天井に設置した(図2)。これによってプロジェクターを使用する際の煩わしさが無くなり、利用率が格段に増えた。



図2 整備された天吊りプロジェクター

2.2.2 ロールスクリーンの設置

2021 年度までは、60 インチ対応のロールスクリーン(黒板に磁石で貼り付けられるもの)を各ホームルーム教室に整備していた。図2に示した天吊りプロジェクターの設置に合わせ、2022 年度に各ホームルーム教室に 100 インチ対応のスクリーンを黒板上に設置した(図3)。今までのものよりも大きな画面で生徒に提示でき、巻取り式のため黒板との併用も簡単になった。



図3 整備されたロールスクリーン

2.2.3 Apple TV の設置

iPad の画面をプロジェクターで映し出すためには、HDMI ケーブルと変換コネクタが必要である。また、授業者は HDMI ケーブルの使用によって教卓付近から離れられない状況が生まれてしまう。机間巡視の観点からも、このことを解決するため 2022 年度に各ホームルーム教室に Apple TV を設置した。さらに、Chromebook など併せて利用できるように HDMI 分配器と変換コネクタも整備し、iPad の画面をワイヤレスでプロジェクターに映し出すことが可能となった。これによって机間巡視をしながら iPad を利用できたり、生徒も自席から自分の画面を映し出して発表を行ったりできるようになった。

2.2.4 スピーカーの設置

予てより、前項で示したプロジェクターによる投影時における音声出力の弱みが指摘されていた。そこで、Apple TV などの設置とともにスピーカーも設置し、映像教材等への対応強化を図った。そこで、有線と Bluetooth とにも対応可能なスピーカーを各教室に設置し、利便性を高めた。また 2023 年度に、ほこりなどによる故障防止のため ICT-BOX を新たに壁付で設置し、周辺機器をこの BOX に集約することで、利便性を高めた(図4)。



図4 ICT-BOX

スピーカー、Apple TV、分配器、リモコンなどを収めている

2.2.5 電子黒板の設置

神奈川県は 2024 年度より2期に分けて高等学校への電子黒板導入を開始し、本校は1期目として 10 月

に各ホームルーム教室および会議室に計 25 台が配置された。本校のホームルーム教室の前方には教壇があり、黒板の右側には前項で示したロールスクリーンが設置されている。そのため、導入が決定してから設置場所について懸念されていた。40 人学級のためただでさえ席どうしの間に余裕があるわけではなく、教壇の下に設置をすると非常に窮屈な教室になってしまう。そこで、教壇の上に角材を設置して電子黒板用の簡易的なレールを作製することとした(図5)。黒板右側のロールスクリーンを活かすためにも、電子黒板を黒板の左端～中央までが移動できるようにし、教壇の上に設置することによって、生徒の席どうしが窮屈になることが避けられた。また、教員によっては電子黒板+黒板、電子黒板+プロジェクターといった組み合わせによる使用などができるようになった(図6)。



図5 簡易レール



図6 デュアルモニター

2.2.6 DX ハイスクール関連の環境整備①

本校は 2024 年度より文部科学省から DX ハイスクールの指定を受け、それに伴う環境整備を行った。まずはカリキュラムの検討を行い、文理を問わず情報に関する専門的な科目を選択できるようにした。そして、専門的な科目を学ぶための ICT 機器として iMac を選定し、教科準備室を iMac 部屋(ラボ)として整備した。ラボに行った整備としては、壁の塗装、OA フロアの設置、電源や LAN の工事、天吊りの教授用モニターの設置などである(図7)。iMac については、2024 年度に 21 台(教員用 1 台含む)、2025 年度に 10 台導入し、2026 年度にも 8 台導入予定である(図8)。また、Adobe Creative Cloud などをはじめとする複数のソフトをインストールし、動画編集やゲーム制作なども行えるようにした。さらに、前項で述べた電子黒板を利用した配信システム(ブロードキャスト)も構築した。具体的には、ライブストリーミングボックスを導入し、全校集会などをラボから全ホームルーム教室に向けて電子黒板を通じて行えるようになった。加えて、グリーンバックを設置してクロマキーを用いることによって、資料を提示しながら話し手も見える配信ができるようにした(図9)。電子黒板は配信の通信量に耐えられるよう有線で AP に接続し、さらに、電子黒板用のカメラとマイクも揃えた。これにより、Google Meet や Zoom を使用したラボとの双方向やり取りも可能とし、外部講師との講演でも活用できる環境となった。また、2025 年度に

は円滑な授業運営のためにモニターを教室内に新たに2台常設した。前方1台、左右の壁に2台設置したことで、細かい説明も容易に行えるようになった(図 10)。



図7 整備したラボ



図8 iMac



図9 ブロードキャスト設備



図 10 3 面へのモニター設置

2.3 「不自由なく」ICT 利活用授業を行うための職員端末の充足

2.3.1 Chromebook の配置

本校では、教員向けに Chromebook の長期貸し出しを行っており、授業や特別活動の際に活用できる環境を整えている。

2.3.2 iPad の配置

本校では、生徒の一人一台端末に合わせて、iPad(Apple Pencil + キーボード付属)を各教員に1台ずつ配付し、常日頃から授業や特別活動の際に活用できる環境を整えている。配置状況は 2022 年度までに 48 台、2023 年度には 58 台の配置が完了し、職員に対し一人一台整備することができている。

3. 今後の環境整備の方針と課題

まず、本校のネットワーク環境の課題を述べる。本校のネットワーク環境は特別教室や武道場を含め各教室に AP が1台ずつ設置され、さらに体育館では 4 台設置できている。しかし、そのような環境下でも繋がりがづらいことがあり、BYOD 回線自体が脆弱と言わざるを得ない。この件については、2024 年度に県が回線を太くする工事を進めていることで改善が見込まれていたが、工事が終了している 2025 年度末においても繋がりがづらい状況が度々見受けられる。また、AP 自体の故障が徐々に出てきており、AP の更新をすることである程度改善できているが、今後ともつきまとう課題となっている。また、AP や Apple TV など無線の環境では多くのトラブルが起こることは容易に想像でき、それに対応できる人物を育てる必要がある。本課題については、学校単独で対応できないことも多く、県との密なやり取りが求められる部分であるが、現状そのやり取りができる場が少なく、解決に向けての糸口が見えていないことに非常に強い危機感を覚えている。

次に、ICT 機器及びその周辺機器の課題について述べる。現状、職員用 iPad は全職員に対して配付しているが、経年劣化とともに故障も出始めてきた。また、iPad 第 9・10 世代の販売が終了したことで、今後は iPad 第 11 世代に切り替える必要がある(lightnig 端子廃止が主たる理由)。そのため、修理費用や新端末の購入費など多くの予算が必要となる。そのリスクを解消するためにも、本来であればリース契約が望ましいと考える。しかし、これらを解消するためにはいくつかの課題があり、県の協力なくしては難しいものである。県と現場で課題を共有し、よりよい環境整備に向けて話し合う場を設けることが必要であると考えます。

また、2024 年度導入された電子黒板の故障が目立つ。故障の症状は様々ではっきりとした原因は不明だが、基盤にチョークの粉など入り込んでいることが関係しているかもしれないと業者から報告を受けた。そのため、基盤部分を布で覆うようにして様子を見ることとしたが、何度も再起動を繰り返したり、シャットダウン後に電源ボタンが操作できなかつたりといった不具合が解消されずにいる。さらに、電子黒板の Type-C の端子部分が壊れたり、iPad を有線接続すると接続が途切れたりすることもある。前者については、業者に確認したが原因は不明のままであり、今後のアップデート等で改善されることを願うばかりである。また、後者に関しては県が Type-C のコネクタを全校に導入していく方針のようだが、有線接続時の途切れる問題についてはわからないままである。

電子黒板導入に併せて、黒板をホワイトボードに変えることも検討したが、予算の関係上断念せざるを得なかった。今後の検討事項ではあるが、より良い環境整備に向けて様々な模索しているところである。

4 . 研修の部

4.研修 - すべての教科での ICT 利活用を目指して -

1. はじめに

ICT 利活用授業推進研究校(3カ年)の指定および GIGA スクール構想に伴う1人1台端末の導入により、本校ではこれまでの取組に加えてさらなる ICT の利活用が求められることとなった。

県立高校指定校事業(令和4年度指定)3年間計画書(※以下、3年間計画書)において、本校に指定された ICT 利活用授業推進研究の目標を年度ごとに設定した。

それぞれの年度での目標は次のとおり。

○1年目

「すべての教科で ICT を利活用する」

○2年目

「多くの教員がより多くの授業で ICT を利活用する」

○3年目

「全ての教員が大半の授業で ICT を利活用する」

ここで注意したいことは、これらの目標は前提として、生徒の「探究する姿」「協働する姿」「自己調整する姿」が見られる授業を展開するために ICT を利活用することである。ICT を使う授業が素晴らしいのではなく、素晴らしい授業を実施するために ICT を利活用していきたいという思いを研修を通して先生方に伝えていくことを目的としている。

このような目的を実現するために、研修内容を検討し、実施していくこととなった。

令和4年からの3年間では、先生方の協力もあり、上記で示した通りに研修が進むとともに、その研修を活かした授業実践も行えた。

この結果を受け、令和7年度以降の3年間についても、これまでの3年間の方向性を継承していく。つまり、3つの姿がよりみられる授業を実践できるように先生方が知識や授業法についてアップデートを行える場となるよう工夫していくことを目標として研修を計画する。重要なのは、「一人の10歩より10人の1歩」であり、「変化に対応できる雰囲気づくり」であることを肝に銘じて進めていく。

2. 研修計画

研修計画として、次の3つの研修を計画した。

・集合研修

・ミニ研修

・教科別研修

これら3つの研修を通して、主に①本質的な授業改善の取組の充実、②ロイロノートスクールを中心とした授業補助アプリの利活用推進を図ること③生成 AI の利活用推進を図ることを計画した。

2.1 集合研修(4月)

全2回の全職員参加型の研修。第1回は本校での ICT 利活用の状況を共有することやロイロノートスクールの使い方を確認すること、生成 AI の利活用例の紹介を目的として計画した。第2回は ICT を利活用した授業を実践している教員の授業実践報告やモデル授業の発表などを基に、それぞれの授業改善を検討する場を設けることを目的とし、計画した。

2.2 ミニ研修

ミニ研修は毎月の職員会議後に希望者に対して5～10分程度、アプリの最新機能や研究 ICT グループの教員の授業実践例を紹介することを目的に計画した。

2.3 教科別研修(6・10・1月)

教科別研修は各教科の授業改善に関する教科会に研究 ICT グループの教員が同席し、ICT 利活用授業の推進にあたっての実践例や困りごとの共有、相談、解決に向けた検討・助言を行うことを目的に計画した。

3. 研修実施報告

3.1 令和4年度研修実践

3.1.1 ICT 研修会(集合研修)

ICT 研修会は全職員参加で2回(4月と6月)実施した。

第1回(4月)では主に G Suite の Classroom の使用方法のおさらいと新しく導入したロイロノートスクールの基本的な機能のレクチャーを行った。

第2回(6月)では専修大学ネットワーク情報学部の望月俊男准教授を講師に招き、数学科泉頭教諭によるモデル授業と保健体育科打田教諭による授業実践報告、ならびに望月准教授による講評・講義を実施した。

3.1.2 ミニ研修

ミニ研修については今年度全8回実施した。ミニ研修では主にロイロノートスクールの使用方法を中心にそれぞれの主な内容は表1のとおり。

表1 令和4年度 ミニ研修実施内容

回	実施月	内容
1	4月	授業を作る
2	5月	生徒が回答しやすいカードづくり
3	6月	カードづくりのワンポイント ①ピン留め ②画像をカード化
4	7月	アンケートカードの活用例
5	10月	実践例の紹介(生物とは?)
6	12月	iPad 活用授業書籍の紹介
7	2月	成績処理に向けた機能紹介 (生徒ごとの提出箱一覧の見方)
8	3月	実践例の見方

	異動時のデータ移行
--	-----------

いくつかの研修で使用したスライドを紹介する。

- 第3回ミニ研修で使用したカードのピン留め(図1)と画像をカード化(図2)
- 第4回ミニ研修のアンケートカードの活用例(図3)
- 第7回の生徒ごとに提出箱に提出されたカードを一覧表示する方法(図4)

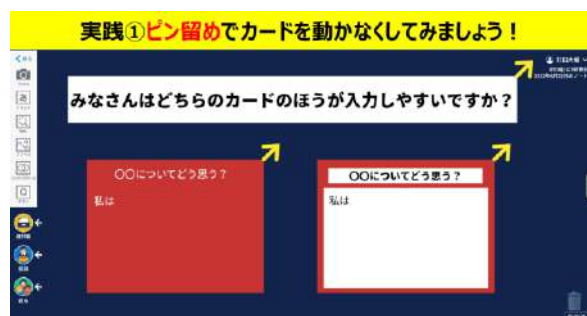


図1 カードのピン留め

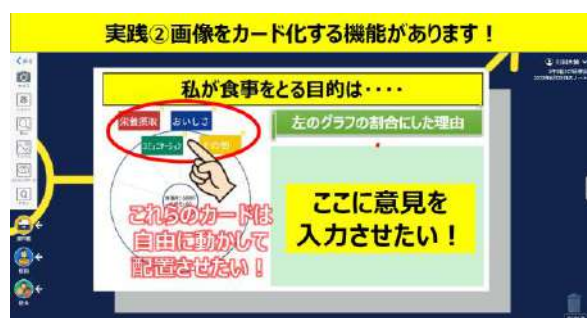


図2 画像のカード化



図3 アンケートカードの活用例



図4 生徒ごとの提出箱一覧表示方法

このように、今年度は1人1台端末の導入とともにロイロノートスクールも新規導入したことから、ロイロノートスクールの使用方法を職員に伝達することをメインに研修を実施した。ミニ研修は希望者のみの実施でさらに職員会議後(職員会議が17時をまわること)であったため、当初はどれだけの先生が残ってくれるかわからなかった。

しかし、短時間で終わることと明日から活用できる内容を心掛けて実施した結果、より多くの先生方に参加していただくことができた。

3.1.3 巡回研修(教科別研修)

単年度計画書では教科別研修としていた名称を(ICTプロジェクトチームによる各教科)巡回研修という形で実施した。

当初は5月に実施予定であったが、5月段階では各教科の実践例が乏しいことや他の業務との兼ね合いから、2学期の後半に実施することとした。

巡回研修では、①各教科でのICT実践例の共有、②今後授業でICTを活用してみたいこと、③ICT活用についての困りごと・相談事の3点を教科内で協議してもらい、ICTプロジェクトチームのメンバーや教科内のICT活用にに関して主導的な先生からアドバイスをしたり、今後の展望を協議したりした。

次に各教科でのICT実践例で挙げたものの一部を紹介する。(図5～12)



図5 国語科 ICT 利活用実践例



図6 地歴公民科 ICT 利活用実践例



図7 数学科 ICT 利活用実践例



図8 理科 ICT 利活用実践例

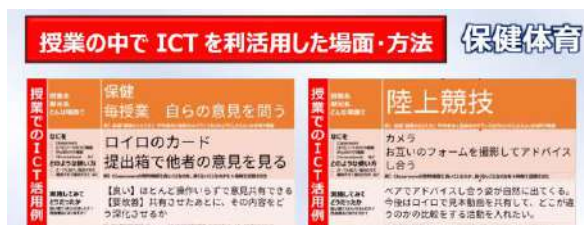


図9 保健体育科 ICT 利活用実践例

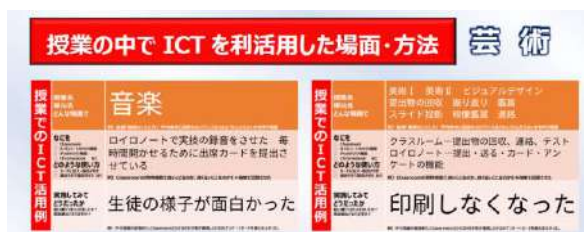


図10 芸術科 ICT 利活用実践例



図11 家庭科 ICT 利活用実践例

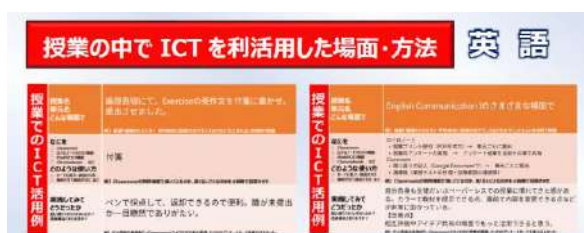


図12 英語科 ICT 利活用実践例

巡回研修は時間の確保がなかなか難しいところがあったが、参加した先生方からは「普段なかなか他の先生の授業を見学する時間がないのでとても良かった」や「同じ単元でも他の先生が違った工夫をしていることがわかり参考になった」といった意見が多かった。

現在の各学年でまとまっている職員室の状況だと意外と教科内よりも学年のまとまりのほうが強くなりがちで、教科内の情報共有の場を設けることは非常に有用であったことが伺えた。

3.2 令和5年度研修実践

3.2.1 集合研修

令和5年度においても、4月と6月の2回を集合研修として実施した。

第1回(4月)では令和4年度と同様、ロイロノートの基本的な使い方をマスターするために、「昨年度の授業実践共有」を題材に研修を実施した。これは、本校で1年間やってきた先生と今年度赴任した先生のギャップを埋めるための研修である。各教科で1つのグループを作り、実践共有(図13)をしながら、教えあう姿(生徒に育みたい「探究する姿」「協働する姿」)が見られたことが収穫だった。



図13 4月集合研修使用カード

6月に実施した第2回では、モデル授業として地歴公民科の青木教諭に「パンはなぜトルコを中心に横に広がっているのか」という問いから、問いの立て方、資料活用の方法、意見共有の方法に ICT を活用した授業を実践してもらった。

モデル授業の実践を通して得られたものを各教科に落とし込むために、各教科グループで事前に問いを立てて、その問いを考えるために必要な要素を検討した。(図14)

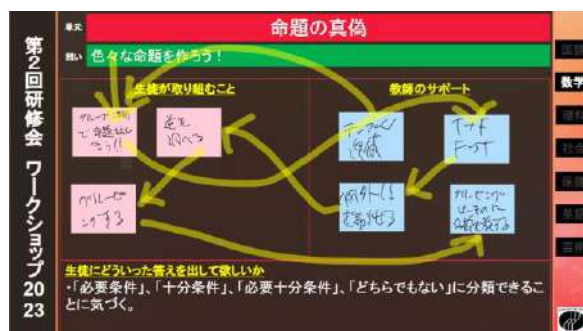


図14 6月集合研修使用カード

3.2.2 ミニ研修

令和5年度においてもミニ研修を毎職員会議で実施した。昨年度同様、ロイロノートの Tips が中心となったが、生成 AI の使い方をレクチャーする回も設けた。今年度はロイロの新機能を紹介することも何度かあり、そのなかでもゲームモード(β版)を紹介したときが盛り

上がりもあり、実践につながった先生も多くいた反響の大きい研修となった。

3.2.3 巡回研修

令和4年度では11月に1度だけ実施した巡回研修であるが、研修の効果が高いのではないかという意見が多くあり、今年度は各学期開催の計3回を実施した。

それぞれ、実践共有がメインであるが、そこから派生して各教科様々な話題で盛り上がり、終了予定時間を超えて研修が実施された教科グループも多くあった。

3.3 令和6年度研修実践

3.3.1 集合研修

令和6年度は過去の2年間と同様、4月と6月に集合研修を実施した。

第1回の4月には、図15にあるような内容を実践した。また、自己紹介ではロイロのカード機能であるシンキングツール「クラゲチャート」(図16)を使用し、自己紹介をしてもらった。最後にベータ版機能ではあるが、授業が非常に盛り上がる「ゲームモード」を実施し、授業実践の一例を体験してもらった。



図15 令和6年度 4月集合研修 実施内容



図16 自己紹介 クラゲチャート 入力例

第2回の6月には、①地歴公民科の蓮見教諭によるモデル授業、②望月准教授による講評・講義、③授業改善ワークショップの3つを実施した。モデル授業では「大統領制と議院内閣制の違い」をテーマに生徒の「自ら学びを調整する姿」が現れるように工夫された授

業を実践してもらい、先生方に生徒役として体験してもらった。問いに対する自らの答えに対して ChatGPT を使用し、補足や意見をもらうことで、情報を得る活動や、自らの意見の根拠となる資料探しを題材に、他者と意見を交流したり比較したりすることを通して、他者の学び方を知る活動から、「自ら学びを調整する姿」が現れるようなモデル授業を教員全体で経験することができた。

望月准教授からの講義では、「自ら学びを調整する姿」が現れる授業展開のためには①生徒に学習展開を預けるような場面を設定することが大切であること。

②自分の力で学ぶ材料を適切に提供することが大切であること。といった重要な視点を講義していただいた。

モデル授業や講義を踏まえて、教科ごとのグループで「自ら学びを調整する姿」が現れるような授業の案を検討するワークショップを実施した(図17)。また、このワークショップの構成自体が先生方の「自ら学びを調整する姿」となっているということが仕掛けづくりとして行った部分である(図18)。こうして先生方にも実際に生徒と同じ経験を研修を通じて体験してもらうということが研修づくりの重要な部分であると考えている。

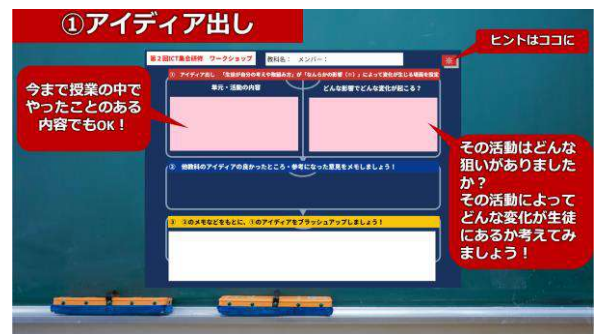


図17 ワークショップ使用カード

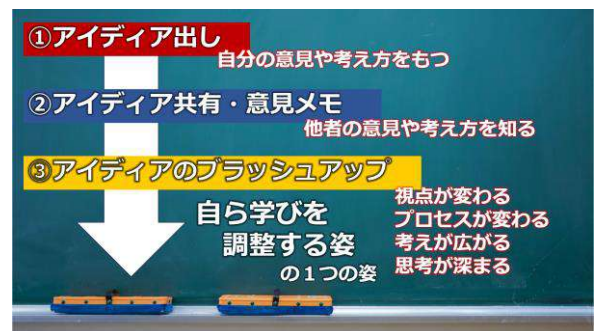


図18 研修の仕掛けづくり

3.3.2 ミニ研修

令和6年度のミニ研修ではハードウェア、ソフトウェアの両方の「明日の授業から使える Tips」を毎職員会議後に実施した。今年度は新たに導入した機器やアプリケーションも多く、それらの紹介をすることで先生方の興味関心を引くことができたのではないかと考えている。

主に紹介してきたものはハードウェア関係では電子黒板(みらいタッチ)や配信システム(らくらくライブ)、ソフトウェア関係ではロイロノート、Canva、ChatGPT である。

3.3.3 巡回研修

各学期1回ずつの計3回、巡回研修(研究・ICTグループが各教科会を巡回する授業研究研修)を実施した。

第1回は①日頃どんな風に ICT を使っていますか?②普段の授業で振り返りってどう行ってますか?という2点を共有した。この回は新着任者のボトムアップを目的に、授業実践を共有し、褒めあうようにファシリテーションしていった。

第2回では、実践共有とお悩み相談会を実施した。第1回で共有した ICT 利活用の方法を実践した先生や新しく紹介した Canva を授業づくりに使うなどのチャレンジをした先生もいて、非常に盛り上がる共有となった。(図 19)

第3回では、年間を通じて実践した授業の成果や課題を共有した。ICT を活用した活動によってどのような力が高まっていくのか、その狙いをどのように置くことが大切なのかを振り返るきっかけになったようだ。(図 20)

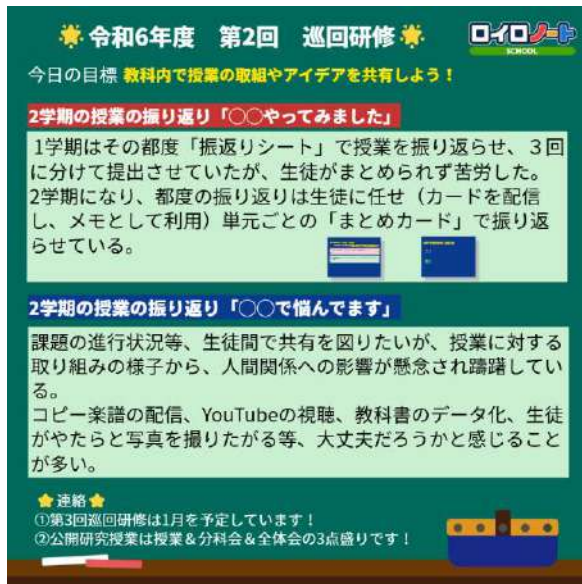


図 19 第2回巡回研修 使用カード



図 20 第3回巡回研修 使用カード

3.4 令和7年度研修実践

3.4.1 集合研修

令和7年度は4月に2度集合研修を実施した。

第1回では、令和6年度と同様、ロイロのカード機能であるシンキングツール「クラゲチャート」を使用し、自己紹介カードを作成してもらった。(図 21)さらに、作成した自己紹介カードを用いて、ChatGPT で自己紹介ソングを作成してもらってワークショップを実施した。

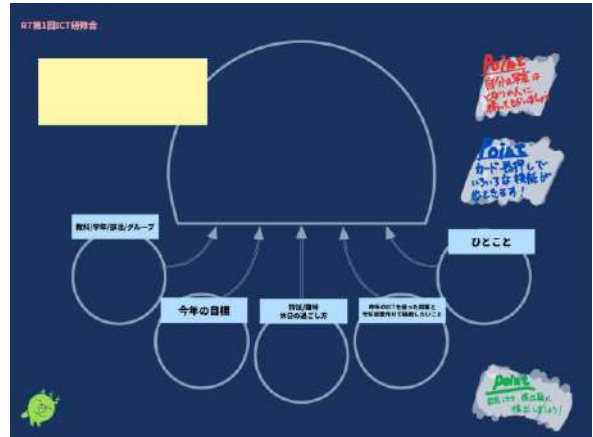


図 21 自己紹介 クラゲチャート 入力例

第2回では、①外国語科の堀教諭によるモデル授業、②鶴田准教授による講評・講義、③授業改善ワークショップの3つを実施した。モデル授業では、「問いを推進力とする授業づくり」をテーマに、本校の3本柱である「探究」「協働」「自己調整」を行う姿が見られるような授業を実践してもらい、先生方に生徒役として体験してもらった。ロイロのシンキングツールを用いて生徒が考えた問いを整理し、その問いについて、ChatGPT を用いて音声入力機能でインタビューを行う活動を行った。インタビュー形式で行うことにより、1つの問いへの回答に加えて新たな問いを生み出すことに繋げることができる授業となった。(図 22～25)



- ①KWLチャートを用いて、大谷選手について知っていることや彼のイメージについてペアでシェアする。
- ②本時の目標について確認する。

図 22 授業資料1



図 23 授業資料2



図 24 授業資料3



図 25 授業資料4

3.4.2 ミニ研修

令和7年度のミニ研修でも、すぐに実践することができテーマをもとに毎職員会議後に実施した。今年度はロイコのほか、Canva や生成 AI など幅広い内容の研修を行うことができた。業務の負担軽減のためのツール紹介に加えて、生成 AI の授業内活用方法や生徒が気軽に復習できる小テストアプリの開発方法の紹介などを行った。

3.4.3 巡回研修

令和7年度においても年に3回の研修を実施した。第1回は①日頃どんな風に ICT を使っていますか？②

普段の授業で悩んでいることはありますか？という2点を共有した。ICT や生成 AI の利活用に実践した先生や NotebookLM などの最新のツールを授業内で活用する先生もいて、学びになる研修となった。(図 26)



図 26 第1回巡回研修

第2回は①日頃どんな風に ICT を使っていますか？②良かった問いの実践例はありますか？という2点を共有した。日頃の取り組みでは様々な実践例が挙げられたが、本校のテーマであった問いに関してはなかなか実践できていない状況であることが明らかになった。(図 27)



図 27 第2回巡回研修

第3回では、年間を通じて実践した授業の成果や課題を共有した。ICT を利活用した活動によってどのような力が高まっていくのか、その狙いをどのように置くことが大切なのかを振り返り、次年度の課題を洗い出すことのできる機会となった。(図 28)



図 28 第1回巡回研修

4. 公開研究授業

4.1 令和4年度

令和4年度の公開研究授業は、ICT 利活用授業研究推進校としてこれまでの取組を各県立学校教員に紹介するとともに、本校の職員にとっても授業改善のよい機会になるように計画を立て実施した。

また、中高連携事業ともタイアップし、隣接する枳形中学校の先生方も多数見学に来られ、活発な意見交換を行うことができた。

さらに、ICT 研究会(集合研修)でもお世話になった専修大学の望月准教授にもご参加いただき、全体会での講評もいただいた。

今年度は1人1台端末導入年次である1学年の授業を研究授業として実施し、時間割等の都合でできなかった芸術科と家庭科以外の6教科で研究授業を実施した。(表2)

表2 令和4年度公開研究授業実施一覧

組	教科:科目	担当者
1	地歴公民:地理総合	蓮見 教諭
2	地歴公民:地理総合	菊田 教諭
3	国語科:現代の国語	佐藤 教諭
4	数学科:数学 A	泉頭 教諭
5	保健体育科:保健	打田 教諭
6	英語科:英語コミュニケーション I	鈴木 教諭
7	理科:化学基礎	伊東 教諭
8	数学科:数学 A	池田 教諭

研究授業の後、各実施教科に分かれて研究協議を行った。研究協議でもロイノートスクールを活用し、意見交換を行った。

全体会では各分科会での研究協議の報告、生田東高等学校の取組の紹介、質疑応答、望月准教授からの講評をいただいた。(図 29~31)

生田東高校のすごいところ



図 29 望月准教授 講評資料1

生徒がICTを使って、探究する姿

- ・ 数学：試行錯誤
 - 数学的表現を、いろいろ試して
- ・ 地歴：どの地域が、どのような気候か
 - 資料探索、色分け
- ・ 外国語：よいインタビューの姿を
 - ビデオ録画を用いて
- ・ 保健：どのような立場で/どのような要因で
- ・ 国語：思いを伝えるための工夫とは？
- ・ 化学：どうやって数を数えるの？
 - 他の人がどんなことを考えているのか？
 - 対比して考えを深める

図 30 望月准教授 講評資料2

「学びの自己調整」がめざすこと

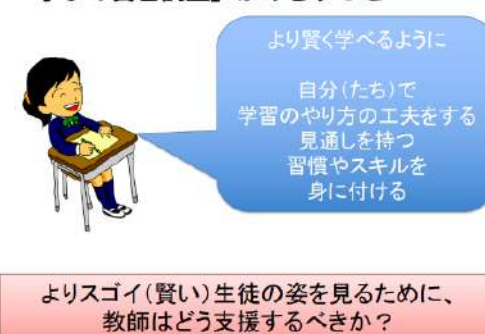


図 31 望月准教授 講評資料3

望月准教授からは、本校がICT 利活用授業研究推進校として目指す①探究する力、②自ら学びを調整する力、③協働する力を育む ICT を活用した授業づくりについての提言をいただくとともに、授業づくりにおける生徒理解の方法を解説していただいた。

4.2 令和5年度

令和5年度の公開研究授業は令和4年度と同様の形式で実施した。(公開研究授業→分科会→全体会) 公開研究授業の実施授業は次のとおり。(表3)

表3 令和5年度公開研究授業実施一覧

組	教科:科目	担当者
1	国語:現代の国語	古川 教諭

2	情報:情報Ⅰ	青木 教諭
3	理科:化学基礎	小野塚 教諭
4	保健体育:保健	島袋 教諭
5	地歴公民:地理総合	青木 教諭
6	英語:英語コミュニケーションⅠ	堀 教諭
7	数学:数学A	栗津 教諭
8	家庭:家庭総合	水上 教諭

令和5年度の改善点としては、公開研究授業の授業案の検討において、お世話になっている望月准教授（専修大学）にそれぞれ2回以上の指導助言をいただく検討会を開いたことが挙げられる。普段の授業改善で教科会等において検討することはあっても、外部の有識者に指導助言をもらう機会はほとんどなく、多くの授業実施者から貴重な機会だったと意見が出た。この取り組みは次年度へ引き継いでいきたい。

また、前年度に比べ、中高連携事業での訪問がなかったために外部の来校者が減ってしまった。次年度は導入しているロイロノートのネットワークなどを活用し、広く来校者を増やす取り組みを行いたい。

4.3 令和6年度

令和6年度実施授業は次のとおり。（表4）

表4 令和6年度公開研究授業実施一覧

組	教科:科目	担当者
1	地歴:地理総合	齊藤 教諭
2	国語:言語文化	伊東 教諭
3	英語:英語コミュニケーションⅠ	村主 教諭
4	数学:数学Ⅰ	長瀬 総括教諭
5	情報:情報Ⅰ	岡田 教諭
6	保健体育:保健	山下 教諭
7	国語:現代の国語	蓮沼 教諭
8	理科:化学基礎	菊池有 教諭

前年度の反省を生かし、中高連携で来校いただいた枳形中の先生方(30名弱)を除いて県内高校やロイロノートの校外ネットワークを通じて30名ほどの来校者に参加していただくことができた。このおかげで、分科会の研究協議が昨年度以上に盛り上がり、活発な議論が行われた。

全体会では、望月准教授からの指導講評、ならびに講義をしていただいた。今年度のテーマである「自ら学びを調整する姿」はまだ教員間で理解が進んでいない様子であることを受け、6月の集合研修で実施していただいた講義の補足的な内容を中心に講義が進んだ。

今年度の反省として、全体会が講義中心に進んだことから、分科会の盛り上がりと比較すると落ち着いてしまったことが挙げられる。来年度は全体会もワークショップ形式で行うほうが良いという点が研究・ICTグループの反省として挙げた。

4.4 令和7年度

令和7年度実施授業は次のとおり。（表5）

表5 令和7年度公開研究授業実施一覧

組	教科:科目	担当者
1	数学:数学A	村田 教諭
2	英語:英語コミュニケーションⅠ	野田 教諭
3	芸術:音楽Ⅰ	関口 教諭
4	理科:化学基礎	松田教諭
5	社会:地理総合	米村 教諭
6	英語:英語コミュニケーションⅠ	田島 教諭
7	保健体育:保健	打田 教諭
8	国語:現代の国語	山岡 総括教諭

今年度も県内高校やロイロノートの校外ネットワークを通じて33名ほどの来校者に参加していただくことができた。

全体会では、鶴田准教授からの指導講評、ならびに講義をしていただいた。今年度のテーマである「問いを推進力とする授業づくり」をもとに、問の立て方と共有方法に関する内容を中心に講義が進んだ。また、昨年度の反省をもとに、全体会でもワークショップを行い、問いをどのように立てるのかを実践できる機会を設けることとした。（図32～33）

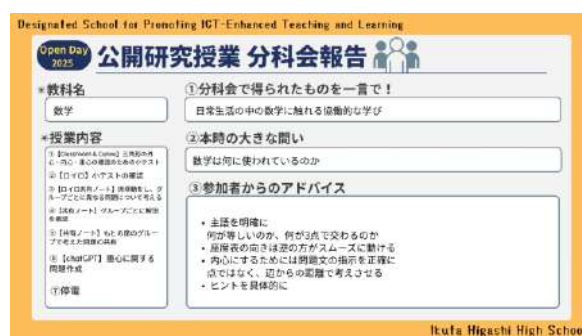


図32 分科会資料1



図33 分科会資料2

5. 生成AI研修

本校がリーディングDXスクールパイロット校に指定されたことに伴い、令和5年10月5日に日本マイクロソフト株式会社文教営業統括本部・シニアスペシャリストの中田寿穂様に研修を実施していただいた。

この研修の目的としては①生成AIの概要(どんな仕組みか、どのようなサービスがあるか)を理解する。②

「生成 AI を上手に使うために心がけることを理解する。
③生成 AI を教育に使用する際に、期待できることや、留意点を理解する。以上の3つの目的を達成するために 75 分間の研修を実施していただいた。

研修のなかで我々教員が生成 AI に対して抱いていた「生成 AI を使うと生徒の思考力は低下してしまうのではないかな」などの疑問に海外の研究データなどを参照しながら、生成 AI を有効活用することは思考力の向上ならびに時間の有効活用の両面に効果的であることなどを解説していただいた。また、ハンズオン型の研修を通して、生成 AI の活用の仕方であるプロンプトの例を実戦形式で学ぶことができ、有意義な研修であった。

このなかで、Open AI 社の ChatGPT と Microsoft 社の Bing chat の比較などから、校務(特に授業研究)には Bing chat の方が相性が良さそうだという感触を得られた。これはどのように回答を生成するのかの機能の違いが影響しており、Bing chat はネット上の情報から回答を生成するため、根拠となる HP の URL も同時に出力してくれることが挙げられる。

この研修を通して、生成 AI の特徴やサービスの違いを理解し、今後活用するための方策を検討するきっかけづくりとすることができた。

6. 各年度の評価と次年度の課題

6.1 令和4年度

6.1.1 令和4年度の評価

令和5年2月に本校職員に対して実施したアンケートでは図 34 のような結果となっており、おおむね満足できる研修を実施できたと考えられる。

コメントのなかでも巡回研修のような教科内での授業研究・授業改善の機会をさらに求める声やミニ研修のような How to を中心とした内容が授業づくりに役立ったというコメントがあり、初年度の立ち上げを考えると今後の課題も見えてきながらも一定の成果を感じることができたバランスの良い1年だった。



図 34 ICTに関する研修アンケート結果

6.1.2 令和5年度の課題

プロジェクトチーム内で次年度の研修計画について検討を進めていくなかで、次のような課題が挙げられた。

- ① 今年度1学年を担当した教員と新着任や他学

年のみを担当した教員の活用スキルの差異がある。

- ② 校内組織体制の変化(異動や校内人事に係る担当職員の変化)
- ③ 県立高校指定校事業(令和4年度指定)3年間計画書(※以下、3年間計画書)における目標設定に対する対応

特に、3年間計画書における目標設定では、初年度を「すべての教科で ICT を利活用すること」を目標にしていたが、2年目である次年度は「多くの教員がより多くの授業で ICT を利活用すること」を目標に設定している。このことから、今年度各教科内で主導的立場として ICT を利活用してくれた先生方の経験や知見を教科内で共有し、いくつかのモデルパターンを作っていくような研修を実施するのが良いと考える。

すでに要望の声が上がっている巡回研修等の授業改善に特化した教科会を年に複数回実施することや How to に関してもプロジェクトチームからの発信ではなく、すでにその知見を有している教員を中心としてグループワークのような研究を実施できればと考えている。

3年間の指定校事業が終了した後も、本校が ICT 利活用授業の特色を有する学校として認知されることを目指して教員研修を進めていく。

6.2 令和5年度

6.2.1 令和5年度の評価

令和6年2月に実施した職員アンケートにおいて研修については「授業の役に立った」「いつも新たな発見があり、楽しいです。」などおおむね好意的な意見が寄せられた。一方で研修機会の確保のために短縮授業などを実施したため、「研修のための急な授業時間短縮や、テスト前・中の研修実施はなるべく避けていただくとありがたい」という意見や、研修機会の増加に伴い、「しんどい」という正直な意見も寄せられた。

職員アンケートのなかでの質問項目「今年度の ICT 利活用授業に関する研修でご自身の授業改善に有効だと感じた研修を選んでください。」に対する結果は(図 35)のとおり。



図 35 令和5年度 職員アンケート結果

これらの結果から、昨年度の課題である職員間の活用スキルの差異を埋めることや、目標である「多くの教員がより多くの授業で ICT を利活用する」という状況には研修が貢献することができたと考えている。

特に、ロイロの利用率ランキングでは再任用の先生がトップを独占している月もあり、若手からベテランまで多くの先生が教科書と同じくらいロイロなどの ICT ソフトを活用している様子があつたことは評価できる点であると考えている。

6.2.2 令和6年度の課題

3年間の指定事業の最終年度として、「すべての教員が大半の授業で」という目標を設定している。これには ICT プロジェクトチームの力だけでは達成は難しいと考えている、達成のためには教科が協働して授業改善に取組み、それぞれの教科が主体的に ICT 利活用授業推進に取組むことが必要である。

この課題から、引き続き研修機会の提供をプロジェクトチームが主体となって行い、ファシリテートしていくことが重要である。

生田東高等学校の職員は授業研究に熱心な先生が多いため、多くの先生方の力をたくさん借りて、ICT 利活用授業推進を行っていくことを忘れずに、学校全体で指定事業に取組んでいく。

6.3 令和6年度

6.3.1 令和6年度の評価

令和6年 12 月に実施した職員アンケートでは好意的な意見として、「学んだことを今後どんどん活用し、自分の授業をブラッシュアップし続け、自分自身をバージョンアップさせていきたい」という意見や「研修は自分の学びにつながるため、とても良い機会で楽しい」といった意見が寄せられた。一方、「覚えることが多くて大変」「自分では行う意味を感じない」といった意見もあり、内容や研修機会の精選や研修意義の発信などに課題が残っていることが明らかとなった。

それぞれの研修(集合研修、巡回研修、ミニ研修等)が自分にとって意味のある研修になったかどうかを問う質問では有効回答数 35 に対して結果は図 36 のとおりとなった。

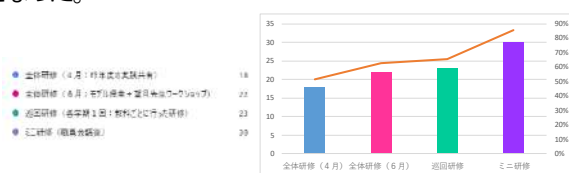


図 36 令和6年度 職員アンケート結果

この結果から、ミニ研修が先生方から好評だったことがわかる(有効回答数に対し 80%以上の評価を得た)。この理由として①短時間で終わる研修であったこと。②明日の授業から使える Tips であったこと。が大きい要因ではないかと考えている。このような研修を通して、先生方の興味関心を高めていき、集合研修や巡回研修などのある程度の時間を確保して行う研修への参加意欲を高めていくことを意識していくことが必要だったのではないかと分析している。

6.3.2 令和7年度の課題

次年度以降も本校は県教委から ICT 利活用授業研究推進校に指定されることとなった。この事業は授業改善が主旨であることから、職員研修は本事業の根幹となる取組である。これまでの取組のなかで一定の成果を上げることができたことから、大きな方向転換をするのではなく、これまでの取組をブラッシュアップしていく方向で検討していくつもりだ。

これまでの3か年の取組が成功した1つの要因として、研究・ICT グループがボトムアップを意識してさまざまな取組を行ったことが挙げられる。研修においては、「まず使い始めてもらうこと」「ICT を使っている先生を褒めること」「先生方の悩みを解決すること」を徹底して行ってきたように思う。次の3か年もボトムアップで行くのか、ハイパフォーマーの強化も行っていくのか、その方針は検討中ではあるが、どちらにせよ職員全体が「授業づくりの面白さ」を感じる研修になるように心がけていきたいと考えている。

6.4 令和7年度

6.4.1 令和7年度の評価

本校は引き続き県教委より「ICT 利活用授業研究推進校」の指定を受け、授業改善を主旨とする本事業の根幹として「職員研修」のブラッシュアップに取り組んだ。過去3か年の成功要因であった「まず使い始めてもらうこと」「ICT を使っている先生を褒めること」「先生方の悩みを解決すること」という徹底したボトムアップの姿勢を継承しつつ、令和7年度は特に、職員全体が「授業づくりの面白さ」を実感できる研修の構築を目標に掲げた。具体的な方針としては、ボトムアップの継続を軸に据え、毎月のミニ研修を展開した。こうした取組を重ねた結果、教員の ICT に対する心理的ハードルは着実に下がり、ICT の活用が単なる作業のデジタル化を超え、教員自身が授業づくりの楽しさを再発見するフェーズへと移行しつつある確かな手応えを得た。実際に、職員アンケートの結果でも、ミニ研修が役に立ったという声が多かった。(図 37)

● 全体研修(4月:昨年度の実践共有)	26
● 全体研修(4月:モデル授業+鶴田先生ワークショップ)	21
● 全体研修(11月:公開研究授業+研究協議)	32
● 巡回研修(各学期1回:教科ごとに行った研修)	36
● ミニ研修(職員会議後)	39

図 37 令和7年度 職員アンケート結果

また、教科ごとに行っている巡回研修では、授業について率直な意見交換の場を担えていることも教員自身が授業づくりの楽しさを再発見するフェーズへと移行しつつある一つの要因であると考ええる。

一方で、今後の課題として、活用事例や方法を聞いて勉強になるが、実際に自分で取り組むハードルが高

いという声も明らかとなったため、次年度はこれまでに培った前向きな土壌を活かしながら、さらなる授業改善に直結する取組を推進していきたい。

6.4.2 次年度以降の課題

これまでの取組により、教員の ICT に対する心理的ハードルは下がり、授業づくりの面白さを共有する前向きな土壌は確実に育ってきた。一方で、次年度に向けて新たに取り組むべき明確な課題も浮き彫りとなった。それは、「研修の場では大いに学び、納得できるものの、いざ自分一人で授業に導入しようとする、操作への不安や些細なつまずきから、結局活用を踏みとどまってしまう」という、研修と実践の間に存在するギャップである。どれほど質の高い研修を実施しても、実際の教室で教員が孤独な挑戦を強いられる状況では、授業づくりの面白さを実感する前に挫折してしまいかねない。したがって、次年度はこの「一人では実践しきれない壁」を突破することを最大の課題と位置づける。具体的には、一過性の集合研修にとどまらず、実践の場に寄り添う伴走型のサポート体制の構築や、つまずいた際に職員室でいつでも気軽に聞き合える関係性のさらなる強化など、「研修から日々の実践へのシームレスな橋渡し」に注力していく方針である。これまで大切にしてきた「先生方の悩みを解決する」というボトムアップの精神を活かし、すべての教員が孤立することなく、自信を持って自立的に ICT を授業に実装できる環境を整えていきたい。

5. 授業研究の部

5.授業研究

5-1 はじめに

令和4年度は、すべての教科で ICT を利活用し、生徒が3つの力を発揮することを目指し、授業研究を行った。研修では、ICT を導入した場面と ICT を導入しない場面を教科内で出し合い、整理した。どのような場面だと ICT を利活用しやすいのか話し合うことで、積極的に ICT 利活用を行う教員を増やすことができた。一方、各教科では次年度に向けた改善点が多く挙げた。年度途中で行われる公開研究授業に向けて、各教科で改善に向けた話し合いを行った。

令和5年度は、多くの教員が多くの授業で ICT を利活用し、生徒が3つの力を発揮することを目指し、授業研究を行った。教科内で授業実践を共有する機会が多くなり、前年度の反省を踏まえて改善を行った。公開研究授業では、授業案を作る段階で生まれた疑問や悩みを同じ教科に相談する機会を設けた。また、前年度に挙げられた改善点を踏まえて、授業案の作成を行った。

令和6年度は、3つの姿のうち「自ら学びを調節する姿」が見られる授業に焦点を当てた。令和4年度、令和5年度の職員アンケートから、この自己調整に関する指針を授業で取り扱うことが難しいという結果が得られていたため、本校教員によるデモ授業を行い、巡回研修を各学期に開催したことで学びが深まった。また公開研究授業でも ICT 利活用授業研究推進校の取り組み3年目として、他校から多くの教育関係者が来校し、活気のある分科会・全体会となった。

また、令和5年度 10 月より半期にかけて生成 AI のパイロット校として ChatGPT の活用事例が多くなったことで、令和6年度も継続して生成 AI を活用する授業展開が見られた。結果として本年度ターゲットにした自己調整との組み合わせで、より個別最適化な授業展開、生徒指導に繋がったと考える。

令和7年度は、これまでの 3 年間で「協働する姿」「探究する姿」「自ら学びを調整する姿」がみられる授業を実践してきたが、今年度はこの 3 つの姿がみられる授業を実践していくという主たる目標は変えずに、「問いを推進力とする授業づくり」ということをテーマに掲げ授業づくりを行った。授業を貫く大きな問いと、授業を進めていくにあたり生まれる小さな問いを推進力とし、主体的で深い学びの実現を図るよう組織的に授業づくりを行った。これを実現するために日々アップデートされている AI を含む ICT の利活用についても組織的に研究し、実践を行った。

5-2 各年度の分析

5-2-1 令和4年度

教科ごとで ICT を用いて感じた改善点を整理した。多くの教科で見られた改善点は、教員によって ICT への理解度が異なることである。ICT を用いた授業を行おうとしても、使い方等の理解が進んでいないため、授業研究が行えないことが多くあった。年度途中に教科内で授業実践を共有する機会を設けたところ、ICT への理解度が深まり、授業研究を進めることができた。そのため、次年度は授業実践を共有する機会を多く設け、理解度を深めていきたい。

国語や理科、外国語では探究的な活動の少なさが改善点として挙げた。ICT を用いることで、どのような探究の機会を与えるかが次年度の課題となった。

地歴公民や数学では意見を共有する機会を設けられなかったことが改善点として挙げた。意見交換しやすい問いの設定や、ロイロノートの提出箱を活用することが次年度の課題となった。

5-2-2 令和5年度

前年度挙げられた教科ごとの課題について、公開研究授業に向けて授業研究を行った。

国語では、生成 AI (ChatGPT) が作成した「感想文」を題材にして適切な表現について学習した。この「感想文」ではどこが問題点として挙げられるか検討することで、生徒はより良い「感想文」にするために探究的な作業を行うことができた。前年度の改善点をもとに、題材設定を工夫することで改善に努めた。

地歴公民では、雨温図と風景の組み合わせを当てるために、様々な根拠を用いて予想する作業を行った。なぜそのように予想したのか、提出箱へ生徒の予想を提出し、意見を共有させた。1人では思いつかないような意見に触れることもでき、生徒の関心を引き出すことができた。前年度の改善点をもとに、生徒の考えに触れる機会を多く設けることで、関心を引き出した。

数学では、提出箱へ解法を提出することで、良い考えのものを教員がピックアップし、説明させた。1つの問いに対して、決まりきった解法で進めるのではなく、様々な生徒の考えに触れることで自分が使いやすい解法を勉強することができる。また、解答に困ったときは提出箱を確認することで生徒は困らずに問題に取り組むことができた。前年度の改善点をもとに、生徒の考えに触れさせることで、新たな解法に気づかせた。

理科では、気体の性質に関するシミュレーションサイトを用いて生徒が探究できる発問を行った。どのような条件だと体積が変化、または変化しないのかをシミュレ

ーションサイトを用いて予想した。前年度の改善点をもとに、どのように発問をすれば ICT を活用して探究してもらえるのか、発問に着目して改善に努めた。

外国語では、生成 AI を用いて適切な文法や文構造について考えた。自分で作成した英文を生成 AI に送り、指摘させることで文章の改善を行った。自分に足りないことは何かを把握することができるので、生徒は意欲をもって取り組むことができた。前年度の改善点をもとに、生成 AI できっかけを与えることで、探究的に活動を行えるように努めた。

5-2-3 令和6年度

今年度の公開研究授業では「自ら学びを調整する姿」が見える授業展開を念頭に置き、授業開発を行った。公開研究授業では、授業者による研究授業、分科会、全体会と充実した研修会となった。

国語では、2名の授業者が授業を公開した。現代の国語では、「他者の納得する文章を考える」という単元で、言葉の意味や読み手としての文章の捉え方からアプローチすることでそれらを思考の材料として自ら答えを導きだすところに学びの調整が見られると考え授業を実施した。「具体的な根拠」「客観的な意見」「筋道立てて説明する」という3つの要素の大切さを学び、設定したテーマに沿って生徒は文章を作成した。

言語文化では羅生門について扱った。登場人物の気持ちや人間の本質といった感情に関して「言語化」して表現することを念頭に授業が展開された。ロイロノートの共有ノートを使用しクラス全員の意見を可視化することに成功した。生徒は他者と意見を共有することを活動の中に多く取り入れたので、様々なものの見方ができると学んだ一方、生徒の意見の偏りが多く見られた点は改善点をして上がった。

地歴公民では、雨温図や写真から情報を読み取ることを通して各気候区の特徴を理解し、それによる人々の生活の違いを生徒が探究しながら学習する授業が展開された。地中海性気候区と温暖湿潤気候区の特徴についてカードを識別化して分類。気候区分における住居や農作物の違いについて考え共有した。

数学では、「 $\sqrt{2}$ が無理数であることを用いて、 $2\sqrt{2}$ が無理数であることを、背理法を利用して証明せよ。」という問について授業が展開された。教員からの指導と ChatGPT による解説を比較し、数式だけでなく言葉を用いて解答を作ることが大切であると学ばせた。板書の解答と ChatGPT の解答を比較する活動は有効だった。発問をすることによって「自らの学びを調整」しながら課題に取り組む姿が見られた。有理数などの過去に学習した内容を忘れていた生徒が多く、そのため「自らの学びを調整」しながら復習する活動の効果が薄くなってしまったことは反省すべき点であった。

理科では、化学基礎で日常生活における濃度の違

いを利用した現象に触れながら、質量パーセント濃度とモルの濃度の特徴を学習した。水、質量パーセント濃度が 10%、20% の色付き食塩水を生徒に配り、問いとして「濃度の異なる溶液の見分け方を小学生に説明したい。どんな実験と説明をしたらよいか。」と投げかけた。生徒は実験を踏まえて密度が大きいほど重くて沈むので、濃度が大きいほど沈むことを理解することができた。

保健体育では、「精神疾患の予防と回復」について扱った。精神疾患の特徴を踏まえて、自分や他者にどのように対応をすればよいかを考えさせた。また、精神疾患を患っている人は周りとのかわり方でどのようなことに困難さがあるか、身近な人が発症した時に自分はどのように対応するかについて生徒に考えさせた。Google Forms を用いて生徒に不安や悩みがどのくらいあるかアンケートを取り、実態を把握したうえでロイロノートを使い、同僚が精神疾患にかかった時に自分と相手にどのような対処をするかについて考え、意見を共有した。

外国語では、各国の漫画の形式や文化の違いについて英語で意見文を作成した。生徒の英語レベルに合わせて ChatGPT の指示を変え、個別最適化を図った。Advanced, Challenge の2つのレベルの中から自身にあったレベルを生徒に選ばせた。Advanced では与えられたスキームをもとに、辞書等で調べながら自らの力で 50 語の意見文を作成。Challenge では与えられたテンプレートをもとに、自身の考えに合うものを選びながら、50 語の意見文を作成。Chat GPT を活用し作成した文章の語彙、文法チェックを行った。テーマの設定には改善の余地があり、自己調整するにあたって生徒の習熟度について見なおす機会にもなった。

情報では、Web ページを作成するために大切な要素を生徒自身が見つけ出す授業を行った。閲覧者からの視点で、欲しい情報が何か理解し、Web ページの改良策を考えアウトラインの構成までを1時間とした。テンプレートで生徒に示した Web ページで、どのような改善を行うとお客が増えるか生徒に考えさせ、ロイロノートのシンキングツールを用いて生徒の考えを共有した。キャンディチャートを活用した改善案の列举が有効であった。自分の意見と他者の意見を比較して「自ら学びを調整」しながら Web ページを改善する姿が見られた。

5-2-4 令和7年度

今年度の授業づくりでは「問いを推進力とする授業づくり」というテーマを念頭に置き、生徒が主体的かつ探究的に学ぶ姿勢を育成するための授業開発を行った。公開研究授業では、授業者による研究授業、分科会、全体会が実施され、生成 AI や ICT の効果的な活用とそれによる学習効果を巡って、非常に充実した研

修会となった。

国語では、現代の国語において「構成や展開を意識して発表する」という単元で授業を公開した。クローンペットの是非という社会的課題に対し、ロイロノートでの意見共有に加え、ChatGPT を用いて異なる立場の意見と模擬討論を行う活動を導入した。これにより、生徒は感情にとらわれず多角的に物事をとらえる論理的思考力を身に付け、AI との対話の振り返りを通して自らの意見を客観的にブラッシュアップし、説得力のあるプレゼンテーション資料(フリップ)の作成へ繋げるという確かな成果が見られた。

地歴公民では、地理総合において乾燥帯の各気候区の特徴や人々の生活文化の違いを理解する探究学習を展開した。自然環境との「共生」と「克服」という本時の深いテーマに対し、生成 AI を活用して各自に問いを投げかけ、対話しながら考察させる活動を取り入れた。雨温図や写真からの情報読み取りだけに留まらず、生成 AI との対話を通じて多面的・多角的な考察を引き出すことができ、生徒自身の「問い」を推進力とした主体的かつ深い探究学習を効果的に実現することができた。

理科では、化学基礎において「物質と化学反応式」に関する課題学習や問題演習を実施した。溶液の濃度の表し方について探究する中で、「濃度の異なる溶液の見分け方を小学生に説明するための分かりやすい解説案」を生徒自らが考案する際、生成 AI を思考のサポートや表現の壁打ち相手として活用させた。専門的な化学の概念を身近な言葉に翻訳するプロセスで、AI の提示する表現やヒントを比較・検討したことにより、質量パーセント濃度とモル濃度の違いの本質を主体的に考察・表現し、体験的な理解を次の学びへと繋げていく学習効果が得られた。

保健体育では、保健において「現代の感染症とその予防」を扱った。生徒の関心が高い「文化祭の食販企画における感染症予防対策」を問いの題材とし、ChatGPT を用いたグループ調べ学習を実施した。その際、情報の真偽を検証するため班の中に「ファクトチェック係」を設置し、ファクトチェック用資料と AI 出力を照合・検証させる役割分担を行った。身近な題材設定により高い学習意欲が引き出されただけでなく、AI の出力を鵜呑みにせず批判的に検証するプロセスを経たことで、情報を安全に使いこなす情報リテラシーの育成と主体的でスムーズな協働学習を両立させる成果が得られた。

外国語では、英語コミュニケーションⅠにおいて2名の授業者がそれぞれ異なるアプローチで授業を公開した。

田島教諭の授業では、人間の行動心理を題材とした学習活動を展開した。「なぜそうなるのか」という問いに対し、自らの考えを英語で発信する際、生成 AI の添

削機能を使用しながらライティングを行う活動を取り入れた。生徒個々の習熟度に応じた即時的なフィードバックを得ることで、主体的かつ探究的にライティングスキルの向上を図り、他者に自分の言葉で伝える発信型の英語力を効果的に高めることができた。

野田教諭の授業では、バナナペーパーの販売促進を題材とした。「どのような表現を使えば、バナナペーパーの魅力が伝わるか」という大きな問いに対し、生成 AI を表現の推敲や効果的なアピールアイデアの創出ツールとして活用した。通常の紙との価格差などの課題に自ら気づきつつ、視覚資料にマッチした熱意ある英語表現を生徒が主体的に組み立てることができ、伝えるための論理性に注意して話したり書いたりする力を引き出す成果が得られた。

芸術では、音楽Ⅰにおいてミュージックベル合奏の器楽表現を扱った。「演奏者が3名に減った場合、どのような創意工夫が必要か」という難度の高い問いに対し、音やリズムを調整するパート割りや演奏技法のアイデアを広げる目的で、生成 AI をシミュレーションやアイデア出しの補助として活用した。AI が提示した客観的な選択肢や他者のアイデアをグループ内で比較・考察することで、同一条件での豊かな表現の可能性を主体的・協働的に見出すことができた。演奏への創意工夫を通じて、他者との調和を意識した深い音楽表現へと繋げる成果が得られた。

6 . 研究成果の部

6-1.各種アンケートからの分析と提言

2022 年度の研究成果

1. はじめに

今年度の研究成果は、生徒にとつた授業評価アンケートと、教員を対象にとつた独自のアンケートの2つを対象に分析して評価する。

2. 授業評価アンケートの分析

2.1 授業評価アンケートの概要

授業評価アンケートは、前期(7 月)、後期(12 月)の 2 回実施している。アンケートの実施や項目は、全県共通のものであるが、本校では研究成果の評価のため、独自の質問項目を追加した。

追加した質問項目は以下の4つである。

表1 独自の質問

番号	質問
11	この授業の中では、ICT 機器(パソコン・スマートフォン等)を有効に活用していたと思う
12	この授業の中では、自分の疑問や考えを記録したり、自分が知りたいと思ったことを探究したりする用途で、ICT 機器を有効活用していたと思う
13	この授業の中では、クラスメートの考えに触れたり、協力して作業したりする場面で、ICT 機器を有効活用していたと思う
14	この授業の中では、自分が学習したことをまとめたり、振り返ったりする場面で、ICT 機器を有効活用していたと思う

この4つの独自質問は、11 が全体的に ICT を有効活用できたかどうか、12 から14 までの質問が、このプロジェクトで目指す3つの姿が実現できていたかどうかを、生徒からの視点で問うものとなっている。この節では、この独自質問に対する回答から、授業研究の成果を評価していく。

2.2 学年ごとの分析

大まかな傾向を掴むために、11 の質問にしぼり、学年ごとにどのような差が生じているのかを調べた。これは、1 学年に1 人1 台端末とロイロノートが導入されており、他学年は導入されていないため(ロイロノートは他学年も使用可能)、そこに差があるのか確かめる目的がある。

質問に対する回答は、4:かなり当てはまる、1:ほとんど当てはまらない、の4段階の形式となっている。

表2 【前期】質問11 に対する回答の割合

	4	3	2	1
1 年	60.4	29.4	6.7	3.5
2 年	35.9	46.6	12.8	4.7
3 年	45.5	37.6	10.4	6.5

単位:%

表3 【後期】質問11 に対する回答の割合

	4	3	2	1
1 年	50.2	34.9	10.1	4.8
2 年	27.7	50.9	17.7	3.7
3 年	40.5	39.5	12.3	7.7

単位:%

大まかな傾向としては、1 年生が最も有効に活用していると考えている生徒の割合が高くなっている。ついで、3 年、2 年となっている。その差は、前期と後期で縮小しており、後期になるにつれ、1 年生での活用がされなくなってきたという可能性もあるが、いずれの学年も後期の方が「4:かなり当てはまる」と回答している割合が低くなっており、なにか共通の原因がある可能性もある

2.3 1 年生の回答の分析

1 年生の11 から14 に対する回答の割合を表4、表5にまとめた。

表4【前期】1 年生の11～14 の質問に対する回答の割合

	4	3	2	1
11	60.4	29.4	6.7	3.5
12	55.2	33.8	7.8	3.2
13	55.7	32.8	8.1	3.4
14	56.3	33.1	7.3	3.3

単位:%

表5【後期】1 年生の11～14 の質問に対する回答の割合

	4	3	2	1
11	50.2	34.9	10.1	4.8
12	48.8	36.8	10.4	4.8
13	47.1	37.1	11.0	4.8
14	49.7	35.5	10.1	4.7

単位:%

並べてみると、質問毎の回答の割合に差がないことがわかる。この傾向は、2、3年も同じである。残念ながら、質問の内容をきちんと理解せずに、ICT を有効活用しているか、どうかだけで回答を選んでいる可

能性がある。そのため、これ以降は11の回答に絞って分析していく。

2.4 教科毎の分析

1年生の11に対する回答の割合を教科別にまとめたのが、表6、表7である。2.2の分析から、質問毎に回答の割合には差がないため、ここでは14の質問だけを分析の対象にしている。

表6【前期】1年生の質問11に対する回答の割合

	4	3	2	1
国語科	74.5	24.1	1.5	0.0
地歴・公民科	75.5	21.2	1.6	1.6
数学科	56.8	28.9	7.8	6.5
理科	21.5	49.4	25.3	3.8
保健体育科	54.7	31.5	9.3	4.5
芸術科	60.2	32.0	4.9	2.9
外国語科	54.1	30.5	7.9	7.5
家庭科	44.6	39.4	13.9	2.2
情報科	77.5	20.5	1.2	0.8

単位：%

表7【後期】1年生の質問11に対する回答の割合

	4	3	2	1
国語科	67.5	29.3	3.2	0.0
地歴・公民科	68.3	28.4	2.9	0.4
数学科	39.1	35.7	15.0	10.3
理科	20.2	37.9	28.7	13.2
保健体育科	47.8	35.8	10.0	6.3
芸術科	50.4	42.5	7.1	0.0
外国語科	54.0	31.5	8.3	6.3
家庭科	29.9	45.8	17.3	7.0
情報科	72.7	23.4	3.5	0.4

単位：%

全体的に前期と後期で数字が低下していることがわかる。これはICTの利活用以外の要因が作用していることが、推測される。そのような全体の傾向を踏まえても、数学科と家庭科は大幅に4と答えた人の割合が減少している。

数学科の教員にどのような要因が考えられるかインタビューしたところ、以下のようなものをあげてくれた。

- 1学期はプロジェクタで授業をしていたが、見にくいという生徒からの声を受けて、2学期は黒板で授業を行うようになった(1名)。
- 1学期は紙で配っていたものを、ロイロノートな

どに置き換えたので、生徒が活用している度合いは増えたのではないかと。

生徒の回答の傾向と、教員の感じ方には差があることがわかった。プロジェクタの使い方で回答が左右された可能性もあるが、単純に授業に対する理解度など別な要因による影響である可能性もある。ICTに関係しない質問に対する回答も、前期と後期では数学については、他教科よりも大きく下落していたため、別な要因が生徒の回答に影響した可能性は高い。

家庭科について、インタビューしたところ以下の回答をもらうことができた。

- 2学期には被服実習がほとんどとなったことが要因だろう
- その中でも、実習の参考動画をQRコードから読み取って実習中に見られるようにするなど、ICTを活用する試みは行っており、生徒もそれを参照していた

実習の中で、ICT機器をどう活用していくか、ということにはまだ課題があるといえる。

次に、同じ教科内での教員間の差を分析した。ここでは、差を見る方法として、教員毎に生徒の11に対する回答の番号、1,2,3,4を平均した値の分散を求めて比較した。値自体にそれほど意味がないと考えられるため、ここでは単に差の大小の傾向だけを示す。

表8【後期】1年生の質問11に対する回答のばらつき

	回答の平均	ばらつき	人数
国語科	3.6	小	4
地歴・公民科	3.6	小	2
数学科	3.0	大	6
理科	2.7	小	2
保健体育科	3.3	大	4
芸術科	3.4	小	2
外国語科	3.3	大	9
家庭科	3.0	小	2
情報科	3.7	小	2

単位：%

ばらつきは、人数によって影響を受けないように分散を用いているが、それでも人数が増えることによる、教員のスタイルの多様性がそれを上回り、人数が多い科目ほどばらつきが多くなる、という当たり前に見える結果が出ている。しかし、国語科のように4人で見ても、ばらつきが小さい科目もあるため、必ずしも人数による影響だけではない。

ここでは、ばらつきの大きかった英語科と少なかった地歴・公民科に注目しインタビューを行った。英語

科では、扱う題材や範囲は科目で統一しているものの、使用する教材(プリントなど)については、それぞれが作成しているということであった。さらに、一つの題材(単元)において4能それぞれ学習するが、その単元においてどの技能に力を入れるかについては、多少は濃淡があり、濃淡の度合いについては教員間でも違いがあるとのことであった。教材については、共有フォルダに格納していて、お互いに共有できるようになっており、お互いに参考にしながら作成しているとのことであった。一方で、授業を設計する過程において、相談しあうような文化はないようであった。

地歴・公民科では、教材は共有フォルダにおいてお互いに共有しつつ、それぞれが作成するスタイルであるということであった。2人ということもあり、お互いに相談したりアイデアを出したりしながら、授業を作成しているとのことであった。

授業観改善という観点から見た時に、2つの教科に共通したポジティブな点としては、共有フォルダに教材を格納し、いつでも共有できる状態にしておく、ということがあげられる。相手に断りを入れなくても、見られる状態にしておく、というのが授業作りにおけるICTの活用として有効であると考えている。さらにそこから授業改善を図るためには、授業作り(設計)のプロセスでの協働が重要になってくるといえるだろう。

授業改善という観点から見た時に、科目内に差があることは悪いことではない。それは改善の過程であるとみることができる。3つの段階があると考えられ、①誰もICTを活用していない段階、②活用し始めた教員がいる段階、③大多数の教員が活用している段階である。差があることを問題視すると、①の段階から抜け出せなくなる可能性が高い。それぞれの教員の創意工夫が発揮される環境を作りつつ、そのうちの良い成果を教科内で共有できる仕組み作りが求められている。

3. 職員アンケートの分析

3.1 職員アンケートの概要

職員アンケートは、2023年1月に全職員対象に行った。独自の質問で構成されたWebから回答するアンケートである。回答数は35人であった。

アンケートは大きく分けて以下の部分から構成されている。

1. 目標とする3つの姿に対する取り組みについて
2. 授業内でのICTの活用状況について
3. 教科内の授業改善への取り組みについて
4. ICTプロジェクトの取り組みに対するフィードバック

ここでは、1から3について取り扱うこととする。

3.2 3つの姿に対する取り組みに関する回答の分析

職員アンケートでは、3つの姿についてそれぞれ、それが見られることが期待されるアンケートに取り組んだかについて質問している。回答は、ICTを活用して取り組んだ、ICTは活用していないが取り組んだ、取り組んでいない、の3つの選択肢から回答してもらっている。この質問に対する回答を表9、表10に示す。

表9 3つの姿に取り組んだかを尋ねた質問に対する回答

	ICT活用して取り組んだ	ICTは活用していないが取り組んだ	取り組んでいない
探究する姿	68.6	8.6	22.9
協働する姿	68.6	22.9	5.7
自らの学びを振り返る姿	57.1	20.0	22.9

単位:%

表10 3つの姿に取り組んだかを尋ねた質問に対する回答

	ICTの利用の有無にかかわらず取り組んだ割合	取り組んだとの回答のうちICTを利用したと回答した割合
探究する姿	77.2	88.9
協働する姿	91.5	75.0
自らの学びを振り返る姿	77.1	74.1

単位:%

表10からICTの利用の有無に関わらず取り組んだと回答している割合は、協働する姿に関するものが91.5%と最も高く、ほとんどの教員が行っていることがわかる。ICTを利用しない取り組みも多く、様々な形で取り組んでいることが伺える。探究する姿については、ICTを活用している割合が非常に高く、親和性が高いことが伺える。言い換えると、取り組む割合を高くするためには、ICTの利用を推進するよりも、そもそも探究をどう授業に取り入れるのか、について研究を進める必要があると考えられる。自らの学びを振り返る姿については、取り組んだ割合、ICTを利用する割合がともに比較すると低く、ICTの活用を推進することでより取り組む教員の割合が増えることが期待される。

次に、それぞれの姿において、どのような取り組みをしたか、代表的な回答をあげる。

探求する姿-ICT を活用した取り組み

- 疑問点を調べさせる
- 意味や由来など、題材について詳細な情報を調べさせる
- 英作文などで自分が伝えたいことを表現する方法を調べさせる
- 資料をもとに調べたことを、Google スライドなどにまとめて発表させる

探求する姿-ICT を活用しない取り組み

- すぐに答えを示さずに、回答を考える時間を増やした

ここでは、探究=何か生徒が ICT 機器で調べる、という授業の構図を多くの教員が認識していることが伺える。しかし、探究にも様々な形があり、教員が提示した実物や、文章など様々な資料を題材に探究することも考えられる。より多様な探究の形を示すことで、より多くの授業で探究的に学習する生徒の姿が見られるようになることが期待される。

協働する姿-ICT を活用した取り組み

- ロイロノートや Classroom、ジャムボードを用いた意見の共有
- グループで成果物を協働制作する
- 制作物や成果物を共有する
- スプレッドシートを用いた相互評価

協働する姿-ICT を活用しない取り組み

- レポートやポスターなどの作品の相互評価
- ペアワーク(英語における会話や考察の交換)
- マナボードを利用した協働作業
- 教えあい

ICT の利用の有無に関わらず、協働的な学習を多様な形で教員が授業に取り入れていることがわかる。この点については、このままアナログ・デジタル、それぞれの良い所を活かし、多様な形での取り組みを推奨していけばよいと考える。

自ら学びを調整する姿-ICT を活用した取り組み

- デジタルワークシートに対するフィードバック
- 1 枚ポートフォリオをロイロノートで作成させた
- 授業の振り返りを、ロイロノートや、Google のサービス(ドキュメントやフォームズ)で作成

自ら学びを調整する姿-ICT を活用しない取り組み

- プリントによる振り返り(振り返りシート、カードなど)
- 繰り返し発表を行うなどして、上達を実感できるように意図した取り組み(英語における会話文の発表など)

アナログ・デジタルともに振り返りシートなどの形で振り返る取り組みは行われている。紙に比べると、デジタルは教員の管理の手間が削減できる面がある。そのため ICT の活用を進めることで、より少ない時間で、振り返りシートの管理やフィードバックが行える可能性がある。それにより、振り返りへの取り組みの増加を期待できる。

3.3 授業内の ICT 活用に関する質問の分析

生徒の利用状況に関する認識を知るため、「1 回の授業の中で生徒が ICT を活用する機会が一度でもあった授業は、授業全体のおおよそ何割ぐらいですか？」という質問文で、20%刻みの 5 段階で回答してもらう設問を用意した。

表 11 「1 回の授業の中で生徒が ICT を活用する機会が一度でもあった授業はおおよそ何割ぐらいですか？」への回答の割合

80%-100%	48.6
60%-79%	17.1
40%-59%	14.3
20%-39%	11.4
0%-19%	8.6

単位:%

この回答からは、約半分の教員が、自分の授業において、ほぼ毎回生徒は ICT 機器を活用していると認識していることがわかる。40%未満の授業でしか ICT 機器を活用していないと認識している教員は、20%となっている。また、アンケートの回収そのものにバイアスがあることは十分考えられるため、この層はもう少し多いことが予想される。この 20%強の教員のサポートをどう取り組むかが今後の課題である。次に、教員自身の ICT 活用の状況の質問を分析する。

表 12 教員自身が利用した ICT サービス

Google Classroom	82.9%
Google ドキュメント	37.1%
Google スプレッドシート	48.6%
Google スライド	71.4%
ロイロノート	57.1%
Google フォーム	68.6%

単位:%

Google ドキュメント、スプレッドシート、スライドの中では、スライドを使用している割合が最も高く、生徒に対する提示のためのスライドを多く利用していることが伺える。また、フォームによりアンケートや問いに回答させている機会を設けている教員が多いことも伺える。

どのような使用方法が有効だったと認識しているかについて、質問した。表 13 には、有効だったと回答する割合を示す。

表 13 ICT 機器やサービスの活用方法について、有効だったと回答した教員の割合

使用方法	やや有効 有効	あまり有効ではない 有効ではない	当てはまる活動をしていない
調べ学習	94	0	6
表やグラフを利用してデータを整理	40	3	57
発表資料の作成	77	0	23
作文やレポート作成	60	6	34
考えたことの共有や比較	77	3	20
協働しながらアイデアを出し合う	57	9	34
電子的に資料やプリントを配布	57	3	40
音声や動画の記録	29	0	71
小テスト	51	6	43
アンケートや問いの回答	86	0	14
質問の回答や生徒へのフィードバック	83	3	14

単位：%

表 14 取り組んだ回答のうち有効だったと回答した割合

使用方法	取り組んだ回答のうち有効だったと回答した割合
調べ学習	100
表やグラフを利用してデータを整理	93
発表資料の作成	100
作文やレポート作成	91
考えたことの共有や比較	96
協働しながらアイデアを出し合う	86
電子的に資料やプリントを配布	95
音声や動画の記録	100
小テスト	89
アンケートや問いの回答	100
質問の回答や生徒へのフィードバック	97

単位：%

取り組んだという回答のうち有効だったと回答した割合が 95%を超えているものは、「調べ学習」「発表資料の作成」「考えたことの共有や比較」「電子的にプリントや資料を配布」「音声や動画の記録」「アンケートや問いや回答」であった。これらは、間違いのない使い方と言える。また、そのうち 70%の教員が取り組んでいるものが、「調べ学習」「発表資料の作成」「考えたことの共有や比較」「アンケートや問いの回答」「質問の回答や生徒へのフィードバック」の5つであり、この5つの使い方はみんな使って上手に行っているものといえる。また、「電子的にプリントや資料を配布」「音声や動画の記録」の2つは、使っている教員は少ないが上手にいく例といえる。

3.4 授業改善への取り組みについて

このプロジェクトで目指す3つの姿を実現するためにどのような課題があるかを自由記述で質問した。主だった回答を抜粋する。

- 教員の授業準備や、生徒へのフィードバックにかけられる時間の確保
- 教員・生徒双方の ICT を使いこなすスキル
- 教員の授業作りの協働に関すること
アイデアの共有や、それを実現するために相談できる体制など
- テーマや問いの立て方

- 探究を授業に取り入れることの難しさ
- ICT 機器やツールの取捨選択(選択肢を多く用意する、という趣旨の回答もあった)
- 生徒の座席配置など、ICT 機器を用いたグループワークを行う時の生徒の動かし方

探究に関しては、生徒にテーマを決めさせた上で自由に調べさせ、資料をまとめ発表、という流れで行い、相応な時間がかかるというイメージがどうしても教員側にあることが伺える。しかし、ガイド付きの探究など、短い時間で授業の中に組み込んで行うことができる探究の授業もあるため、そのような多様な授業の形を紹介していくことで、ある程度は解決できると考える。

問いの立て方や、生徒の動かし方についても、実践の共有や、授業作りの過程の協働を取り入れることである程度は解消できることが期待される。実践の共有や協働を促す施策が求められると考えられる。

4. まとめ

アンケートの分析から得られた提言を最後に提示する。

授業評価アンケートからの提言

1. 教科内でいつでもお互いの教材を参照できる仕組みを作る。
作成中・作成した教材は共有フォルダに格納する。
2. 授業を設計するときに、対話しながら作成する。
3. 実験や実習など多様な授業形態において ICT を活用した実践事例を増やす。

職員アンケートからの提言

1. 「自らの学びを振り返る姿」に関する ICT 機器の活用方法について研修や実践事例の共有を行い、より多くの教員が取り組むよう促す。
2. 「探究する姿」について、探究の多様な形を研修など教員が学ぶ。
3. 有効に活用できた事例の共有
□多くの教員が取り組み、かつ、成功している活用方法:「調べ学習」「発表資料の作成」「考えたことの共有や比較」「電子的にプリントや資料を配布」「音声や動画の記録」「アンケートや問いや回答」
□取り組んだ先生は成功している活用方法:「電子的にプリントや資料を配布」「音声や動画の記録」
4. 教科内を中心として、授業作りの過程で教員どうしが協働することを促す取り組みを行う。
実践事例を共有する機会を増やす。

2023 年度

5. はじめに

今年度の研究成果は、生徒にとった授業評価アンケートと、教員を対象にとった独自のアンケートの2つを対象に分析して評価する。

6. 授業評価アンケートの分析

6.1 授業評価アンケートの概要

授業評価アンケートは、前期(7 月)、後期(12 月)の 2 回実施している。アンケートの実施や項目は、全県共通のものであるが、本校では研究成果の評価のため、独自の質問項目を追加した。

追加した質問項目は以下の4つである。

表15 独自の質問

番号	質問
l1	この授業の中では、ICT 機器(パソコン・スマートフォン等)を有効に活用していたと思う
l2	この授業の中では、自分の疑問や考えを記録したり、自分が知りたいと思ったことを探究したりする用途で、ICT 機器を有効活用していたと思う
l3	この授業の中では、クラスメートの考えに触れたり、協力して作業したりする場面で、ICT 機器を有効活用していたと思う
l4	この授業の中では、自分が学習したことをまとめたり、振り返ったりする場面で、ICT 機器を有効活用していたと思う

この4つの独自質問は、l1 が全体的に ICT を有効活用できたかどうか、l2 から l4 までの質問が、このプロジェクトで目指す3つの姿が実現できていたかどうかを、生徒からの視点で問うものとなっている。この節では、この独自質問に対する回答から、授業研究の成果を評価していく。

6.2 学年ごとの分析

大まかな傾向を掴むために、l1 の質問にしばり、学年ごとにどのような差が生じているのかを調べた。これは、1、2学年に1人1台端末とロイロノートが導入されており、3学年は導入されていないため(ロイロノートは他学年も使用可能)、そこに差があるのか確かめる目的がある。

質問に対する回答は、4:かなり当てはまる、1:ほとんど当てはまらない、の4段階の形式となっている。

表 16 【前期】質問 l1 に対する回答の割合

	4	3	2	1
1 年	78.4	17.1	3.1	1.4
2 年	66.7	20.4	9.8	3.1
3 年	47.6	20.6	11.3	20.5

単位:%

表 17 【後期】質問 l1 に対する回答の割合

	4	3	2	1
1 年	80.4	15.4	2.7	1.5
2 年	78.9	15.6	3.8	1.7
3 年	52.5	17.6	17.4	12.5

単位:%

大まかな傾向としては、1年生が最も有効に活用していると考えている生徒の割合が高くなっている。1人1台端末を活用して2年目の2年生も、活用率が高い。行事のまとめを ICT で行ったことで、活用率が向上したと考えられる。また、3年生はBYODの形で活用しているが、前期に比べて後期のほうが積極的な活用であった。全体的に活用率が向上している。これは令和5年度後期から生成 AI のパイロット校になったことも要因として言えるだろう。

6.3 教科毎の分析

l1に対する回答の割合を教科別にまとめたのが、表18、表19である。

表 18【前期】質問 l1 に対する回答の割合

	4	3	2	1
国語科	36.5	51.8	10.1	1.6
地 歴 ・ 公民科	39.9	51.1	7.5	1.6
数学科	40.0	50.4	8.3	1.2
理科	41.9	50.0	6.8	1.4
保健体育科	37.7	51.5	8.7	1.4
芸術科	47.2	48.5	3.9	0.4
外国語科	43.8	47.8	7.1	1.4
家庭科	40.6	54.6	4.4	0.4
情報科	45.9	44.3	8.5	1.2

単位:%

表 19【後期】質問11に対する回答の割合

	4	3	2	1
国語科	64.5	34.1	1.2	0.3
地 歴・ 公民科	65.5	25.2	8.7	2.0
数学科	60.8	27.9	7.7	3.6
理科	40.5	45.4	11.3	2.8
保健体 育科	59.7	27.5	9.9	2.9
芸術科	60.0	31.5	3.9	4.6
外国語 科	60.7	27.5	10.1	1.7
家庭科	49.6	40.4	7.0	3.0
情報科	77.9	21.5	0.6	0.0

単位: %

後期で向上が見られたのは、公開研究授業を実施するにあたって、各教科で実施した巡回研修で先生方のノウハウや ICT の活用方法を共有する時間を設けたことが要因ではないかと考える。また、公開研究授業の実施において、一人の先生が授業を作りこむのではなく、チームティーチングの観点から、各教科で授業作成をしたことが、全体的な利活用向上に繋がったと言える。

7. 職員アンケートの分析

7.1 職員アンケートの概要

職員アンケートは、2024 年 1 月に全職員対象に行った。独自の質問で構成された Web から回答するアンケートである。回答数は 41 人であった。

アンケートは大きく分けて以下の部分から構成されている。

- 3つの姿に対する取り組みについて
- 授業内での ICT の活用状況について
- 教科内の授業改善への取り組みについて
- ICT プロジェクトの取り組みに対するフィードバック

ここでは、1から3について取り扱うこととする。

7.2 3つの姿に対する取り組みに関する回答の分析

職員アンケートでは、3つの姿についてそれぞれ、それが見られることが期待されるアンケートに取り組んだかについて質問している。回答は、ICT を活用して取り組んだ、ICT は活用していないが取り組んだ、取り組んでいない、の3つの選択肢から回答してもらっている。この質問に対する回答を表 20、表 21 に示す。

表 20 3つの姿に取り組んだかを尋ねた質問に対する回答

	ICT 活用して取り組んだ	ICT は活用していないが取り組んだ	取り組んでいない
探究する姿	70.6	12.6	16.8
協働する姿	78.6	17.9	3.5
自らの学びを振り返る姿	53.1	18.1	28.8

単位: %

表 21 3つの姿に取り組んだかを尋ねた質問に対する回答

	ICT の利用の有無にかかわらず取り組んだ割合	取り組んだとの回答のうち ICT を利用したと回答した割合
探究する姿	80.2	90.0
協働する姿	94.3	90.0
自らの学びを振り返る姿	70.5	50.0

単位: %

表 21 から ICT の利用の有無に関わらず取り組んだと回答している割合は、協働する姿に関するものが 94.3%と最も高く、ほとんどの教員が行っていることがわかる。ロイロノートの共有ノートの使用率が増え、更に ICT を利用しやすくなったことが要因と言える。探究する姿については、ICT を利用している割合が非常に高く、親和性が高いことが伺える。自らの学びを振り返る姿については、取り組んだ割合、ICT を利用する割合がともに比較すると低く、ICT の活用を推進することにより取り組む教員の割合が増えることが期待される。次年度以降の課題とも考えられる。

次に、それぞれの姿において、どのような取り組みをしたか、代表的な回答をあげる。

探究する姿-ICT を活用した取り組み

- 疑問点を調べさせる
- 意味や由来など、題材について詳細な情報を調べさせる
- 英作文などで自分が伝えたいことを表現する方法を調べさせる
- 資料をもとに調べたことを、Google スライドなどにまとめて発表させる

探究する姿-ICT を活用しない取り組み

- すぐに答えを示さずに、回答を考える時間を増やした

ここでは、探究=何か生徒が ICT 機器で調べる、という授業の構図を多くの教員が認識していることが伺える。しかし、探究にも様々な形があり、教員が提示した実物や、文章など様々な資料を題材に探究することも考えられる。より多様な探究の形を示すことで、より多くの授業で探究的に学習する生徒の姿が見られるようになることが期待される。

協働する姿-ICT を活用した取り組み

- ロイロノートや Classroom、ジャムボードを用いた意見の共有
- 共有ノートを用いた成果物をグループで協働制作する
- 制作物や成果物を共有する
- スプレッドシートを用いた相互評価

協働する姿-ICT を活用しない取り組み

- レポートやポスターなどの作品の相互評価
- ペアワーク(英語における会話や考察の交換)
- マナボードを利用した協働作業
- 教えあい

ICT の利用の有無に関わらず、協働的な学習を多用な形で教員が授業に取り入れていることがわかる。この点については、このままアナログ・デジタル、それぞれの良い所を活かし、多様な形での取り組みを推奨していけばよいと考える。

自ら学びを調整する姿-ICT を活用した取り組み

- デジタルワークシートに対するフィードバック
- 1 枚ポートフォリオをロイロノートで作成させた
- 授業の振り返りを、ロイロノートや、Google のサービス(ドキュメントやフォームズ)で作成

自ら学びを調整する姿-ICT を活用しない取り組み

- プリントによる振り返り(振り返りシート、カードなど)
- 繰り返し発表を行うなどして、上達を実感できるように意図した取り組み(英語における会話文の発表など)

アナログ・デジタルともに振り返りシートなどの形で振り返る取り組みは行われている。紙に比べると、デジタルは教員の管理の手間が削減できる面がある。そのため ICT の活用を進めることで、より少ない手間で、振り返りシートの管理やフィードバックが行える可能性が

ある。それにより、振り返りへの取り組みの増加を期待できる。

7.3 授業内の ICT 活用に関する質問の分析

生徒の利用状況に関する認識を知るため、「1 回の授業の中で生徒が ICT を活用する機会が一度でもあった授業は、授業全体のおおよそ何割ぐらいですか?」という質問文で、20%刻みの 5 段階で回答してもらう設問を用意した。

表 22 「1 回の授業の中で生徒が ICT を活用する機会が一度でもあった授業はおおよそ何割ぐらいですか?」への回答の割合

80%-100%	50.6
60%-79%	17.1
40%-59%	12.6
20%-39%	7.7
0%-19%	12.0

単位:%

この回答からは、約半分の教員が、自分の授業において、ほぼ毎回生徒は ICT 機器を活用していると認識していることがわかる。

次に、教員自身の ICT 活用の状況の質問を分析する。

表 23 教員自身が利用した ICT サービス

Google Classroom	85.4%
Google ドキュメント	24.1%
Google スプレッドシート	34.6%
Google スライド	74.4%
ロイロノート	90.1%
Google フォーム	78.0%

単位:%

昨年度のアンケート結果と比較すると、ロイロノートの活用が飛躍的に向上した。これはロイロノートの機能が向上したことも要因である。以前は Google フォームで行っていたアンケートをロイロノートのテスト機能を代替するようになった。また、アンケート機能を用いて問いに回答させている機会を設けている教員が多いことも伺える。

どのような使用方法が有効だったと認識しているかについて、質問した。表 24 には、有効だったと回答する割合を示す。

表 24 ICT 機器やサービスの活用方法について、有効だったと回答した教員の割合

使用方法	有効 やや有効	あまり有効ではない 有効ではない	当てはまる活動をしていない
調べ学習	98	0	2
表やグラフを利用してデータを整理	70	3	27
発表資料の作成	87	0	13
作文やレポート作成	80	0	20
考えたことの共有や比較	77	3	20
協働しながらアイデアを出し合う	57	9	34
電子的に資料やプリントを配布	58	3	39
音声や動画の記録	29	0	71
小テスト	78	10	12
アンケートや問いの回答	96	0	4
質問の回答や生徒へのフィードバック	87	3	10

単位:%

表 25 取り組んだ回答のうち有効だったと回答した割合

使用方法	取り組んだ回答のうち有効だった割合
調べ学習	100
表やグラフを利用してデータを整理	100
発表資料の作成	100
作文やレポート作成	98
考えたことの共有や比較	90
協働しながらアイデアを出し合う	78
電子的に資料やプリントを配布	96
音声や動画の記録	100
小テスト	81
アンケートや問いの回答	100

質問の回答や生徒へのフィードバック	98
-------------------	----

単位:%

取り組んだという回答のうち有効だったと回答した割合が多かったものは、「調べ学習」「発表資料の作成」「考えたことの共有や比較」「電子的にプリントや資料を配布」「音声や動画の記録」「アンケートや問いの回答」であった。これらは、間違いのない使い方と言える。また、「電子的にプリントや資料を配布」「音声や動画の記録」の2つは、使っている教員は少ないが上手くいく例といえる。

7.4 授業改善への取り組みについて

このプロジェクトで目指す3つの姿を実現するためにどのような課題があるかを自由記述で質問した。主だった回答を抜粋する。

- 教員の授業準備や、生徒へのフィードバックにかけられる時間の確保
- 教員・生徒双方の ICT を使いこなすスキル
- 教員の授業作りの協働に関すること
アイデアの共有や、それを実現するために相談できる体制など
- テーマや問いの立て方
- 探究を授業に取り入れることの難しさ
- ICT 機器やツールの取捨選択(選択肢を多く用意する、という趣旨の回答もあった)
- 生徒の座席配置など、ICT 機器を用いたグループワークを行う時の生徒の動かし方

探究に関しては、生徒にテーマを決めさせた上で自由に調べさせ、資料をまとめ発表、という流れで行い、相当な時間がかかるというイメージがどうしても教員側にあることが伺える。しかし、ガイド付きの探究など、短い時間で授業の中に組み込んで行うことができる探究の授業もあるため、そのような多様な授業の形を紹介していくことで、ある程度は解決できると考える。

問いの立て方や、生徒の動かし方についても、実践の共有や、授業作りの過程の協働を取り入れることである程度は解消できることが期待される。実践の共有や協働を促す施策が求められると考えられる。

8. まとめ

アンケートの分析から得られた提言を最後に提示する。

授業評価アンケートからの提言

1. 教科内でいつでもお互いの教材を参照できる仕組みを作る。
作成中・作成した教材は共有フォルダに格納する。
2. 授業を設計するときに、対話しながら作成する。
3. 実験や実習など多様な授業形態において ICT を活用した実践事例を増やす。

職員アンケートからの提言

1. 「自らの学びを振り返る姿」に関して ICT 機器の活用方法について研修や実践事例の共有を行い、より多くの教員が取り組むよう促す。
2. 「探究する姿」について、探究の多様な形を研修など教員が学ぶ。
3. 教科内を中心として、授業作りの過程で教員どうしが協働することを促す取り組みを行う。
実践事例を共有する機会を増やす。

9. 謝辞

このような報告書が書けるのは、多くの先生が授業研究に前向きに取り組んでいただいた結果である。忙しい中で、毎学期実施している巡回研修や ICT 集合研修会に参加していただき、日頃から新たな取り組みに挑戦している先生方に感謝の意を表して結びとする。

2024 年度

10. はじめに

今年度の研究成果も、生徒にとった授業評価アンケートと、教員を対象にとった独自のアンケートの2つを対象に分析して評価する。

11. 授業評価アンケートの分析

11.1 授業評価アンケートの概要

授業評価アンケートは、前期(7 月)、後期(12 月)の 2 回実施している。アンケートの実施や項目は、全県共通のものであるが、本校では研究成果の評価のため、独自の質問項目を追加した。

追加した質問項目は以下の4つである。

表 26 独自の質問

番号	質問
11	この授業の中では、ICT 機器(パソコン・スマートフォン等)を有効に活用していたと思う
12	この授業の中では、自分の疑問や考えを記録したり、自分が知りたいと思ったことを探究したりする用途で、ICT 機器を有効活用していたと思う
13	この授業の中では、クラスメートの考えに触れたり、協力して作業したりする場面で、ICT 機器を有効活用していたと思う
14	この授業の中では、自分が学習したことをまとめたり、振り返ったりする場面で、ICT 機器を有効活用していたと思う

この4つの独自質問は、11 が全体的に ICT を有効活用できたかどうか、12 から14 までの質問が、このプロジェクトで目指す3つの姿が実現できていたかどうかを、生徒からの視点で問うものとなっている。この節では、この独自質問に対する回答から、授業研究の成果を評価していく。今年度からは全学年 1 人一台端末を用いて授業を行っているため、学年別の集計は行わない。

11.2 教科毎の分析

11に対する回答の割合を教科別にまとめたのが、表 27、表 28 である。

表 27【前期】質問 11 に対する回答の割合

	4	3	2	1
国語科	63.1	35.0	4.5	2.1
地 歴 ・ 公民科	47.5	35.0	7.8	1.0
数学科	52.5	39.5	7.2	0.9
理科	67.4	26.0	5.2	1.5

保健体育科	62.4	32.5	4.3	0.9
芸術科	72.3	26.6	1.1	0
外国語科	56.3	41.4	2.3	0
家庭科	27.1	51.2	17.3	4.5
情報科	70.0	25.9	3.5	0.6

単位:%

表 28【後期】質問 11 に対する回答の割合

	4	3	2	1
国語科	58.6	35.0	4.5	1.9
地 歴 ・ 公民科	56.2	35.0	7.8	1.0
数学科	51.9	41.4	4.8	1.9
理科	57.1	35.9	5.0	2.0
保健体育科	55.1	29.0	7.8	8.1
芸術科	67.8	29.7	2.2	0.3
外国語科	57.9	37.8	2.4	2.0
家庭科	55.1	29.0	7.8	8.1
情報科	67.8	29.7	2.2	0.3

単位:%

質問に対する最高評価「4」の割合を前期と後期と比較すると、多くの教科で向上が見られた。特に地歴・公民科、外国語科、家庭科において向上が見られた。要因としては、公開研究授業に向けて実施した巡回研修等で、先生方のノウハウや ICT の活用方法を共有する時間を設けたためと考えられる。その際に職員会議後に実施したミニ研修で「生成 AI の活用事例のシェア」が大きかったようだ。また、一人の先生が授業を作りこむのではなく、チームティーチングの観点から各教科で授業作成をしたことが、全体的な活用向上に繋がったと言える。

12. 職員アンケートの分析

12.1 職員アンケートの概要

職員アンケートは、2025 年 1 月に全職員対象に行った。独自の質問で構成された Web から回答するアンケートである。回答数は 51 人であった。

アンケートは大きく分けて以下の部分から構成されている。

1. 3つの姿に対する取り組みについて
 2. 授業内での ICT の活用状況について
 3. 教科内の授業改善への取り組みについて
 4. ICT プロジェクトの取り組みに対するフィードバック
- ここでは、1から3について取り扱うこととする。

12.2 3つの姿に対する取り組みに関する回答の分析

職員アンケートでは、3つの姿についてそれぞれ、それが見られることが期待されるアンケートに組み込まれたかについて質問している。回答は、ICT を活用して取り組んだ、ICT は活用していないが取り組んだ、取り組んでいない、の3つの選択肢から回答してもらっている。この質問に対する回答を表 29、表 30 に示す。

表 29 3つの姿に取り組んだかを尋ねた質問に対する回答

	ICT 活用して取り組んだ	ICT は活用していないが取り組んだ	取り組んでいない
探究する姿	80.1	13.5	6.4
協働する姿	80.4	18.0	1.6
自らの学びを振り返る姿	60.2	15.7	24.1

単位:%

表 30 3つの姿に取り組んだかを尋ねた質問に対する回答

	ICT の利用の有無にかかわらず取り組んだ割合	取り組んだとの回答のうち ICT を利用したと回答した割合
探究する姿	93.6	89.0
協働する姿	98.4	95.0
自らの学びを振り返る姿	75.9	62.3

単位:%

表 30 から ICT の利用の有無に関わらず取り組んだと回答している割合は、協働する姿に関するものが 98.4%と最も高く、ほとんどの教員が行っていることがわかる。生成 AI の活用が多くの教員間で進み、またロイロノートの共有ノートがアップデートされ、より使いやすくなったことが要因と言える。探究する姿については、ICT を利用している割合が例年同様高水準を示している。これは ICT を活用することで対話が生まれやすいということが言える。自らの学びを振り返る姿については、取り組んだ割合、ICT を利用する割合がともに比較すると低い。これは振り返りを行う際に紙ベースで行っている教員が多いため、この結果となっている。自己調整に関しては今年度焦点を当てて取り組んできたが、教員間で差が出てしまったので、今後は研修

棟含めて大幅な改善が必要である。

次に、それぞれの姿において、どのような取り組みをしたか、代表的な回答をあげる。

探究する姿-ICT を活用した取り組み

- 授業で扱った問いについて調べさせる
- 問題解決のために必要な意味や由来など、題材について詳細な情報を調べさせる
- 発表を行う際に自分が伝えたいことを表現する方法を調べさせる

探究する姿-ICT を活用しない取り組み

- 思考を増やすために、今までの手順を振り返りスモールステップで行う授業展開や問いの出し方について研究し、大きな問いに辿り着く前段階として小さな問いを立て、大きな問いの答えに迫る道しるべを示した。

ここでは、探究=何か生徒が ICT 機器で調べる、という授業の構図を多くの教員が認識していることが伺える。しかし、探究にも様々な形があり、教員が提示した実物や、文章など様々な資料を題材に探究することも考えられる。

協働する姿-ICT を活用した取り組み

- ロイロノートを用いた意見の共有
- 制作物や成果物を共有する
- 相互評価

協働する姿-ICT を活用しない取り組み

- レポートやポスターなどの作品の相互評価
- ペアワーク(会話や考察、意見の交換)
- 教えあいの精神

ICT の利用の有無に関わらず、協働的な学習を多様な形で教員が授業に取り入れていることがわかる。

自ら学びを調整する姿-ICT を活用した取り組み

- デジタルワークシートに対するフィードバック
- ポートフォリオをロイロノートで作成させた
- 授業の振り返りを、ロイロノートや、Google のサービス(ドキュメントやフォームズ)で作成

自ら学びを調整する姿-ICT を活用しない取り組み

- プリントによる振り返り(振り返りシート、カードなど)
- 繰り返し発表を行うなどして、上達を実感できるように意図した取り組み
- 生徒のレベルに応じた課題配信

アナログ・デジタルともに振り返りシートなどの形で振り返る取り組みは行われている。紙に比べると、デジタルは教員の管理の手間が削減できる面がある。そのためICTの活用を進めることで、より少ない手間で、振り返りシートの管理やフィードバックが行える可能性がある。専修大学望月准教授の講演をもとに新たな取り組みを期待したい。

12.3 授業内のICT活用に関する質問の分析

生徒の利用状況に関する認識を知るため、「1回の授業の中で生徒がICTを活用する機会が一度でもあった授業は、授業全体のおおよそ何割ぐらいですか？」という質問文で、20%刻みの5段階で回答してもらう設問を用意した。

表31 「1回の授業の中で生徒がICTを活用する機会が一度でもあった授業はおおよそ何割ぐらいですか？」への回答の割合

80%-100%	56.6
60%-79%	18.0
40%-59%	10.9
20%-39%	4.5
0%-19%	10.0

単位:%

この回答からは、約6割の教員が、自分の授業において、ほぼ毎回生徒はICT機器を活用していると認識していることがわかる。

次に、教員自身のICT活用の状況の質問を分析する。

表32 教員自身が利用したICTサービス

Google Classroom	88.3
Google ドキュメント	18.1
Google スプレッドシート	28.8
Google スライド	66.4
ロイロノート	92.0
Google フォーム	82.3
スタディサプリ	56.3
ChatGPT	55.7

単位:%

機能が向上したことが要因で多くの場面でロイロノートの使用が多かった。生成AIの登場によりChatGPTの活用が半数以上の教員でも見られた。今後はより授業にどう活用できるかを追求していきたい。また、スタディサプリの活用を今後の課題としたい。

どのような使用方法が有効だったと認識しているかについて、質問した。表33には、有効だったと回答する割合を示す。

表33 ICT機器やサービスの活用方法について、有効だったと回答した教員の割合

使用方法	有効 やや有効	あまり有効ではない 有効ではない	当てはまる活動をしていない
調べ学習	95	3	2
表やグラフを利用してデータを整理	81	0	29
発表資料の作成	91	3	6
作文やレポート作成	84	1	15
考えたことの共有や比較	79	13	8
協働しながらアイデアを出し合う	79	3	18
電子的に資料やプリントを配布	62	11	27
音声や動画の記録	98	2	0
小テスト	51	14	35
アンケートや問いの回答	98	0	2
質問の回答や生徒へのフィードバック	74	1	25

単位:%

表 34 取り組んだ回答のうち有効だったと回答した割合

使用方法	割合 有効だったと回答した 取り組んだ回答のうち
調べ学習	98
表やグラフを利用してデータを整理	98
発表資料の作成	98
作文やレポート作成	98
考えたことの共有や比較	90
協働しながらアイデアを出し合う	78
電子的に資料やプリントを配布	96
音声や動画の記録	98
小テスト	81
アンケートや問いの回答	98
質問の回答や生徒へのフィードバック	98

単位：%

取り組んだという回答のうち有効だったと回答した割合が多かったものは、例年通り「調べ学習」「発表資料の作成」「考えたことの共有や比較」「電子的にプリントや資料を配布」「音声や動画の記録」「アンケートや問いや回答」であった。これらは、間違いのない使い方と言える。また、「電子的にプリントや資料を配布」「音声や動画の記録」の2つは、教科にバランスの差があった。国語や英語での有効活用例があげられた。

12.4 授業改善への取り組みについて

このプロジェクトで目指す3つの姿を実現するためにどのような課題があるかを自由記述で質問した。主だった回答を抜粋するが、基本的には例年通りの結果だった。

- 教員の授業準備や、生徒へのフィードバックにかけられる時間の確保
- 教員・生徒双方の ICT を使いこなすスキル
- 教員の授業作りの協働に関すること
アイデアの共有や、それを実現するために相談できる体制など
- テーマや問いの立て方
- 生徒の座席配置など、ICT 機器を用いたグループワークを行う時の生徒の動かし方

13. まとめ

アンケートの分析から得られた提言を提示する。

授業評価アンケートからの提言

- 教科内でいつでもお互いの教材を参照できる仕組みを作る。
- 作成した教材は共有フォルダに格納し、誰でもフリーに見ることができるようにする。
- 授業を設計するときに、複数の教員と意見をすり合わせながら作成する。

職員アンケートからの提言

- 「自らの学びを振り返る姿」に関して研修や実践事例の共有を行い、多くの教員が取り組むよう促す。
- 「教科をチームに」を合言葉に、教科内を中心として、授業作りの過程で教員どうしが協働することを促す取り組みを行う。

14. 謝辞

このような報告書が書けるのは、多くの先生が授業研究に前向きに取り組んでいただいた結果である。校務忙多忙の中で、各学期に1回開催している巡回研修や ICT 集合研修会(全2回)に参加していただき、授業づくりだけでなく、お互いのフィードバックを日頃から取り組んでいただけている先生方に感謝の意を表して結びとする。

2025 年度

15. はじめに

今年度の研究成果も、生徒にとった授業評価アンケートと、教員を対象にとった独自のアンケートの2つを対象に分析して評価する。

16. 授業評価アンケートの分析

16.1 授業評価アンケートの概要

授業評価アンケートは、前期(7 月)、後期(12 月)の 2 回実施している。アンケートの実施や項目は、全県共通のものであるが、本校では研究成果の評価のため、独自の質問項目を追加した。

追加した質問項目は以下の4つである。

表 35 独自の質問

番号	質問
l1	この授業の中では、ICT 機器(パソコン・スマートフォン等)を有効に活用していたと思う
l2	この授業の中では、自分の疑問や考えを記録したり、自分が知りたいと思ったことを探究したりする用途で、ICT 機器を有効活用していたと思う
l3	この授業の中では、クラスメートの考えに触れたり、協力して作業したりする場面で、ICT 機器を有効活用していたと思う
l4	この授業の中では、自分が学習したことをまとめたり、振り返ったりする場面で、ICT 機器を有効活用していたと思う

この4つの独自質問は、l1 が全体的に ICT を有効活用できたかどうか、l2 から l4 までの質問が、このプロジェクトで目指す3つの姿が実現できていたかどうかを、生徒からの視点で問うものとなっている。この節では、この独自質問に対する回答から、授業研究の成果を評価していく。今年度からは全学年 1 人一台端末を使用しているため、学年別の集計は行わない。

16.2 教科毎の分析

l1 に対する回答の割合を教科別にまとめたのが、表 36、表 37 である。

表 36【前期】質問 l1 に対する回答の割合

	4	3	2	1
国語科	52.4	41.9	4.6	2.0
地 歴・公民科	45.0	44.2	8.9	1.9
数学科	41.4	49.4	8.6	0.6
理科	45.3	35.5	13.3	5.9
保健体	48.5	47.1	2.6	1.8

育科				
芸術科	60.7	33.9	4.4	1.1
外国語科	61.5	34.2	4.3	0
家庭科	48.5	47.1	2.6	1.8
情報科	60.7	33.9	4.4	1.1

単位:%

表 37【後期】質問 l1 に対する回答の割合

	4	3	2	1
国語科	57.8	39	3.2	0
地 歴・公民科	51.1	41.7	5.5	1.7
数学科	44.9	45.2	8.8	1.1
理科	41.2	37.6	7.4	3.9
保健体育科	60.3	34.1	4.9	0.7
芸術科	59.3	34.7	4.8	1.2
外国語科	60.6	34.4	3.7	1.3
家庭科	59.1	33.3	7.6	0
情報科	59.3	34.7	4.8	1.2

単位:%

後期で向上が見られたのは、「問いを推進力とする授業づくり」というテーマで各教員が同じ方向性を見て授業づくりを行った結果であると考えられる。また、巡回研修ではシンキングツールの有効活用について触れ、答えに行きつくまでの過程を大切にすることを改めて認識した。今年度もチームティーチングの観点から、各教科で授業作成をしたことが、全体的な利活用向上に繋がったと言える。

17. 職員アンケートの分析

17.1 職員アンケートの概要

職員アンケートは、2026 年 1 月に全職員対象に行った。独自の質問で構成された Web から回答するアンケートである。回答数は 50 人であった。

アンケートは大きく分けて以下の部分から構成されている。

1. 3つの姿に対する取り組みについて
2. 授業内での ICT の活用状況について
3. 教科内の授業改善への取り組みについて
4. ICT プロジェクトの取り組みに対するフィードバック

ここでは、1 から 3 について取り扱うこととする。

17.2 3つの姿に対する取り組みに関する回答の分析

職員アンケートでは、3つの姿についてそれぞれ、それが見られることが期待されるアンケートに組み込まれたかについて質問している。回答は、ICT を活用して取り組んだ、ICT は活用していないが取り組んだ、取り組んでいない、の3つの選択肢から回答してもらっている。この質問に対する回答を表 38、表 39 に示す。

表 38 3つの姿に取り組んだかを尋ねた質問に対する回答

	ICT 活用して取り組んだ	ICT は活用していないが取り組んだ	取り組んでいない
探究する姿	80.6	12.9	6.5
協働する姿	85.1	6.9	8.0
自らの学びを振り返る姿	49.9	27.0	23.1

単位:%

表 39 3つの姿に取り組んだかを尋ねた質問に対する回答

	ICT の利用の有無にかかわらず取り組んだ割合	取り組んだとの回答のうち ICT を利用したと回答した割合
探究する姿	93.5	95.8
協働する姿	92.0	85.0
自らの学びを振り返る姿	46.9	50.5

単位:%

表 39 から ICT の利用の有無に関わらず取り組んだと回答している割合は、探究する姿に関するものが 93.5%と最も高く、ほとんどの教員が行っていることがわかる。「問いを推進力とする授業づくり」というテーマは探究する姿を追求する上で設定したテーマであり、しっかりと結果に結びついたと言える。自らの学びを振り返る姿については、例年通り数値は低い、振り返り中心であった取り組みが少しずつ変化してきた。詳細については授業研究のパートで触れている。

次に、それぞれの姿において、どのような取り組みをしたか、代表的な回答をあげる。

探究する姿-ICT を活用した取り組み

- 疑問に思うことやすぐに解決できないことについて調べさせる
- 自ら立てた問いについて詳細な情報を調べさせる
- 資料の分析をする際に、他の資料と比較する際に調べさせる

探究する姿-ICT を活用しない取り組み

- 自ら立てた問いについて、どのような行動で解決策を見出せるか、手順を考える

今までは、探究=何か生徒が ICT 機器で調べる、という認識が多かったが、問いに対してのアプローチの方法や関連ごとを調べることで本質の問いを膨らませる活動が増えた。これは「生きる力」に繋がる学びの仕方であると考えます。

協働する姿-ICT を活用した取り組み

- ロイロノートを用いた意見の共有、相互評価
- 立てた問いを共有し、知りたいことをより深堀する
- Canvaを活用した資料作成

協働する姿-ICT を活用しない取り組み

- レポートやポスターなどの作品の相互評価
- 学びあい

ICT の利用の有無に関わらず、協働的な学習を多様な形で教員が授業に取り入れていることがわかる。多様な形での取り組みを推奨していけばよいと考える。

自ら学びを調整する姿-ICT を活用した取り組み

- ChatGPTのボイスチャットを使用した英語の振り返り
- 個々の学びに応じた使用言語の調整
- 授業の振り返りを、ロイロノートや、Google のサービス(ドキュメントやフォームズ)で作成

自ら学びを調整する姿-ICT を活用しない取り組み

- プリントによる振り返り

振り返りだけではなく、様々な形の自己調整の姿が見られた。授業時間の有効活用について巡回研修でも多くの意見が出ており、自宅学習の意義と授業での学びの意義を改めて考える機会が多くなった。

17.3 授業内の ICT 活用に関する質問の分析

生徒の利用状況に関する認識を知るため、「1 回の授業の中で生徒が ICT を活用する機会が一度でもあった授業は、授業全体のおおよそ何割ぐらいですか？」という質問文で、20%刻みの 5 段階で回答してもらう設問を用意した。

表 40 「1 回の授業の中で生徒が ICT を活用する機会が一度でもあった授業はおおよそ何割ぐらいですか？」への回答の割合

80%-100%	57.1
60%-79%	12.3
40%-59%	15.9
20%-39%	5.0
0%-19%	9.7

単位：%

この回答からは、半数以上の教員が、自分の授業において、ほぼ毎回生徒は ICT 機器を活用していると認識していることがわかる。

次に、教員自身の ICT 活用の状況の質問を分析する。

表 41 教員自身が利用した ICT サービス

Google Classroom	77.8
Google ドキュメント	16.9
Google スプレッドシート	38.8
Google スライド	41.1
ロイロノート	96.6
Google フォーム	78.9
スタディサプリ	35.0
ChatGPT	79.5
Gemini	59.7
Canva	89.0

単位：%

例年通りロイロノートの使用率が多い。これは研究 ICT が実施している ICT 研修会のベースがロイロノートであることも影響しているだろう。また、今年は Canva の活用も多くあり、授業内の成果物だけでなく、文化祭などの学校行事での活用が増えたことが要因である。生成 AI の活用も高水準を示しており、授業の運営方法が変わってきていると言えるだろう。

表 42 ICT 機器やサービスの活用方法について、有効だったと回答した教員の割合

使用方法	やや有効 有効	あまり有効ではない 有効ではない	当てはまる活動をしていない
調べ学習	95	5	0
表やグラフを利用してデータを整理	79	13	18
発表資料の作成	94	6	0
作文やレポート作成	77	14	9
考えたことの共有や比較	84	9	7
協働しながらアイデアを出し合う	66	14	20
電子的に資料やプリントを配布	73	15	12
音声や動画の記録	64	24	12
小テスト	43	27	40
アンケートや問いの回答	88	2	10
質問の回答や生徒へのフィードバック	79	12	9

単位：%

表 43 取り組んだ回答のうち有効だったと回答した割合

使用方法	割合 有効だったと回答したうち
調べ学習	96
表やグラフを利用してデータを整理	96
発表資料の作成	98
作文やレポート作成	98
考えたことの共有や比較	88
協働しながらアイデアを出し合う	92
電子的に資料やプリントを配布	84
音声や動画の記録	86
小テスト	65
アンケートや問いの回答	75
質問の回答や生徒へのフィードバック	98

単位:%

例年通りという結果だが、小テストの運営に関しては昨年より大きく落ち込んだ。理由としては、Wi-Fi 環境が悪化していることが原因だろう。年度途中から授業で支障がでるほど Wi-Fi 接続ができないなどの障害があったため、平等性を保つ必要がある活動、特に小テストなどに関しては紙ベースというケースが随所で見られた。県とも連携を取り、授業に支障が出ないように取り組んでいきたい。

17.4 授業改善への取り組みについて

このプロジェクトで目指す3つの姿と今年度テーマとして掲げた「問いを推進力とする授業づくり」を実現するためにどのような課題があるかを自由記述で質問した。主だった回答を抜粋する。

- 教員の授業準備や、生徒へのフィードバックにかけられる時間の確保
- 教員の授業作りの協働に関すること
アイデアの共有や、それを実現するために相談できる体制など
- 問いの立て方(大きな問いや小さな問の設定)
- ICT 機器やツールの取捨選択(選択肢を多く用意する、という趣旨の回答もあった)

18. まとめ

アンケートの分析から得られた提言を提示する。

授業評価アンケートからの提言

- ・教科内でいつでもお互いの教材を参照できる仕組みを作る。
- ・ICT 活用について、できる先生がやるのではなく、多くの先生がやってみようという精神が大事である。

職員アンケートからの提言

「探究する姿」について、問いの立て方を工夫することがよりよい探究する姿に繋がるので、多様な形を研修など教員が学ぶことが大切なのではないか。

19. 謝辞

このような報告書が書けるのは、今年度も多くの先生が授業研究に前向きに取り組んでいただいた結果である。先生方には、校務多忙の中で各学期に実施している巡回研修やICT 集合研修会(全2回)、またお昼休みの時間に開催した ICT ミニ研修(希望者のみ)などに参加していただき、感謝の意を表して結びとする。

(様式3)

6-2-1. 令和4年度 県立高校指定校事業（令和4年度指定）実施報告書

学 校 名	県立生田東高等学校（全）	校 長 名	宮地 淳
指 定 名	ICT 利活用授業研究推進校	年 度	令和4年度
研究主題	ICT を活用した「探究する力」「自ら学びを調整する力」「協働する力」を育む授業作り		
3年間の 目 標	○次の3つの力（生徒の姿）を育む授業を実現する ・探究する力「生徒が自分で知りたいと思うことを、探究しようとする姿」 ・自ら学びを調整する力「学んだことや考えたことを自ら振り返るとともに教師と共有し、評価やアドバイスを受けて次の学びに活かそうとする姿」 ・協働する力「学びや探究を他の生徒と共有しながら行い、お互いに学びを深めていく姿」 ○「すべての科目で常に」を目標に、特定の教科や教員に関わらず、必要と考えた時は常に ICT を活用した授業を行えるようにする。 ○「教科をチームに」を目標に、組織的な授業改善を行う文化を根付かせる。		
本年度の 研究内容	(1) 目標 ・すべての教科で ICT を利活用し、生徒が3つの力を発揮することを目指した授業実践に取り組む。 ・研修の仕方、授業研究の進め方、授業実践の共有の仕方それぞれについて、方法を確立する。 ・公開研究授業を実施し、多くの知見を取り入れる。 (2) 実施内容（具体的に） ICT を利活用した生徒が3つの力を発揮することを目指したモデル授業の計画・実施・評価（1人1台端末を導入している第1学年の授業を中心に実践を行う） ・研修の実施（集合研修、教科別研修、職員会議後などのミニ研修） ○集合研修 4月：ロイロノート、Classroom の利用方法の研修 6月：「探究する力」「自ら学びを調整する力」「協働する力」を育む授業を ICT を活用しどのように実現するか。モデル授業・実践報告・指導助言者（専修大学望月准教授）による講評とアドバイス ○ミニ研修会 毎回の職員会議後 ロイロノートの使い方・Tips ○巡回研修 教科会へ推進メンバーが参加し、その教科での ICT を使った授業実践の交流や、よりよい活用方法の検討を行う ・授業研究会の実施 公開研究授業の実施（国語・数学・地歴公民・理科・外国語・保健体育）（令和4年11月25日） ・学習用クラウドサービスや端末の操作・運用マニュアルとポータルサイトの作成 (3) 検証方法と検証結果 ・生徒アンケートの分析 1人1台端末やスマートフォン、学習用クラウドサービスを、授業の学習や、自らの探究にどのように活用しているか、教師からの ICT を活用したフィードバックがどのように学びの調整に役立っているかを調査し、分析する。 授業評価アンケートにおける指定質問項目について、以下の数値を目標とする。 2：単元（内容のまとまり）の学習の中で、他者の考えを知り、自らの考えを広げ深める機会がある 目標値 3.2→令和4年度後期 3.24 3：単元（内容のまとまり）の学習の中で、課題について自分の考えをまとめたり、解決方法について考えたりする場面がある 目標値 3.2→令和4年度後期 3.26 6：授業で得た知識をもとに、自分の考えをまとめたり、課題の解決方法を考えたりすることができた 目標値 3.2→令和4年度後期 3.26 魅力と特色アンケートのうち指定された次の質問項目について、以下の数値を目標とする。		

「課題の発見と解決に向けて 主体的に考えたり、発表しあうなどの協働的な学習活動を行ったりすることによって、中学生のときよりも 思考力・判断力・表現力を高めることができたと思いますか。」 「1. そう思う」の割合 28%→令和4年度卒業生 41.7%

授業評価アンケートにおいて、「この授業の中では、ICT 機器（パソコン・スマートフォン等）を有効に活用していたと思う」という独自の質問項目を設けた。これに対する回答の平均値（令和4年度後期）は、1年生 3.31、2年生 3.03、3年生 3.13 であった。1人1台端末の使用を開始した効果が出ているといえる。

一方で、同じ質問に対する教科間の差は大きく、学年別・教科別で集計した時に、1年生の中で最高の教科は3.7、最低の教科は2.7であった。教師間の差もあわせてみると、三つの教科に分類できることがわかった。この質問に対する回答の平均値の①担当者間の差が小さくかつ高い値を持つ教科（3.6-3.7）、②担当者間の差が大きく中程度の値をもつ教科（3.0-3.3）、③担当者間の差が小さく低い値をもつ教科（2.7）の三つである。これは、まだだれも ICT の利用に積極的になれない教科、利用しはじめた教師が一部の教科、利用方法などを共有し教科として使用している教科、という分類であると解釈できる。今回は教科別でしか集計していないが、科目別に見た場合、同一教科でも違った傾向が出る可能性は十分に考えられる。

・職員アンケートの分析

本校独自で作成した職員向けアンケート（2月実施）において、「生徒が自分で知りたいと思うことを、探究しようとする姿」（以下、「探究しようとする姿」）、「学びや探究を他の生徒と共有しながら行い、お互いに学びを深めていく姿」（以下、「協働しようとする姿」）、「学んだことや考えたことを自ら振り返るとともに教師と共有し、評価やアドバイスを受けて次の学びに活かそうとする姿」（以下、「学びを調整しようとする姿」）が見られることが期待される取り組みを授業で行ったかどうか回答してもらった。

質問	ICT を活用して取り組んだ	ICT を活用していないが取り組んだ	取り組んでいない
「探究しようとする姿」	67.6	8.8	23.5%
「協働しようとする姿」	67.6%	23.5%	5.9%
「学びを調整する姿」	55.9%	20.6%	23.5%

「探究しようとする姿」については、ICT 機器を用いて調べる、まとめるといった活動が広く行われている様子を読み取れる。また、そのような活動が ICT 機器なしではできないことも同時に読み取れる。「協働しようとする姿」が見られる取り組みについては、ICT を利用するかしないかに関わらず多くの職員が取り組んでいることが伺える。この点については、ICT 機器を利用しなければいけないわけではないが、ICT 機器を利用した協働学習の方法を職員が学ぶことで、より良い活動を行える可能性がある。「学びを調整する姿」については、ICT を活用した割合が低いとともに「取り組んでいない」という回答も多いため、そもそもどのような活動がよいのかを職員が学び、そのうえで ICT の活用を考えていく必要がある。

(4) 取組指標の結果

授業評価アンケート（令和4年度後期）

単元（内容のまとめ）の学習の中で、他者の考えを知り、自らの考えを広げ深める機会がある			
回答	令和4年度	令和5年度	令和6年度
4. かなり当てはまる	37.08%	%	%
3. ほぼ当てはまる	51.36%	%	%

2. あまりあてはまらない	9.85%	%	%
1. ほとんどあてはまらない	1.71%	%	%

単元（内容のまとめ）の学習の中で、課題について自分の考えをまとめたり、解決方法について考える場面がある

回答	令和4年度	令和5年度	令和6年度
4. かなり当てはまる	38.38%	%	%
3. ほぼ当てはまる	51.11%	%	%
2. あまりあてはまらない	8.93%	%	%
1. ほとんどあてはまらない	1.58%	%	%

授業で得た知識をもとに、自分の考えをまとめたり、課題の解決方法を考えたりすることができた

回答	令和4年度	令和5年度	令和6年度
4. かなり当てはまる	37.58%	%	%
3. ほぼ当てはまる	51.96%	%	%
2. あまりあてはまらない	8.94%	%	%
1. ほとんどあてはまらない	1.52%	%	%

授業評価アンケート（独自質問）（令和4年度後期）

この授業の中では、ICT 機器（パソコン・スマートフォン等）を有効に活用していたと思う

回答	令和4年度	令和5年度	令和6年度
4. かなり当てはまる	41.40%	%	%
3. ほぼ当てはまる	40.55%	%	%
2. あまりあてはまらない	12.77%	%	%
1. ほとんどあてはまらない	5.28%	%	%

この授業の中では、自分の疑問や考えを記録したり、自分が知りたいと思ったことを探究したりする用途で、ICT 機器を有効活用していたと思う

回答	令和4年度	令和5年度	令和6年度
4. かなり当てはまる	39.53%	%	%
3. ほぼ当てはまる	42.00%	%	%
2. あまりあてはまらない	13.17%	%	%
1. ほとんどあてはまらない	5.31%	%	%

この授業の中では、クラスメートの考えに触れたり、協力して作業したりする場面で、ICT 機器を有効活用していたと思う

回答	令和4年度	令和5年度	令和6年度
4. かなり当てはまる	39.04%	%	%
3. ほぼ当てはまる	41.79%	%	%
2. あまりあてはまらない	13.50%	%	%
1. ほとんどあてはまらない	5.67%	%	%

この授業の中では、自分が学習したことをまとめたり、振り返ったりする場面で、ICT 機器を有効活用していたと思う

回答	令和4年度	令和5年度	令和6年度
4. かなり当てはまる	40.12%	%	%
3. ほぼ当てはまる	41.11%	%	%
2. あまりあてはまらない	13.36%	%	%
1. ほとんどあてはまらない	5.41%	%	%

	魅力と特色ある県立高校づくりについてのアンケート（令和４年度卒業生対象）			
	質問項目 A-4：高校生活において、課題の発見と解決に向けて主体的に考えたり、発表しあうなどの協働的な学習活動を行うことによって、中学生の時よりも思考力・判断力・表現力を高めることができたと思いますか。			
	回答	令和４年度	令和５年度	令和６年度
	① そう思う	41.7%	%	%
	② どちらかといえばそう思う	45.5%	%	%
	③ どちらかといえば満足していない	8.1%	%	%
	④ ほとんどあてはまらない	4.7%	%	%
まとめ	(1) 成果 ・事業の方針にそった研修と、公開研究授業を実施することができた。実践報告をいくつかまとめ共有することができた。 ・授業の中で何らかの形で ICT 機器を利用する先生が多い状態を作り出すことができた。授業評価アンケートでは ICT 機器を活有効に活用していると回答した生徒の割合は、「かなり当てはまる」「やや当てはまる」を合わせて約 82%と高い値となっている。また教科内で担当者ごとに数字が違うというアンケート結果は、新たな模索が始まっていると解釈することができる。 ・複数の担当者の全員が有効に活用していると考えられる教科も生まれている。これは、授業作りの過程で先生同士が協働しなければ達成できない。授業作りにおける協働が生まれていることも成果と言えるだろう。			
	(2)課題（今後の方向性を含む） ・同一科目内や、同一教科内であっても、担当者ごとに有効活用できているかどうかには差がある教科がまだまだ多い。しかし、差があること自体を問題視してしまうと、活用しない方向に統一されてしまうことも十分に考えられる。したがって、差があることは、有効活用されている事例が実践され始めている望ましい状態として捉え、それを同一教科（科目）内で共有する機会を増やす取り組みを行っていく。 ・授業の実施結果を共有するだけではなく、授業を作っていく過程での協働を促すことが課題である。 ・上記の発想をより活かすため、教員の授業スタイルの統一を図るのではなく、各自のスタイル毎に有効活用する方法をガイドする方向で研修を進める。			
その他 特記事項				

(様式3)

6-2-2. 令和5年度 県立高校指定校事業（令和4年度指定）実施報告書

学 校 名	県立生田東高等学校（全）	校 長 名	宮地 淳
指 定 名	ICT 利活用授業研究推進校	年 度	令和5年度
研究主題	ICT を活用した「探究する力」「自ら学びを調整する力」「協働する力」を育む授業作り		
3年間の 目 標	○次の3つの力（生徒の姿）を育む授業を実現する ・探究する力「生徒が自分で知りたいと思うことを、探究しようとする姿」 ・自ら学びを調整する力「学んだことや考えたことを自ら振り返るとともに教師と共有し、評価やアドバイスを受けて次の学びに活かそうとする姿」 ・協働する力「学びや探究を他の生徒と共有しながら行い、お互いに学びを深めていく姿」 ○「すべての科目で常に」を目標に、特定の教科や教員に関わらず、必要と考えた時は常に ICT を活用した授業を行えるようにする。 ○「教科をチームに」を目標に、組織的な授業改善を行う文化を根付かせる。		
本年度の 研究内容	(1) 目標 ・多くの教員がより多くの授業で ICT を利活用し、生徒が3つの力を発揮することを目指した授業実践を行う。 ・研修の仕方、授業研究の進め方、授業実践の共有の仕方それぞれについて、改善を行う。 ・公開研究授業を実施し、他校への研究成果の情報提供につとめる。 (2) 実施内容（具体的に） ICT を利活用した生徒が3つの力を発揮することを目指したモデル授業の計画・実施・評価（1人1台端末を導入している第1学年の授業を中心に実践を行う） ・研修の実施（集合研修、教科別研修、職員会議後などのミニ研修） ○集合研修 4月：ロイロノート、Classroom の利用方法の研修 6月：「探究する力」を育む授業を ICT を活用しどのように実現するか。モデル授業・実践報告・指導助言者（専修大学望月准教授）による講評とアドバイス ○ミニ研修会 毎回の職員会議後 ロイロノートの使い方・Tips ○巡回研修 教科会へ推進メンバーが参加し、その教科での ICT を使った授業実践の交流や、よりよい活用方法の検討を行う ・授業研究会の実施 公開研究授業の実施（国語・地歴公民・数学・理科・保健体育・外国語・家庭科・情報）（令和5年11月23日） ・学習用クラウドサービスや端末の操作・運用マニュアルとポータルサイトの作成 (3) 検証方法と検証結果 ・生徒アンケートの分析 1人1台端末やスマートフォン、学習用クラウドサービスを、授業の学習や、自らの探究にどのように活用しているか、教師からの ICT を活用したフィードバックがどのように学びの調整に役立っているかを調査し、分析する。 授業評価アンケートにおける指定質問項目について、以下の数値を目標とする。 2：単元（内容のまとまり）の学習の中で、他者の考えを知り、自らの考えを広げ深める機会がある 令和4年度後期3.24→令和5年度後期 3.29 3：単元（内容のまとまり）の学習の中で、課題について自分の考えをまとめたり、解決方法について考えたりする場面がある 令和4年度後期3.26→令和5年度後期3.33 6：授業で得た知識をもとに、自分の考えをまとめたり、課題の解決方法を考えたりすることができた 令和4年度後期3.26→令和5年度後期3.32 魅力と特色アンケートのうち指定された次の質問項目について、以下の数値を目標とする。		

「課題の発見と解決に向けて 主体的に考えたり、発表しあうなどの協働的な学習活動を行ったりすることによって、中学生のときよりも 思考力・判断力・表現力を高めることができたと思いますか。」 「1. そう思う」の割合 令和4年度卒業生 41.7%→令和5年度卒業生 31.6%

授業評価アンケートにおいて、「この授業の中では、ICT 機器（パソコン・スマートフォン等）を有効に活用していたと思う」という独自の質問項目を設けた。これに対する回答の平均値（令和5年度後期）は、1年生 3.30、2年生 3.35、3年生 3.13 であった。1人1台端末の使用を開始した効果が出ているといえる。

この数値の教科間の差に注目すると、昨年度は最高の教科は3.7、最低の教科は2.7であった。今年度は、最低の教科が3.0、最高の教科が3.7となっている。ここから教科間の差が小さくなり、全体的にICT機器の活用が進んできたことが読み取れる。教師間の差についてみると、昨年度にあった「担当者間の差が小さく低い値をもつ教科」がなくなっていることがわかった。これは、まだだれもICTの利用に積極的になれない教科であると解釈できるが、そのような教科は無くなったといえる。2点台前半の教員もいるため、すべての教員がICTを活用するようになったとはまだいえないが、少なくともすべての教科が、ICTを活用した授業を行うようになったといえることができる。

・職員アンケートの分析

本校独自で作成した職員向けアンケート（2月実施）において、「生徒が自分で知りたいと思うことを、探究しようとする姿」（以下、「探究しようとする姿」）、「学びや探究を他の生徒と共有しながら行い、お互いに学びを深めていく姿」（以下、「協働しようとする姿」）、「学んだことや考えたことを自ら振り返るとともに教師と共有し、評価やアドバイスを受けて次の学びに活かそうとする姿」（以下、「学びを調整しようとする姿」）が見られることが期待される取り組みを授業で行ったかどうか回答してもらった。

以下は令和4年度と令和5年度のアンケート結果の比較である。

質問	ICT を活用して取り組んだ		ICT を活用していないが取り組んだ		取り組んでいない	
	R4	R5	R4	R5	R4	R5
「探究しようとする姿」	67.6%	77.8%	8.8%	5.6%	23.5%	13.9%
「協働しようとする姿」	67.6%	72.3%	23.5%	11.2%	5.9%	13.9%
「学びを調整する姿」	55.9%	61.1%	20.6%	11.2%	23.5%	22.2%

今年度のテーマであった「探究しようとする姿」については、昨年度と比較し、取り組んでいない割合を大きく減らすことに成功している。特に ICT を活用して取り組んだと回答している割合が増加している。これは狙い通りの成果がでたと考えられる。一方で、「協働しようとする姿」については、ICT を活用して取り組んだという回答の割合は増加しているものの、ICT を活用していない取り組みがそれ以上に減少したため、取り組んでいないという回答が増えてしまっている。ここについては、来年度にフォローが必要だと考えられる。「学びを調整する姿」については、昨年度と同様の数値で、まだ取り組んでいない教員が多いため、ここが来年度のテーマとすべき点であるといえる。

(4) 取組指標の結果

授業評価アンケート（令和5年度後期）

単元（内容のまとめり）の学習の中で、他者の考えを知り、自らの考えを広げ深める機会がある

回答	令和4年度	令和5年度	令和6年度
4. かなり当てはまる	37.08%	39.83%	%
3. ほぼ当てはまる	51.36%	50.46%	%
2. あまりあてはまらない	9.85%	8.41%	%
1. ほとんどあてはまらない	1.71%	1.30%	%

単元（内容のまとめ）の学習の中で、課題について自分の考えをまとめたり、解決方法について考える場面がある

回答	令和4年度	令和5年度	令和6年度
4. かなり当てはまる	38.38%	41.96%	%
3. ほぼ当てはまる	51.11%	50.28%	%
2. あまりあてはまらない	8.93%	6.88%	%
1. ほとんどあてはまらない	1.58%	0.88%	%

授業で得た知識をもとに、自分の考えをまとめたり、課題の解決方法を考えたりすることができた

回答	令和4年度	令和5年度	令和6年度
4. かなり当てはまる	37.58%	41.40%	%
3. ほぼ当てはまる	51.96%	50.29%	%
2. あまりあてはまらない	8.94%	7.36%	%
1. ほとんどあてはまらない	1.52%	0.94%	%

授業評価アンケート（独自質問）（令和4年度後期）

この授業の中では、ICT 機器（パソコン・スマートフォン等）を有効に活用していたと思う

回答	令和4年度	令和5年度	令和6年度
4. かなり当てはまる	41.40%	52.12%	%
3. ほぼ当てはまる	40.55%	36.85%	%
2. あまりあてはまらない	12.77%	7.61%	%
1. ほとんどあてはまらない	5.28%	3.42%	%

この授業の中では、自分の疑問や考えを記録したり、自分が知りたいと思ったことを探究したりする用途で、ICT 機器を有効活用していたと思う

回答	令和4年度	令和5年度	令和6年度
4. かなり当てはまる	39.53%	48.90%	%
3. ほぼ当てはまる	42.00%	39.68%	%
2. あまりあてはまらない	13.17%	8.12%	%
1. ほとんどあてはまらない	5.31%	3.29%	%

この授業の中では、クラスメートの考えに触れたり、協力して作業したりする場面で、ICT 機器を有効活用していたと思う

回答	令和4年度	令和5年度	令和6年度
4. かなり当てはまる	39.04%	46.35%	%
3. ほぼ当てはまる	41.79%	40.80%	%
2. あまりあてはまらない	13.50%	9.17%	%
1. ほとんどあてはまらない	5.67%	3.68%	%

	この授業の中では、自分が学習したことをまとめたり、振り返ったりする場面で、ICT 機器を有効活用していたと思う			
	回答	令和4年度	令和5年度	令和6年度
	4. かなり当てはまる	40.12%	48.41%	%
	3. ほぼ当てはまる	41.11%	40.16%	%
	2. あまりあてはまらない	13.36%	8.00%	%
	1. ほとんどあてはまらない	5.41%	3.43%	%
	魅力と特色ある県立高校づくりについてのアンケート（令和5年度卒業生対象）			
	質問項目 A-4：高校生活において、課題の発見と解決に向けて主体的に考えたり、発表しあうなどの協働的な学習活動を行うことによって、中学生の時よりも思考力・判断力・表現力を高めることができましたと思いますか。			
	回答	令和4年度	令和5年度	令和6年度
	① そう思う	41.7%	31.6%	%
	② どちらかといえばそう思う	45.5%	52.6%	%
	③ どちらかといえば満足していない	8.1%	10.5%	%
	④ ほとんどあてはまらない	4.7%	5.3%	%
まとめ	(1) 成果			
	・事業の方針にそった研修と、公開研究授業を実施することができた。 ・「全ての教科で ICT を活用する授業に取り組む」という目標は実現できたといえる。 ・目標とする3つの姿のうち、「協働する姿」「探究する姿」については、多くの教員が取り組むことができている。			
	(2)課題（今後の方向性を含む）			
	・「全ての教員が ICT を活用する授業に取り組む」という課題に取り組む段階である。 ・3つの姿のうち、「学びを調整する姿」について、集中的に取り組む必要がある。			
その他 特記事項				

(様式3)

6-2-3. 令和6年度 県立高校指定校事業（令和4年度指定）実施報告書

学 校 名	県立生田東高等学校（全）	校 長 名	水上 吉央
指 定 名	ICT 利活用授業研究推進校	年 度	令和6年度
研究主題	ICT を活用した「探究する力」「自ら学びを調整する力」「協働する力」を育む授業作り		
3年間の 目標	○次の3つの力（生徒の姿）を育む授業を実現する ・探究する力「生徒が自分で知りたいと思うことを、探究しようとする姿」 ・自ら学びを調整する力「学んだことや考えたことを自ら振り返るとともに教師と共有し、評価やアドバイスを受けて次の学びに活かそうとする姿」 ・協働する力「学びや探究を他の生徒と共有しながら行い、お互いに学びを深めていく姿」 ○「すべての科目で常に」を目標に、特定の教科や教員に関わらず、必要と考えた時は常に ICT を活用した授業を行えるようにする。 ○「教科をチームに」を目標に、組織的な授業改善を行う文化を根付かせる。		
本年度の 研究内容	(1) 本年度の目標 ・全ての教員が大半の授業で ICT を利活用し、生徒が3つの力を発揮することを目指した授業実践を行う。 ・研修の仕方、授業研究の進め方、授業実践の共有の仕方それぞれについて、改善を行う。 ・公開研究授業を実施し、他校への研究成果の情報提供につとめる。 (2) 実施内容（具体的に） ICT を利活用した生徒が3つの力を発揮することを目指したモデル授業の計画・実施・評価 （1人1台端末を導入している第1学年の授業を中心に実践を行う） ○研修の実施（集合研修、教科別研修、職員会議後などのミニ研修） ・集合研修 4月：ロイロノート、Classroom の利用方法の研修 6月：「自ら学びを調整する姿」を育む授業を ICT を活用しどのように実現するか。モデル授業・実践報告・GW・指導助言者（早稲田大学望月准教授）による講評とアドバイス ・ミニ研修会 毎回の職員会議後 ロイロノートの使い方・Tips ・巡回研修 6月、10月、1月に実施 教科会へ推進メンバーが参加し、その教科での ICT を使った授業実践の交流や、よりよい活用方法の検討を行う。 ・多くの研修で、生成 AI の利活用についての議論を行う。 ○授業研究会の実施 公開研究授業の実施（国語・地歴公民・数学・理科・保健体育・外国語・情報） （令和6年11月22日） ○学習用クラウドサービスや端末の操作・運用マニュアルとポータルサイトの作成 ○ICT を利活用しやすい環境を実現するための整備 ・今年度導入された電子黒板を使いやすくするために、配線 BOX や教壇に上げるためのレールの設置、電子黒板の有線 LAN 化などを整備、電子黒板を用いて生徒発表などを全教室に配信するためのブロードキャストの導入 ・ iMac21 台を導入し、設置するための部屋を整備 (3) 検証方法と検証結果 ・生徒アンケートの分析 1人1台端末やスマートフォン、学習用クラウドサービスを、授業の学習や、自らの探究にどのように活用しているか、教師からの ICT を活用したフィードバックがどのように学びの調整に役立っているかを調査し、分析する。 授業評価アンケートにおける指定質問項目について、以下の数値を目標とする。 2：単元（内容のまとまり）の学習の中で、他者の考えを知り、自らの考えを広げ深める機会がある 令和4年度後期3.24→令和5年度後期 3.29→令和6年度後期3.30 3：単元（内容のまとまり）の学習の中で、課題について自分の考えをまとめたり、解決方法について考えたりする場面がある 令和4年度後期3.26→令和5年度後期3.33→令和6年度後期3.37 6：授業で得た知識をもとに、自分の考えをまとめたり、課題の解決方法を考えたりすることがで		

きた 令和4年度後期 3.26→令和5年度後期 3.32→令和6年度後期 3.35
 魅力と特色アンケートのうち指定された次の質問項目について、以下の数値を目標とする。
 「課題の発見と解決に向けて 主体的に考えたり、発表しあうなどの協働的な学習活動を行ったりすることによって、中学生のときよりも 思考力・判断力・表現力を高めることができたと思いますか。」 「1.そう思う」の割合
 令和4年度卒業生 41.7%→令和5年度卒業生 31.6%→令和6年度後期 40.5%

授業評価アンケートにおいて、「この授業の中では、ICT 機器（パソコン・スマートフォン等）を有効に活用していたと思う」という独自の質問項目を設けた（4点満点）。これに対する回答の平均値（令和6年度後期）は、1年生 3.40、2年生 3.16、3年生 3.18 であった。1人1台端末の使用を開始した効果が出ているといえる。

この数値の教科間の差に注目すると、昨年度は最高の教科は3.7、最低の教科は2.7であった。今年度は、最低の教科が3.1、最高の教科が3.8となっている。ここから教科間の差が小さくなり、全体的に ICT 機器の活用が進んできたことが読み取れる。すべての教員が効果的に ICT を活用するようになったとはまだいえないが、少なくともすべての教科が、ICT を活用した授業を行うようになったということができる。毎学期実施の教科内で授業ネタを話す巡回研修をはじめ、『いくひの3研修』と銘打った各種研修の成果が出ていると考える。

・職員アンケートの分析

本校独自で作成した職員向けアンケート（1月実施）において、「生徒が自分で知りたいと思うことを、探究しようとする姿」（以下、「探究しようとする姿」）、「学びや探究を他の生徒と共有しながら行い、お互いに学びを深めていく姿」（以下、「協働しようとする姿」）、「学んだことや考えたことを自ら振り返るとともに教師と共有し、評価やアドバイスを受けて次の学びに活かそうとする姿」（以下、「学びを調整しようとする姿」）が見られることが期待される取り組みを授業で行ったかどうか回答してもらった。

以下は令和4年度～令和6年度のアンケート結果の比較である。

質問	ICT を活用して取り組んだ			ICT を活用していないが取り組んだ			取り組んでいない		
	R4	R5	R6	R4	R5	R6	R4	R5	R6
「探究しようとする姿」	68.6%	70.6%	80.5%	9.4%	12.6%	0%	22.0%	16.8%	19.5%
「協働しようとする姿」	67.6%	78.6%	79.4%	25.9%	17.9%	15.3%	6.5%	3.5%	5.3%
「学びを調整する姿」	57.1%	53.1%	66.7%	20.0%	18.1%	12.8%	22.9%	28.8%	19.5%

今年度のテーマであった「学びを調節する姿」については、過去2年間と比較し、取り組んでいる割合を増やすことに成功している。ICT 研修会で「学びを調整する姿」が見られるデモ授業を行った成果がでたと考えられる。一方で、「探究しようとする姿」に関しては、取り組んでいない割合が増加してしまっている。改めて、授業展開における3場面に着目した『問いのつくり方と回答の共有方法』をテーマに、改善を行っていきたいと考える。

(4) 取組指標の結果

授業評価アンケート（各年度後期）

単元（内容のまとめ）の学習の中で、他者の考えを知り、自らの考えを広げ深める機会がある			
回答	令和4年度	令和5年度	令和6年度
4. かなり当てはまる	37.08%	39.83%	40.40%
3. ほぼ当てはまる	51.36%	50.46%	49.30%
2. あまりあてはまらない	9.85%	8.41%	8.30%
1. ほとんどあてはまらない	1.71%	1.30%	2.00%

単元（内容のまとめ）の学習の中で、課題について自分の考えをまとめたり、解決方法について考える場面がある

回答	令和4年度	令和5年度	令和6年度
4. かなり当てはまる	38.38%	41.96%	44.10%
3. ほぼ当てはまる	51.11%	50.28%	48.00%
2. あまり当てはまらない	8.93%	6.88%	6.50%
1. ほとんど当てはまらない	1.58%	0.88%	1.40%

授業で得た知識をもとに、自分の考えをまとめたり、課題の解決方法を考えたりすることができた

回答	令和4年度	令和5年度	令和6年度
4. かなり当てはまる	37.58%	41.40%	43.30%
3. ほぼ当てはまる	51.96%	50.29%	48.30%
2. あまり当てはまらない	8.94%	7.36%	6.90%
1. ほとんど当てはまらない	1.52%	0.94%	1.50%

授業評価アンケート（独自質問）（令和4年度後期）

この授業の中では、ICT 機器（パソコン・スマートフォン等）を有効に活用していたと思う

回答	令和4年度	令和5年度	令和6年度
4. かなり当てはまる	41.40%	52.12%	44.30%
3. ほぼ当てはまる	40.55%	36.85%	47.90%
2. あまり当てはまらない	12.77%	7.61%	6.30%
1. ほとんど当てはまらない	5.28%	3.42%	1.50%

この授業の中では、自分の疑問や考えを記録したり、自分が知りたいと思ったことを探究したりする用途で、ICT 機器を有効活用していたと思う

回答	令和4年度	令和5年度	令和6年度
4. かなり当てはまる	39.53%	48.90%	58.40%
3. ほぼ当てはまる	42.00%	39.68%	34.30%
2. あまり当てはまらない	13.17%	8.12%	4.40%
1. ほとんど当てはまらない	5.31%	3.29%	2.90%

この授業の中では、クラスメートの考えに触れたり、協力して作業したりする場面で、ICT 機器を有効活用していたと思う

回答	令和4年度	令和5年度	令和6年度
4. かなり当てはまる	39.04%	46.35%	53.10%
3. ほぼ当てはまる	41.79%	40.80%	38.40%
2. あまり当てはまらない	13.50%	9.17%	5.60%
1. ほとんど当てはまらない	5.67%	3.68%	2.90%

この授業の中では、自分が学習したことをまとめたり、振り返ったりする場面で、ICT 機器を有効活用していたと思う

回答	令和4年度	令和5年度	令和6年度
4. かなり当てはまる	40.12%	48.41%	50.70%
3. ほぼ当てはまる	41.11%	40.16%	39.90%
2. あまり当てはまらない	13.36%	8.00%	6.60%
1. ほとんど当てはまらない	5.41%	3.43%	2.80%

	魅力と特色ある県立高校づくりについてのアンケート（卒業生対象）			
	質問項目 A-4：高校生活において、課題の発見と解決に向けて主体的に考えたり、発表しあうなどの協働的な学習活動を行うことによって、中学生の時よりも思考力・判断力・表現力を高めることができたと思いますか。			
	回答	令和4年度	令和5年度	令和6年度
	① そう思う	41.7%	31.6%	40.5%
	② どちらかといえばそう思う	45.5%	52.6%	43.9%
	③ どちらかといえば満足していない	8.1%	10.5%	8.5%
	④ ほとんどあてはまらない	4.7%	5.3%	7.1%
まとめ	(1) 成果 ・事業の方針にそった研修と、公開研究授業を実施することができた。結果として、「教科をチームに」を目標に、組織的な授業改善を行う文化を根付かせる、「全ての教科で ICT を活用する授業に取り組む」という目標は実現できたといえる。 ・目標とする3つの姿である「協働する姿」「探究する姿」「自ら学びを調整する姿」を、多くの教員が意識して授業の実践ができている。			
	(2) 課題（今後の方向性を含む） ・「全ての教員が ICT を活用した授業に取り組む」という段階は概ねクリアしたといえる。今後は、「より効果的に」生成 AI を含む ICT を授業内にどのように取り入れるか、アナログのものとどのように共存しながら3つの場面が見られる授業を実践していくかのフェーズに入った。教科をチームによりよい授業づくりを目指し続ける必要がある。 ・次年度以降は3つの場면을意識しながら、『問いのつくり方と答えの共有方法』をテーマに、授業づくりを意識して取り組んでいく。			
その他 特記事項				

6-3-1. 令和7年度 県立高校指定校事業（令和7年度指定）実施報告書

学 校 名	生田東高等学校（  ・定・通）	校 長 名	水上 吉央
指 定 名	I C T利活用授業研究推進校	年 度	令和7年度
研究主題	生成 AI や ICT 教材・機器を効果的に利活用して、深い学びを実現する。 深い学びが見られる授業とは『探究する姿』『協働する姿』『自ら学びを調整する姿』の3つの姿が見られ、『思考力・判断力・表現力』が育まれる授業と定義し、これを実現する。		
3年間の目標	○生成 AI や ICT 教材・機器を効果的に利活用して、深い学びを実現する。については、次の3つの姿（「探究する姿」「協働する姿」「自ら学びを調整する姿」）が見られる授業を実現することで、結果として「思考力・判断力・表現力」が育まれる授業を実現する ・『探究する姿』 自ら疑問や問いを生み出し続けるとともに、それを解決するためのプロセスを思考判断しながら、主体的に探究していく姿 ・『協働する姿』 問題の解決や目標の実現を協働しながら達成するために、必要な役割分担や協働方法を自ら見出し、自分の考えを適切に表現し合いながら、互いに学びを深めていく姿 ・『自ら学びを調整する姿』 学んだことや考えたことを自ら振り返るとともに、評価やアドバイスを基に自ら次の学びに活かそうとする姿（個別最適な学びの実現） 以上の3つの姿が、全ての教科で・いつでも、見られるようになることを目指す ○『教科をチームに』の合言葉のもと、『チームいくひ』で、組織的に授業改善を行う文化を定着させる。		
本年度の研究内容	(1) 本年度の目標 ・教師の提示した問いに加え、生徒自身が生み出した問いを推進力とする授業づくりを行う。 ・問いを解決するプロセスを、生徒自身が選択することができる授業づくりを行う。 ・他校訪問や公開研究授業の実施などで、県全体へ研究成果の情報提供につとめる。 (2) 実施内容 ・全学年の授業を中心に実践を行う ・研修の実施（集合研修、教科別研修、職員会議後などのミニ研修） 集合研修 4月（2回）・11月 教科別研修 6月・10月・1月 ミニ研修会 毎回の職員会議後 ・公開研究授業（11月）の実施 ・Teams を活用した、授業実践の蓄積と共有 ・持続的に授業研究を行うことができる組織づくりのためのフレームワークの定式化 集合研修は、「問いを推進力とする授業づくり」に注目して行った。4月は英語の授業をモデル授業とし、「生徒はなぜ学ぼうとするのか」「問いはどのように学びを動かすのか」を軸に研修を設計した。単なる ICT 活用事例の紹介ではなく、授業の冒頭で提示する問いや活動設計が、生徒の思考や対話をどのように引き出すのかを具体的に示した。 公開研究授業後の協議では、問いを設定することで授業の見通しが明確になり、生徒の主体的な参加が促されること、また ICT は問いを深めたり共有したりするための有効な手段として機能することが改めて確認された。 研修全体を通して、教員自身が「この問いは誰のためのものか」「この活動は生徒にどのような需要を生み出すのか」を振り返る時間を重視した。これにより、問いを起点とした授業づくりが、各教科に共通する実践の視点であることを共有することができた。また自らの学びを振り返る時間が設定されたことで、生徒の自己調整力の向上が見られた。		

(3) 検証方法と検証結果

検証方法

デバイスや生成 AI、学習用クラウドサービスを、授業の学習や自らの探究にどのように活用しているか、ICT を活用した教師からのフィードバックがどのように学びの調整に役立っているかを調査し、分析する。そのためにすべての教科において、「探究する力」「協働する力」「自ら学びを調整する力」を育もうとする授業の実践を計画し、それを実施できていたかを評価する。授業における様々な ICT や生成 AI の適切な活用法を考案し、その授業実践の過程で得られた成果や課題をとりまとめる。

・授業実践の分析（生徒アンケートの分析）

授業評価アンケートでは、「課題について自分の考えをまとめる」の項目において、数学科（94.2%）や理科（91.5%）、情報科（96.9%）など、極めて高い肯定回答が得られた。自ら問いを立て、ICT 機器を活用して探究するプロセスが機能しており、「問いの立て方」の研究が、未知の課題に対するアプローチを具体化させたものと評価できる。

また、全校生徒を対象に行った一人一台端末アンケートにおいては、『生成 AI を先生の指示によって効果的に使用する場面があったか？』という問いに対して、「日常的にあった」が 38.6%、「一日 1 回程度はあった」が 47.7%と、合わせて 86.3%が授業中に利活用しているとのポジティブな回答があった。これらの結果から、生成 AI の利活用についても、校内研修を中心とした取組みの効果が着実に表れてきていると評価できる。

・授業実践の分析（職員アンケートの分析）

本校独自で作成した職員向けアンケート（1 月実施）において、「生徒が自分で知りたいと思うことを、探究しようとする姿」（以下、「探究しようとする姿」）、「学びや探究を他の生徒と共有しながら行い、お互いに学びを深めていく姿」（以下、「協働しようとする姿」）、「学んだことや考えたことを自ら振り返るとともに教師と共有し、評価やアドバイスを受けて次の学びに活かそうとする姿」（以下、「自ら学びを調整しようとする姿」）が見られることが期待される取り組みを授業で行ったかどうかの回答を求めた。

以下は令和 4 年度（指定校事業初年度）と令和 7 年度のアンケート結果の比較である。

質問	探究しようとする姿			協働しようとする姿			自ら学びを調整する姿		
	R4	R7		R4	R7		R4	R7	
ICT を活用して取組んだ	68.6%	83.8%		67.6%	89.8%		57.1%	79.6%	
ICT を活用せず取組んだ	9.4%	8.1%		25.9%	8.1%		20.0%	14.3%	
取組んでない	22.0%	8.1%		6.5%	2.1%		22.9%	6.1%	

ICT 利活用授業研究推進校指定初年度（R4）と今年度を比較すると、3 つの姿全てにおいて ICT を活用して取り組んでいる割合を増やすことに成功している。授業内で ICT をどのように活用しているのかを教科の中で共有するための巡回研修の実施や、月に 1 度 ICT の活用法について紹介をする 5 分程度のミニ研修などの取り組みを行ったことによる成果と考えられる。また、今年度のテーマを『問いを推進力とする授業づくり』とし、問いの立て方に関する研修や、モデル授業の実施によっても、改善されたと考える。

	(4) 取組指標の結果 授業評価アンケート			
	単元（内容のまとまり）の学習の中で、課題について自分の考えをまとめたり、解決方法について考える場面がある。			
	回答	令和7年度	令和8年度	令和9年度
	4. かなり当てはまる	39.2%	%	%
	3. ほぼ当てはまる	50.9%	%	%
	2. あまりあてはまらない	8.1%	%	%
	1. ほとんどあてはまらない	1.7%	%	%
	授業で得た知識をもとに、自分の考えをまとめたり、課題の解決方法を考えたりすることができたか？			
	回答	令和7年度	令和8年度	令和9年度
	4. かなり当てはまる	40.6%	%	%
	3. ほぼ当てはまる	50.4%	%	%
	2. あまりあてはまらない	7.5%	%	%
	1. ほとんどあてはまらない	1.5%	%	%
	(学校設定) この授業の中では、ICT 機器や生成 AI を効果的に活用されていたか？			
	回答	令和7年度	令和8年度	令和9年度
	4. そう思う	56.4%	%	%
	3. どちらかといえばそう思う	36.9%	%	%
	2. どちらかといえば満足していない	5.4%	%	%
	1. ほとんどあてはまらない	1.2%	%	%
	魅力と特色ある県立高校づくりについてのアンケート（R7卒業生対象） 主体的な学習活動を通じて、思考力・判断力・表現力等を高めることができたと思う高校生の割合			
	回答	令和7年度	令和8年度	令和9年度
	4. そう思う	53.3%	%	%
	3. どちらかといえばそう思う	41.3%	%	%
	2. どちらかといえば満足していない	1.8%	%	%
	1. ほとんどあてはまらない	3.6%	%	%
まとめ	(1) 成果			
	- 全ての教科教員が ICT や生成 AI を利活用するという文化が根付いている本校において、事業の方針『問いを推進力とする授業づくり』に沿った研修と、公開研究授業を実施することができた。結果として、「教科をチームに」を目標に、組織的な授業づくりを行う文化をさらに根付かせることができた。 - 研究主題である3つの姿「協働する姿」「探究する姿」「自ら学びを調整する姿」がみられる授業を、多くの教員が意識して授業の実践ができている。 - 他校訪問や公開研究授業の実施にとどまらず、県内外の学校からの訪問を20校以上受け入れ、研究成果の情報提供を行い、積極的な意見交換も行った。			
	(2) 課題（今後の方向性を含む）			
	「全ての教員が生成 AI や ICT を利活用した授業に取り組む」ことや「教科をチームに、組織的に授業づくりを行う」という段階は概ねクリアしたといえる。しかし、少し気を緩めればこの素晴らしい雰囲気は壊れてしまう可能性も大いにあると考える。今後も、先に示した3つの姿を追求し続け、「より効果的に」生成 AI を含む ICT を授業内にどのように取り入れるか、どのように生徒に還元していくか、追い求め続ける必要がある。 - 次年度以降も3つの場面を意識しながら、『問いのつくり方と答えの共有方法』をテーマに、より「深い学び」に結びつく授業づくりを意識して取り組んでいく。			
特記事項				

付録

令和 6 年度実施

生成 AI を利活用した 授業実践シート

ICT 利活用授業推進事業

生成 AI を利活用した授業見学報告書

授業者	山岡 正和			教諭 / 総括教諭		
教科	国語	科目	文学国語			
単元名	山月記					
使用した ICT 教材	☒    ☒  ☐  ☐  ☐  ☐  ☐  ☐  ☐ 他 () ☐  ☐  ☐  ☐  ☐  ☐  ☐ 他 () ☐  ☒  ☐  ☐  ☐  ☐  ☐  ☐ 他 ()					
本時で見られた生徒の姿	☐ 探究する姿 ☒ 協働する姿 ☒ 自ら学びを調整する姿					
授業の流れ	① 漢字の学習【5 分】 ② 前時の復習【5 分】 ③ 本文音読【5 分】 ④ 語句調べ、本文内容の整理【15 分】 ⑤ ChatGPT を用いて本文中に登場する詩の解釈を整理する【10 分】 ⑥ ChatGPT から得た情報をもとに自分の考えをまとめる【10 分】					
授業内容について 授業のポイントや要点	・前時の復習を ChatGPT で行う →ChatGPT で本文についての問題を作成し、グループ内で出題と解答を繰り返すことで、既習内容を手軽にかつ効率的に振り返ることができる。また、4 択の問題を作るようにプロンプトを作成することで、クイズのような感覚で復習ができ、自発的に活動ができる。 →誤答に対してはそれがなぜ違うのか、出題者の生徒が開説したり教科書から根拠を探したりすることで積極的な学びにつながる。 ・ChatGPT が自分の考えを支えるツールとなる。 →本文中にある詩についての解釈について ChatGPT に問いかけ、提示された複数の解釈の中から自分の考えに近いものを選び、それに対する考えを 30 字程度でまとめるという活動を行っていた。この活動で ChatGPT を使う利点として、自分の考えを言語化することが困難な生徒も考えをまとめることができると、複数の解釈に触れることで自分では思いつかなかった視点から考えるきっかけになることが考えられる。					
生徒の反応	・生成 AI が言語化の補助となる →考えはあるが言語化できない、自分の思いを表現するための言葉がわからないという生徒が複数いたが、そういった生徒こそ生成 AI を活用することで、自分では表現できなかった部分を補うことができ、主体的に活動に取り組んでいた。 ・自ら学びを調整することにつながる →ChatGPT から得た情報が、自分の考えを形成するための糧になっている。問いに対する答えを導く過程で、自分の知識や得た情報を裏付けたり、まったく考えていなかったことに触れたりすることで、自分の考えを見直し、確固たるものになっていた。					

ICT 利活用授業推進事業

生成 AI を利活用した授業見学報告書

授業者	中島歩佳			教諭 / 総括教諭
教科	国語	科目	国語表現	
単元名	電話を使いこなす			
使用した ICT 教材	☒ ☒☐☐☐☐☐☐他（ ） ☐☐☐☐☐他（ ） ☐☒☐☐☒☐他（ ）			
本時で見られた 生徒の姿	☐ 探究する姿 ☒ 協働する姿 ☒ 自ら学びを調整する姿			
授業の流れ	①電話のマナーに関するクイズを実施【5分】 ②改まった場面での言葉遣い（主に敬語表現）についての確認【10分】 ③電話でのメモの取り方の練習【10分】 ④2人1組となり、ChatGPT が作成した例文を用いて電話メモを作成【20分】 ⑤受取人が理解できるようにメモを整理【5分】			
授業内容 について 授業の ポイントや要点	・マナーや常識をクイズを用いて確認 →社会人になったら常識とされるような基本的な事柄を、クイズ形式で答えることで学べるようになっていた ・言葉遣いについて知識の確認 →既習事項であるが、繰り返し行うことで定着を促していた ・電話で聞いた内容をメモする時のポイントを確認 →生田東高校の職員室にある電話連絡票を提示し、イメージをつかませていた →まずは全員で、教員が読み上げる例文を使って練習を行い、その後のペアでの活動の流れを理解させることをめざしていた ・生徒同士、電話の読み上げ役と聞き取る社員役に分かれてメモを作成 →ロイロノートに ChatGPT の指示文を投稿し、生徒はその指示文を ChatGPT に投げかけることでより具体的な例文を手に入れていた →聞き取ったことを自分がわかるようにメモしたうえで、受取人（同僚）が理解できるよう整理させた			
生徒の反応	・授業について →クイズやチャット GPT など、授業に組み込むことで生徒の取り組みに刺激を与えていた。 →電話の使い方を理解するだけでなく、生徒が自発的に身近な環境に置き換えて考えることで理解をより深めようとする姿が見られた。			

ICT 利活用授業推進事業

生成 AI を利活用した授業見学報告書

授業者	蓮見 和也			教諭 / 総括教諭
教科	地歴公民	科目	世界史探究	
単元名	第二次世界大戦			
使用した ICT 教材	☒  ☐  ☐  ☐  ☒  ☐  ☐ 他 () ☐  ☐  ☐  ☐  ☐  ☐ 他 () ☒  ☐  ☐  ☐  ☐  ☐ 他 ()			
本時で見られた生徒の姿	☐ 探究する姿 ☒ 協働する姿 ☒ 自ら学びを調整する姿			
授業の流れ	①本時の活動の説明をし、班に分かれテーマ決定（10 分） ②代表者が ChatGPT にプロンプトを貼り付け、班のメンバーに共有（5 分） ③班のメンバーと分担し、スライドを作成する（35 分）			
授業内容について	・ChatGPT を使用した単元の確認 プロンプトにテーマ（例：スペイン内戦、満州事変 など）を入れ込むと「旅人」と「少年」が会話形式で選択したテーマについての情報が表示される。「旅人」のセリフが授業内容になっているので、生徒は「旅人」のセリフを確認すれば良いと指示されていた。			
授業のポイントや要点	・既習内容のアウトプット 本時の活動は、上記で確認した「旅人」のセリフを確認し授業スライドを作成する、というものである。「旅人」のセリフを見ると単元で学習した内容を確認することができ、学習内容がしっかり身についているか生徒自身が自然と振り返ることができる場になっていた。またスライドにまとめる際に不明な点があるままでは進められず、生徒自ら教科書や資料集を開き内容を確認するといった場面も見られた。 既習内容を確認する→足りない部分があれば補う（他生徒と補い合う）→スライドにまとめアウトプットするといった活動を通し、既習内容を定着させることに繋がっていた。			
生徒の反応	生徒は終始、教員の指示に従い主体的に活動していたのが印象的だった。「授業で使えるスライドを作成する」という一見難しい内容でありながらも、ChatGPT が「旅人」と「少年」二人の砕けた会話で語られるので、生徒は作業に取り掛かりやすく楽しく取り組んでいる様子が見られた。 また、教員が生徒の取り組みの様子（共有ノートを開いて作業進捗の確認、机間巡視）を細かく確認することも生徒の取り組みやすさに繋がっていた。教員が指示をせずともマーカーを引いて班のメンバーと作業していたり、教科書を開いて授業内容を復習したりする姿が見えた時にはすぐに他の生徒にも共有していた。どう進めていけばいいのかヒントが随所にあるので、生徒は迷うことなく 35 分と決して多くはない時間で作業を進めることができていた。			

ICT 利活用授業推進事業

生成 AI を利活用した授業見学報告書

授業者	米村 浩			教諭	総括教諭
教科	地歴公民	科目	日本史探究		
単元名	金融恐慌				
使用した ICT 教材	☒ ☒☐☐☐☐☐他 () ☐☐☐☐☐他 () ☒☐☐☐☐他 ()				
本時で見られた生徒の姿	☐ 探究する姿 ☒ 協働する姿 ☒ 自ら学びを調整する姿				
授業の流れ	①前時間の復習と本時の導入 問① ロイロのカード機能を用いて写真を掲示した状態で、『この場所はどこか？』 →個人で提出させ、全体で共有。 問② (グループ活動) 問①の解答を受けて、『なぜ人々は銀行に殺到したのか？』 →銀行は何する場所なのか？これを机間巡視の中で確認させ、グループで考察 →金融恐慌が起こった日本の当時の状況を想像させた ②本時のテーマの確認『金融恐慌はどのように起こったか？』 (大きな問) →金融恐慌について始まりから収束までスライドと説明で、確認。 ③ChatGPT を用いて、『もし、日本で金融恐慌が起きなければどうなっていたか？』を尋ねさせ、返ってきた意見について自分の考えを考察させた。				
授業内容について	・ 小さな問の設定、解答を引き出す巧さ →復習と導入に時間を 2 5 分ほどかけていたが、小さな問 (上記①②) の巧さで生徒を惹きつけるだけでなく、アウトプットもさせ、政治的にも経済的にも下向きになっていく当時の日本の状況を想像させた。この作業が本時の大きな問である『金融恐慌はどのように起こったか？』に向け、生徒自身の強い関心意欲を引き出させた。その後の知識の享受の場面でも、導入で用いた写真を用いたことや以前登場した人物を登場させるなどして、知識のスパイラルを発生させ、知識の深化に繋げていた。				
授業のポイントや要点	・ ChatGPT を用いて、『自ら学びを調整する姿』の場面を創造する面白さ →本時のまとめとして、歴史の授業においてある意味タブーである上記の『もし～』を敢えて ChatGPT に投げかけ、その ChatGPT の返答について自分の意見を述べさせた。この作業で、金融恐慌が日本全体においてどのような影響を与えたのかを改めて復習させるだけでなく、この後の歴史的な展開など、新たな知識を自ら取りに行く姿が容易に想像できる。非常に効果的な自己調整の場面をつくっていた。				
生徒の反応	・ ワクワクする授業の非常に良い例 講義だけにならない授業展開や生徒とのやり取りなど教師が作る雰囲気づくりが、生徒と非常にマッチしており、教室全体が学びの場となり良い相乗効果を生んでいた。さらに、生成 AI を効果的に振り返りに使っており、本授業は見学した私までもがワクワクする理想の授業である。				

ICT 利活用授業推進事業

生成 AI を利活用した授業見学報告書

授業者	秋山紀将（宮城県仙台第三高等学校で実施）			教諭／総括教諭
教科	数学	科目	SS 理数データサイエンス(学校設定科目)	
単元名	確率			
使用した ICT 教材	☐   ☐  ☐  ☒  ☒  ☒ 他（ Google Colab ）  ☐  ☐  ☐ 他（ ）  ☒  ☐  ☐  ☐ 他（ ）			
本時で見られた生徒の姿	☐ 探究する姿 ☒ 協働する姿 ☒ 自ら学びを調整する姿			
授業の流れ	①パスカルとフェルマーの紹介をし、本時の問いを説明【10 分】 ②2 人 1 組になり、問いの答えを考えさせて共有【15 分】 ③パスカルとフェルマーそれぞれの考えを比較し、コンピュータシミュレーションを用いてフェルマーの考えが正しいことを確認【5 分】 ④生徒はフェルマー役となり、パスカル役を担わせた ChatGPT(AI パスカル)を説得【15 分】 ⑤AI パスカルの説得することができた班の内容についての共有と解説【5 分】			
授業内容について 授業のポイントや要点	・パスカルとフェルマーの問いの内容について考える →わかりやすいように問いの内容を変更していた →問いに対する答えを 2 つ以上出させ、多様な角度から確率について考えられるようになっていた ・生徒が考えた答えと、パスカルとフェルマーのそれぞれの考えについて共有 →2 名の生徒に考えを発表させ、その際にパスカルまたはフェルマーと同じ考えであることを共有していた →全生徒が考えた答えも、Google スライドを用いて全体に共有していた ・コンピュータシミュレーションによるフェルマーの正当性 →問いの内容について Google Colab を使用してシミュレーションを行い、結果からフェルマーの考えが正しいことを確認させた ・AI パスカルの説得 →Google Classroom に ChatGPT への指示文を投稿し、生徒はその指示文を ChatGPT に投げかけることで AI パスカルの生み出していた →生徒がフェルマー役となり、AI パスカルが自身の考えの誤りを認めるよう論理的な説明を考えさせた ・説得内容の共有と解説 →AI パスカルの説得することができた班のやり取りを要約して発表してもらい、全体共有を図ったのち、その内容についての解説を行った			
生徒の反応	・研究授業について →宮城県仙台第三高等学校の研究授業における講師として本時のみの授業であったが、普段と異なる環境でも臆することなく授業に参加し、講義内容対して積極的に耳を傾けていた →確率の答えがわかるだけでなく、きちんと論理的に相手に伝えられるかという活動を通して、より深い理解や学びの自己調整を行う姿が見られた ・生成 AI について →まだ利活用の少ない生成 AI を用いることで、本時への期待感や多方面への利活用意欲が見られた			

ICT 利活用授業推進事業

生成 AI を利活用した授業見学報告書

授業者	泉頭 俊郎			教諭 / 総括教諭
教科	数学	科目	数学Ⅲ	
単元名	微分法の応用			
使用した ICT 教材	☒  ☒  ☒  ☐  ☐  ☐  ☒  ☐ 他 () ☐  ☐  ☐  ☐  ☐ 他 () ☐  ☐  ☒  ☐  ☐ 他 ()			
本時で見られた生徒の姿	☒ 探究する姿 ☒ 協働する姿 ☒ 自ら学びを調整する姿			
授業の流れ	①導入と問題の配付 ②問題演習 ③解説 ④公式の復習と次回の説明			
授業内容について 授業のポイントや要点	○微分法の応用 ・入試問題を取り上げ、授業で習った内容を紹介しながら解説を行っていた。 ・問題をロイロノートで配付したり、紙で配ったりとすることで、ICT と紙を上手く融合させながら個々の生徒に合わせた環境を作っていた。 ・数学Ⅱで扱った内容の復習をしていた。 ・問題文を丁寧に読み、「なぜこの式を立式するのか」を強調して説明していた。 ・公式を黒板の端に記し、生徒が復習しやすい環境を作っていた。 ・計算を丁寧に見せることで、数学が苦手な生徒への支援も行っていた。 ・具体的な数字から定理の確認をしていた。 ・「なぜ」を大事にした発問を重視した授業だった。 ・ChatGPT を用いて、定理の証明を紹介していた。			
生徒の反応	・集中して問題を解いていた。 ・友人と協力しながら取り組んでいた。 ・インターネットを使い、定理の確認をしている生徒もいた。 ・多くの生徒が頭泉教諭の発問に積極的に答えていた。 ・ChatGPT を用いて、定理の証明を検索している生徒もいた。 ・自分の理解度を把握し、復習をしながら授業を聞くなど、自らの学びを調整しながら問題に取り組んでいる生徒もいた。			

ICT 利活用授業推進事業

生成 AI を利活用した授業見学報告書

授業者	打田 大輔			教諭 / 総括教諭
教科	保健体育	科目	保健	
単元名	09 医薬品の制度とその活用			
使用した ICT 教材	☒ ☒☐☐☐☐☐他（ ） ☐☐☒他（ ） ☒☐☐☐他（ ）			
本時で見られた生徒の姿	☒ 探究する姿 ☒ 協働する姿 ☒ 自ら学びを調整する姿			
授業の流れ	①副教材ノートの記入【5分】②医薬品の制度と医薬品の活用方法について内容解説【5分】 ③地上波で放映された未成年者の処方薬のオーバードーズのニュースの視聴【5分】 ④チャット GPT を用いたロイロノート課題の取り組み【20分】 ⑤オーバードーズについての内容解説【8分】⑥リフレクションシートの記入【7分】			
授業内容について 授業のポイントや要点	・副教材ノートの記入【協働する姿】 →ペアワークで協働して記入をしていた。 →ノートは単純な穴埋めと考えて長文を記入する部分が分かれておりペアでサポートしながらしっかりした文章を記入していた。 ・教科書の内容の解説 →医薬品の使用や受け渡しには法律があること、使用に際しては決まりがあること、個人に活用の仕方や責任がゆだねられている部分があることを説明していた。 →処方薬は、活用方法を間違えると人体に多大な被害があること。周囲の人や家族、友人にも影響がでることを説明していた。 ・動画の視聴 →実際に未成年者が処方薬をオーバードーズしている状態を視聴することにより、生徒が自分のこととしてとらえていた。 →オーバードーズの具体性や内容をしっかり理解していた。 ・ロイロノート課題の取り組み【探究する姿、自ら学びを調整する姿】 →ロイロノート課題ではチャット GPT を使い、オーバードーズの説明を自分なりに作成する内容であった。 →プロンプト（指示文）を作成しており、ある程度内容を絞って使用させていた。 →コピペさせるのではなく、GPT から検出される文章を自分なりの意見と交えて記入提出させていた。 →プロンプトは、完全な答え（課題の提出内容となるもの）がうまく検出されないよう作りこまれており、生徒が探究したり、学びの調整につながりやすいように工夫されていた。 ・オーバードーズの解説 →昨今若者のあいだで多くあること、その影響等について解説していた。 ・リフレクションシートの記入【探究する姿】 →ロイロノート課題でリフレクションシート（まとめ）を自分なりに書いて提出させていた。 →文字数制限や文章の構成方法を指示しており、単純な感想で終わらないように工夫されていた。			
生徒の反応	・授業について →生徒は医薬品の制度やその活用について具体例をあげて説明できるほど内容を理解していた。制度や活用について身近なこととしてとらえており、実生活と結び付けて考えられていることが課題の提出から見てとれた。 ・生成 AI について →チャット GPT を活用させての課題の取り組みは、生徒がより深く考えられるようなプロンプトとなっていた。また、知識の定着がなされていない生徒やうまく言語化できない生徒、習熟度が高い生徒など、生徒の段階に応じて課題に取り組むことができるプロンプトになっており、より全員が意欲をもって探究できたと感じた。 ・ロイロノート課題について →課題が生徒自身の言葉で記入をさせる内容となっており、生徒がどの程度理解できているかが可視化されていた。身近な具体例を挙げている生徒がたくさんいて、指導と評価の一体化がしやすいと感じた。			

ICT 利活用授業推進事業

生成 AI を利活用した授業見学報告書

授業者	堀 航大			教諭 / 総括教諭
教科	外国語（英語）	科目	英語コミュニケーションⅡ	
単元名	Lesson 8 “Powdered Natto Solves a Global Water Problem”			
使用した ICT 教材	☒ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ 他（ ） ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ 他（ ） ☒ ☐ ☐ ☒ ☐ 他（ ）			
本時で見られた生徒の姿	☒ 探究する姿 ☒ 協働する姿 ☒ 自ら学びを調整する姿			
授業の流れ	①スモールトーク（生徒によるペアワーク） “What are your magic words?”[5 分] ②新出単語と表現の確認[3 分] ③自習課題の答え合わせ[4 分] ④強調構文の説明・演習[15 分] ⑤強調構文を使ったアクティビティ[10 分] ⑥次回の授業の予告[3 分]			
授業内容について 授業のポイントや要点	・Small talk “What are your magic words?” ★最初は堀先生が例を示した後で、生徒が考える時間を設けていたことで、生徒が考える内容が明確だった。また、ペアでお互いの言葉をシェアすることで、生徒間でやりとりができていた。 ・前時の復習について ★生徒全員が答えられるように一人ひとりに質問をして、前時の復習も行っていた。 ★答え合わせや単語の意味と発音の確認の時間を素早く丁寧に行うことで、そこまで時間をかけることなく、復習を行うことができていた。 ・強調構文について ★説明の部分では、強調構文がどのように使われるのか、例文を使用しながら、生徒に分かりやすく説明し、生徒に発問しながら進んでいた。 ★冬休みに何をしたかというテーマで活動を行っていて、取り組みやすい内容だと感じた。 ★Chat GPT を使用したピンポンゲーム（会話のやりとり）の紹介をして、堀先生自身がどのように会話していたかを示すことで、生徒もイメージしやすかった。			
生徒の反応	・生徒の取り組みについて ★生徒が活動するごとに、最初は堀先生から例を示し、その後に生徒が活動に移るため、生徒が特に困ることなく活動できていた。 ・ICT について ★Chat GPT を使ったピンポンゲーム（会話のやりとり）の紹介にとどまったが、ペアワークが苦手な生徒にとっても強調構文を会話形式で学ぶことができると思った。 ★ロイロノートを使用して、レッスンのワークに取り組んでいた。昨年度から同じように取り組んでいるため、生徒は、問題なく取り組んでいる様子だった。			

ICT 利活用授業推進事業

生成 AI を利活用した授業見学報告書

授業者	鈴木 拓郎			教諭 / 総括教諭		
教科	外国語	科目	英語			
単元名	Lesson 7 Sports					
使用した ICT 教材	☒    ☒  ☐  ☒  ☐  ☐  ☐  ☒ 他 () ☐  ☐  ☐  ☐  ☐  ☐ 他 () ☒  ☐  ☐  ☐  ☐  ☐  ☐ 他 ()					
本時で見られた生徒の姿	☐ 探究する姿 ☒ 協働する姿 ☒ 自ら学びを調整する姿					
授業の流れ	①Today's Goal の確認 ②新出単語・新出表現の確認(ペアでクイズ形式) ③ディクテーション ④ライティング→シェア ⑤チャット GPT での self-editing ⑥振り返り					
授業内容について 授業のポイントや要点	・ディクテーション ALT との会話を聞き取り、穴埋め形式でディクテーションを行った。穴埋め箇所を埋める単語が本単元のターゲット文法である動名詞の形となっていて、生徒は会話の中で自然に V-ing の形を繰り返し聞き、繰り返し書く、という作業を行っていた。生徒にとっては、無意識に行われる、コミュニケーションをベースとしたパタンブラクティスとなっているように感じた。 ・ライティング・内容のシェア 「冬休みに何をしていたか」「新年の目標は何か」の二つのトピックについて、ターゲット文法を使いながらライティング活動をした。その後書いた内容を会話のスクリプトに当てはめる形式でペアでシェアした。聞く→書く→話す、のタスクがそれぞれ生徒に合った難易度で行われていて、生徒は大きくつまずことなくシェアまで行っていた。 ・チャット GPT での self-editing 生徒が一度書いたライティングをチャット GPT に添削を掛けさせ self-editing を行わせていた。あらかじめ統一のプロンプトを配布することで、スムーズかつ適切な添削や情報を得られていた。生徒は自分の間違い、気持ちを表すためのより良い表現を確認したり、添削されたことで自信を持った内容でライティングを提出したりすることが出来ていた。					
生徒の反応	的確な指示と生徒に合わせた難易度のタスクによって、生徒は最後まで集中力を切らさず授業を受けていた。テンポよく活動が多く盛り込まれた授業だったため、様々な形で生徒は英語に触れたり使ったりすることが出来ていた。またインプットした知識を即座にアウトプットする機会が設けられていたため、生徒が生き生きと英語を使う場面が多く見られた。ICT の活用も慣れており、チャット GPT からもらったライティングへのコメントをお互いに見せ合うような場面が見られた。授業内で生徒が「ターゲット文法を使えるようになった」と手ごたえを感じているような様子であった。					

令和 7 年度実施

授業実践シート

令和 7 年度後期 授業実践シート

本年度のテーマ	問いと回答を推進力とした授業実践（探究・協働・自己調整を 3 本柱とした深い学びの実践） 生成 AI や ICT ソフト機器を利活用した授業実践
---------	---

授業者		日時	令和 7 年 11 月 13 日(木) 2 校時	場所	2 - 7
教科	国語	科目	国語表現	単位数	2
単元名	データを読み取り、小論文を書く			対象クラス	
本時のねらい	与えられたデータから情報を得て、問題点と解決案を考え、文章で表現できるようにする。				
本時の大きな問	データから読み取れる防災教育の問題点とは？				
使用する ICT 教材	ロイロノート ☒ Google ☐ 生成 AI ☒ 他 () ☐ 利用される ICT ソフトに☑を（クリックで変わります！）				
本時で見られる生徒の姿	☒ 探究する姿 ☐ 協働する姿 ☒ 自ら学びを調整する姿				
本時の授業の工夫	自分の考えた問題点と解決策をブラッシュアップするために ChatGPT を用いる。まずは自分でデータを読み取り、考察することで AI の思考のみに頼ることのないようにしている。 小論文は読み手が納得する文章であることが大事で、そのためには明確な根拠が必要となる。そこで一辺倒な考えや視野の狭い意見が論（主張）の中心となることを避けるために AI を活用し、思考を発展させる。				
本時の内容 授業の ポイントや要点 小さな問	序 10:00～ 『データを読み取り、防災教育の問題点と解決策を考える』 ・前時の振り返り（データの読み取り方の確認）をする。 ・図 1 ～ 図 3 について読み取れることと考察できることを記述する。 ・3 つの図から考えられる問題点と解決策を記述する。				
	破 10:25～ 『自分の考えた問題点と解決策を ChatGPT でブラッシュアップする』 ・与えられたプロンプトに自分の考えを加えて ChatGPT に聞く。 ・必ず問題点と問題だと考えた理由、解決するための方法を自分で考えたうえで ChatGPT を使用する。				
	急 10:35～ 『ChatGPT の回答をもとに自分の考えをまとめる』 ・自分に必要な回答をまとめる。 ・自分の考えで改善すべき点を考える。 ・回答をもとに、小論文で記述する問題点と解決策をまとめる。				

令和7年度後期 授業実践シート

本年度のテーマ	問いと回答を推進力とした授業実践（探究・協働・自己調整を3本柱とした深い学びの実践） 生成 AI や ICT ソフト機器を活用した授業実践
---------	--

授業者		日時	令和7年10月15日(水) 3校時	場所	1 - 4
教科	国語	科目	言語文化	単位数	2
单元名	芥川龍之介「羅生門」			対象クラス	1 - 4
本時のねらい	老婆の論理と下人の決意を読み取る				
本時の大きな問	なぜ盗人になろうと思ったのか？				
使用する ICT 教材	☒ ロイロノート Google 生成 A I ☐ その他（ ） ☒ ☐ Gemini ☐ その他（ ） 利用される ICT ソフトに☑を（クリックで変わります！）				
本時で見られる生徒の姿	☒ 探究する姿 ☒ 協働する姿 ☒ 自ら学びを調整する姿				
本時の授業の工夫	生成 AI を利用して、「下人」と討論を行いながら、下人の心境の変化や決意について考えをさせる。説得を行うことによって、下人の心理や行動原理について考えるようになる。				
本時の内容 授業のポイントや要点 小さな問	序 11:00～11:20 『音読』 - 本文の音読を通して、難解な漢字や言葉の意味について理解を深めさせる。 …クイズ形式にするなどして、テンポよく行う				
	破 11:20～11:30 『老婆の論理と下人の決意について理解する』 - ワークシートを用いて、上記事項について理解させる。 …本文を読み取りながら、行為を正当化する老婆の論理について整理する - 老婆の言葉を受け止め、盗人になる決意をした下人の心理について整理する				
	急 11:30～11:50 『下人と討論する』 - 論破することが目的ではない。下人がどのような論理によって盗人になろうと思ったのか、理解するためにある。 …単純な善悪二元論に陥らないようにし、「羅生門」というテキストが読者に提示する問いについて、考えを深める。				

令和7年度後期 授業実践シート

本年度のテーマ	問いと回答を推進力とした授業実践（探究・協働・自己調整を3本柱とした深い学びの実践） 生成 AI や ICT ソフト機器を活用した授業実践
---------	--

授業者		日時	令和 7 年 11 月 17 日(月) 4 校時	場所	2 年 3 組
教科	国語	科目	国語表現	単位数	2
単元名	データ分析型小論文を書く			対象クラス	2 年 3 組
本時のねらい	防災教育に関して、根拠を明確に自分の考えをまとめられるようにする。				
本時の大きな問	防災教育についての問題点と解決策				
使用する ICT 教材	ロイロノート ☒   Google ☐  ☐  ☐  ☐  ☐ 他 () 生成 A I ☒  ☐  ☐  ☒  ☐ 他 () ☐ 他 () 利用される ICT ソフトに☑を（クリックで変わります！）				
本時で見られる生徒の姿	☒ 探究する姿 ☐ 協働する姿 ☒ 自ら学びを調整する姿				
本時の授業の工夫	- 自分の考えに整合性があるかを早期段階で ChatGPT を用い確認する時間を取り、文章をまとめる際に支離滅裂な文章にならないためのきっかけづくりをする。 - ChatGPT を用いるのは確認作業のみに徹底し、自分の考えに基づいた文章を書くように指導する。				
本時の内容 授業のポイントや要点 小さな問	序 12:00～ 『前時の確認、作業内容の確認』 - 前時の確認 本時の取り組みにつながる部分を改めて確認する。 - 本時の作業内容について、ワークシートを見て確認する。				
	破 12:05～ 『自分が考えた問題点と解決策の整合性を確認する』 - 前時でまとめた問題点と解決策について、教員が指示した文章を ChatGPT にコピーペーストし確認させる。 - ChatGPT から得た回答のコピーペーストを防ぐため、全て紙にメモを取るよう指導する。				
	急 12:25～ 『説得力のある文章を書くための準備をする』 - インターネットなどを用いて、本論部分にあたる内容を考える。その際、データや根拠、具体例を挙げると説得力のある文章になることを意識させ、その点について調べていくように指導する。 - より説得力ある文章になるよう他の具体例を出してもらうなど、ChatGPT と対話を進めさせる。				

令和7年度前期 授業実践シート

本年度のテーマ	問いと回答を推進力とした授業実践（探究・協働・自己調整を3本柱とした深い学びの実践） 生成 AI や ICT ソフト機器を活用した授業実践
---------	--

授業者		日時	令和7年 6月4日(水)4校時	場所	3-5
教科	地歴公民科	科目	政治経済	単位数	3
単元名	政治機構と国会			対象クラス	3-5
本時のねらい	民主主義を実現する仕組みとして議会があるというこれまでの学習を活かし、日本国憲法に基づいて国会の地位・役割・権限があることとその仕組みについて理解する。				
本時の大きな問	国会の地位・役割・権限はどのようなものか				
使用する ICT 教材	☒  ☒  利用される ICT ソフトに☑を（クリックで変わります！） ☐  ☐  ☐  ☐  ☐  ☐  ☐  ☐ 他（ ） ☒  ☐  ☐  ☐  ☐ 他（ ） ☐ 他（ ）				
本時で見られる生徒の姿	☐ 探究する姿 ☒ 協働する姿 ☒ 自ら学びを調整する姿				
本時の授業の工夫	・自身が調べた内容や仲間の報告から、関心を高め学習内容を理解する。 ・生成 A I の特性を知り、学びの場での有効な活用方法を考える。				
本時の内容	序 10:00～ 『 今日の流れの確認 』 ・調べ学習の報告手順を理解する。 ・仲間の報告内容のメモを取り、自身の知識を広げる学びにつなげることを理解する。 破 10:10～ 『 自身が報告する 』 ・自分が担当した日本国憲法の条文の内容を理解する。 ・クラスの仲間が理解するために必要な表現方法を考えながら、話す。 『 仲間の報告を聞き「国会」の仕組みを理解する 』 ・「国会」の仕組みを理解するために必要な情報を自身で判断し、メモを取る。 ・クラスの仲間の報告から、相手に伝わる表現方法を考える。 急 10:40～ 『 まとめ 』 ・メモ欄への記入を完成させる。 ・「国会」の授業についての授業の感想を記入し、ロイロ提出箱に出す。				

令和 7 年度前期 授業実践シート

本年度のテーマ	問いと回答を推進力とした授業実践（探究・協働・自己調整を 3 本柱とした深い学びの実践） 生成 AI や ICT ソフト機器を活用した授業実践
---------	--

授業者		日時	令和 7 年 6 月 11 日(水) 1 校時	場所	2-2 教室
教科	公民	科目	公共	単位数	2
単元名	社会の基本原理と憲法の考え方			対象クラス	2-2
本時のねらい	SNS の課題を通じて、表現の自由が人々の快適な生活のためにあることを理解し、よりよい社会の実現を多面的に思考する。				
本時の大きな問	表現の自由は、誰のためにあるのか。				
使用する ICT 教材	☒ ☐ ☐ ☒ 他 (Power Point) ☐ ☐ ☒ 他 (Power Point)				
本時で見られる生徒の姿	☒ 探究する姿 ☒ 協働する姿 ☐ 自ら学びを調整する姿				
本時の授業の工夫	・高校生に身近なテーマを取り扱うことで、生徒が主体的に課題について思考することができる。 ・既存知識での自分の考えと、新たな知識を得た後での自分の考えの違いを実感することができる。				
本時の内容 授業の ポイントや要点 小さな問	序 9:00～ 『表現の自由を思い出して、どうやって情報を収集できるかみてみよう！』 ・前時の内容（自由権・精神的自由・表現の自由）を確認させる。 ・「思想・良心の自由」「表現の自由」は民主主義を行う上で、大切な権利であることを再認識させる。 ・社会のさまざまな情報を「知る権利」があることはもちろん、最近は便利な情報収集サービスとして、SNS が普及していることを実感し、具体例をあげさせる。				
	破 9:10～ 『便利な SNS も使用方法には注意が必要』 ・SNS を使う上で気を付けなければならない事を、例を挙げながら説明し、SNS による被害を考えさせる。 ・他人を傷つけないために配慮すべき観点をまとめながら、適切な情報収集ができる技術につなげる。				
	急 9:20～ 『SNS に規制は必要か？』 ・昨年度 11 月にオーストラリア議会で可決された、「16 歳未満の子どもによる S N S 利用禁止とする法律」について、世界の反応も含め理解させる。 ・日本で、「16 歳未満の子どもによる S N S 利用禁止とする法律」を実施すべきか、これまでの経験などを踏まえて、自身の意見を決め、理由を考えさせる。 ・「S N S 利用禁止とする法律」を実施する場合の年齢について、理由も含め自分なりに考察する。 ・日本や世界の様々な年齢制限の事例を理解し、さらに日本における S N S による事件の年齢別データを分析させる。 ・新たな知識を踏まえて、改めて「S N S 利用禁止とする法律」を実施する場合の年齢について、理由も含め自分なりに考察する。				

令和7年度後期 授業実践シート

本年度のテーマ	問いと回答を推進力とした授業実践（探究・協働・自己調整を3本柱とした深い学びの実践） 生成 AI や ICT ソフト機器を活用した授業実践
---------	--

授業者	神田 聡美	日時	令和7年 11月 20日(木) 3校時	場所	2-2 教室
教科	公民	科目	公共	単位数	2
単元名	豊かな社会の実現			対象クラス	2-2
本時のねらい	現代の労働に関わる諸課題を知り、豊かな労働環境について労働者の視点から思考する。				
本時の大きな問	労働者にとって“良い”労働環境とは、なにか。				
使用する ICT 教材	☒ ロイロノート  ☒ 生成 AI 				
本時で見られる生徒の姿	☒ 探究する姿 ☒ 協働する姿 ☒ 自ら学びを調整する姿				
本時の授業の工夫	労働に関わる現状を、資料などを通じて分かりやすく理解させる。 自分の意見とは違う立場の意見を生成 AI に出させ、自らの考えを深めさせる。				
本時の内容 授業のポイントや要点 小さな問	序 11:00～ 『ワーク・ライフ・バランス』 ・仕事と両立したい「ライフ」とは、具体的に何か。				
	破 11:10～ 『労働者に関わる諸課題』 ・女性が社会において労働する際の働きづらさとは、なにか。 →その課題を解決するための取り組みを知る。 ・健康的に働くために、どのような働き方が考えられるか。 →昨今の働き方の変化を知る。				
	11:40～ 急 『労働者にとって、「フル入社」か「フルリモート」か、どちらが“良い”労働環境か』 ・自分が労働者だった場合、「フル入社」と「フルリモート」のどちらが“良い”労働環境か考える。 →メリットと言える点を2つ出す。 ・ChatGPT に「あなたは労働者です。「フル入社」・「フルリモート」であるメリットを2つ考えて。」と指示する。 ・ChatGPT の解答を踏まえ、最終的に自分の意見を理由とともに考える。				

令和7年度前期 授業実践シート

本年度のテーマ	問いと回答を推進力とした授業実践（探究・協働・自己調整を3本柱とした深い学びの実践） 生成 AI や ICT ソフト機器を利活用した授業実践
---------	---

授業者		日時	令和7年5月16日(金)5校時		場所	2－3
教科	数学	科目	数学B		単位数	2
単元名	等比数列の和				対象クラス	2－3
本時のねらい	等比数列の和の公式を理解し、使うことができる。					
本時の大きな問	公式を導く際にどうして r をかけるのか。 公式が2つあるのはどうしてか。					
使用する ICT 教材	ロイロノート☒ 利用される ICT ソフトに☑を（クリックで変わります！） Google☐☐☐☐☐☐他（☐） 生成 AI☒☐☐☐☐他（☐） ☐他（☐）					
本時で見られる生徒の姿	☒ 探究する姿 ☐ 協働する姿 ☐ 自ら学びを調整する姿					
本時の授業の工夫	等比数列の和の公式を導く際に ChatGPT を用いる。 課題をロイロノートで提出させ、赤を入れて返却する。					
本時の内容 授業の ポイントや要点 小さな問	序 10:00～ 『本時の目標を伝える』 ・本時の目標は、等比数列の和を公式を用いて求めることができるようになることを伝える。 ・公式を導く際には ChatGPT を利用することを伝える。					
	破 10:10～ 『等比数列の和の公式を導き、実際に使う』 ・例12の解説を行う ・等比数列の和の公式を導く。その際、ChatGPTを用いて、なぜ $S-rS$ とするのかを考えさせるようにする。 ・$r \neq 1$ と $r = 1$ の2つの公式が必要なことの理由を考えさせる。 ・例13の解説を行う ・問20を解かせ、解答をロイロノートに提出させる。また、赤を入れて返却する。					
	急 10:40～ 『本時のまとめと次回の授業の概要を伝える』 ・等比数列の和の公式を確認する ・$S-rS$ とする理由を理解すれば、応用問題（等差数列）×（等比数列）で必要となることを伝える。 ・次回は確認テストがあること、問題演習が中心の授業になることを伝える。					

利用される ICT ソフトに☑を（クリックで変わります！）

令和7年度前期 授業実践シート

本年度のテーマ	問いと回答を推進力とした授業実践（探究・協働・自己調整を3本柱とした深い学びの実践） 生成 AI や ICT ソフト機器を活用した授業実践
---------	--

授業者		日時	令和7年6月13日(金) 4校時	場所	1 - 6
教科	数学	科目	数学 A	単位数	2
単元名	順列			対象クラス	1 - 6
本時のねらい	円順列の総数が $(n-1)!$ となる理由を考察させることで、順列の構造理解と論理的思考力を養う。				
本時の大きな問	円順列の総数は $(n-1)!$ で求めることができるのはなぜか。				
使用する ICT 教材	☒ ロイロノート ☒ Google ☐ 生成 AI ☐ その他 () ☐ Google ☐ ChatGPT ☐ Gemini ☐ その他 () ☐ Google ☐ ChatGPT ☐ Gemini ☐ その他 ()				
本時で見られる生徒の姿	☒ 探究する姿 ☒ 協働する姿 ☐ 自ら学びを調整する姿				
本時の授業の工夫	・生徒が公式を受け身で覚えるのではなく、なぜそうなるのかを自らの言葉で説明できるようにするために、具体的な並べ方の事例や図を使いながら円順列の特徴を考察させる活動を取り入れる。 ・円順列の考え方を実際の問題に適用することで、理解の定着を図る。				
本時の内容 授業のポイントや要点 小さな問	承 11:55~ 『円形に並んだ4つの円を、4色使って塗り分ける方法。』 - 各自で1通りの塗り方を考え、カードを提出する。 - このとき、先ほど使った色を使用するよう伝える。 起 11:45~ 『1列に並んだ4つの円を、4色を使って塗り分ける方法は何通りあるか。』 - 前時までの内容を利用して求めることができるように促す。 - 隣の人と自分の考えを共有する。 結 12:25~ 『問題演習をする』 - 練習問題を解き、円順列の考え方を確認する。 転 12:00~ 『円順列の総数は $(n-1)!$ で求めることができるのはなぜか。』 - 見方を変えると同じ並びがあることに気づかせる。 - シンキングツールを使い、最終的に6種類しかないことに気づかせる。 1つの位置を固定して、残りの部分の並び替えをすることで、円順列の総数を求めることができ、その1つに該当するところが式の -1 の部分であるということに気づかせる。				

令和7年度前期 授業実践シート

本年度のテーマ	問いと回答を推進力とした授業実践（探究・協働・自己調整を3本柱とした深い学びの実践） 生成 AI や ICT ソフト機器を活用した授業実践
---------	--

授業者		日時	令和7年6月27日(金) 1校時	場所	2-3
教科	理科	科目	地学基礎	単位数	2
単元名	地震災害／火山がもたらす恵みと災害			対象クラス	2-3
本時のねらい	災害が起こった際に避難所がどのような状況になり、どのような対応が必要になるのかをゲーム感覚で学ぶ				
本時の大きな問	避難所を運営するにあたって気に掛けるべき点はどこか				
使用する ICT 教材	ロイノート ☒ Google ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ 他（ ） 生成 A I ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ 他（ ） ☐ 他（ ） 利用される ICT ソフトに☑を（クリックで変わります！）				
本時で見られる生徒の姿	☐ 探究する姿 ☒ 協働する姿 ☒ 自ら学びを調整する姿				
本時の授業の工夫	静岡県が開発した図上訓練である HUG(避難所運営ゲーム)だが、大掛かりな準備が必要で実施時間も長いので、スペースを取らずに手軽にできないかと簡易版の HUG を作成した。生徒が話し合いながら状況判断をして最後に振り返ることで、避難所における課題や対策などを自分事として考えるきっかけをつくる。				
本時の内容 授業のポイントや要点 小さな問	序 9:00～ 『HUG について』 ・災害時の避難所についてや HUG のルール説明等を行い、自分事として避難所について考える時間であることを伝える ・様々な状況の人が避難してくることが想定されることや、限られた環境下で迅速な判断が求められることなどを確認する				
	破 9:10～ 『避難所を運営してみる』 ・班を作り、避難所の状況を見ながら避難者をどのように収容するのか考えさせる ・避難者が来る途中で物資の支援やトラブル等のイベントも挟み、柔軟な対応力を身に付けさせる ・じっくり考える時間を与えないくらいのテンポでゲームを進め、迅速な対応が必要であることを認識させる。				
	急 9:35～ 『振り返りと意見共有』 ・班でゲームの内容について振り返り、どのようなポイントをもとに避難者を振り分けたのかをまとめる ・他の班の振り返りと比較し、改善点や参考になる点などをまとめる ・災害状況に応じて避難所の状況も変化することを伝え、災害に対する意識づけを行う				

令和7年度後期 授業実践シート

本年度のテーマ	問いと回答を推進力とした授業実践（探究・協働・自己調整を3本柱とした深い学びの実践） 生成 AI や ICT ソフト機器を活用した授業実践
---------	--

授業者		日時	令和7年10月28日(火)5校時	場所	2年2組
教科	理科	科目	生物基礎	単位数	2
単元名	ヒトのからだの調節			対象クラス	
本時のねらい	身近にある疾患と免疫の関係を理解し、説明できるようにする				
本時の大きな問	ワクチンの必要性とは何か？				
使用する ICT 教材	ロイロノート ☒ Google ☐ 生成 AI ☒ 他 ☐ 利用される ICT ソフトに☑を（クリックで変わります！）				
本時で見られる生徒の姿	☒ 探究する姿 ☐ 協働する姿 ☐ 自ら学びを調整する姿				
本時の授業の工夫	・ロイロノートを用いて前時までの復習を行い、本時の内容へつなげる ・chatGPT を用いてワクチンとは何か、自分の言葉で説明できるようにする ・ワクチンと血清療法の違いに着目させ、説明できるようにする				
本時の内容 授業の ポイントや要点 小さな問	序 13:35～ 『 前時の復習 』 ・ロイロノートを用いて復習を行う ・隣同士で話し、単語の復習をする				
	破 10:10～ 『 身近な疾患について学習する 』 ・chatGPT を用いてワクチンの役割・必要性について考えさせる ・chatGPT との対話をする中でワクチンの役割を1文でまとめる ・まとめた文を全体に共有する ・その他の疾患について、実際の例を示しながら説明する ・エピペンについて説明する ・ワクチンと血清療法の違いについて説明させる				
	急 10:40～ 『 振り返り 』 ・本時の内容を振り返る ・次回の授業内容を各印する				

令和7年度前期 授業実践シート

本年度のテーマ	問いと回答を推進力とした授業実践（探究・協働・自己調整を3本柱とした深い学びの実践） 生成 AI や ICT ソフト機器を活用した授業実践
---------	--

授業者		日時	令和7年5月19日(月) 2・3・4校時	場所	教室
教科	保健体育	科目	保健（1学年）	単位数	1
単元名	生活習慣病の予防と回復			対象クラス	②1-8③1-7④1-6
本時のねらい	現代の日本人の死亡原因としてかわりの深い生活習慣病について理解を深めるとともに、自己の生活習慣を見直すきっかけをつくり、良好な生活習慣を構築する力を養う。				
本時の大きな問	生活習慣改善宣言をしよう！				
使用する ICT 教材	☒ ロイロノート ☐ Google ☐ 生成 AI ☒ ChatGPT ☐ Gemini ☐ 他（ ）				
本時で見られる生徒の姿	☒ 探究する姿 ☐ 協働する姿 ☒ 自ら学びを調整する姿				
本時の授業の工夫	Activity を多く取り入れながら、必要な知識を得られるような授業展開を考えた。 生徒が自らの生活習慣を振り返り、改善が必要な習慣と具体的な疾患を結び付け、一次予防の重要性について考え、気づくことができるように授業を設計した。 また、千差万別の習慣に対して、ChatGPT を活用してそれぞれの習慣に応じた改善策のアイデアを複数出すことで、生徒自身が自分では思いつかなかった視点での改善策を選択することができたり、思っていた改善策でも違った取り組み方を知ることができたりする機会を設定した。				
本時の内容 授業のポイントや要点 小さな問	承 10:10～ 『基礎知識と生活習慣チェックリスト』 - 生活習慣病の基礎知識について教示。 - 生徒が自分の生活習慣を振り返るために「生活習慣チェックリスト」を実施させる。 →隣同士で共有。なぜその点数にしたか。 - 生活習慣チェックリストのフィードバック →それぞれの項目（食事・運動等）で低かった場合の具体的な疾患を例に挙げる。 起 10:00～ 『保健ノートを取り組む』 - 副教材である保健ノートを実施させる。 →本時の内容を一度頭に入れる。 - グループで助け合いができるように3～4人班を組ませる。 →ChatGPT を初めて使うなどの Activity があるため、生徒同士で助け合える環境づくりを行う。 結 10:38～ 『生活習慣改善宣言！を考えよう』 - これまでの学習をもとに、自分なりにできそうな生活習慣の改善策を1つ考える。 - 続けられそうな健康習慣を「自分なりのルール」で考えさせる。 - 時間があればグループ内共有を実施。 - 時間があれば R80 で振り返りを入力させる。 転 10:20～ 『一次予防で将来の病気を未然防止！』 - 一次予防・二次予防・三次予防について解説を行う。 - 改善の必要がある習慣を生徒が考え、その習慣によって引き起こされる疾患と改善策をChatGPT に出力してもらう。 - 一次予防まとめカードに情報をまとめさせる。				

令和7年度後期 授業実践シート

本年度のテーマ	問いと回答を推進力とした授業実践（探究・協働・自己調整を3本柱とした深い学びの実践） 生成 AI や ICT ソフト機器を活用した授業実践
---------	--

授業者		日時	令和7年10月17日(金)2校時	場所	ラウンジ
教科	保健体育	科目	体育	単位数	3
単元名	マット運動			対象クラス	2-123
本時のねらい	演技のために自分に合った技を判断し練習する。自分の技能に応じた技を選び演技をする。				
本時の大きな問	自分の能力を考えて自分に合った技で演技しよう。				
使用する ICT 教材	ロイロノート ☒  Google ☐  生成 AI ☒  他 () ☐ 利用される ICT ソフトに☑を（クリックで変わります！） 他 (動画サイト) ☒ 他 () ☐				
本時で見られる生徒の姿	☒ 探究する姿 ☒ 協働する姿 ☒ 自ら学びを調整する姿				
本時の授業の工夫	学習指導要領から習得すべき技を一覧にして分かりやすくしたものをロイロノートで配付する グループワークで端末を使用して自分や仲間の演技を撮影するなどして教え合ったり練習したりする 演技の評価をすぐに返却して振り返りや反省をしやすくする				
本時の内容 授業の ポイントや要点 小さな問	序 10:00～ 『自分に合った技を見つけて練習しよう』 ・自分の身長・体重・筋力・柔軟性から、やりやすい技を考え得意技をみつけよう ・動画サイトで見本をみたり、ペアワークで撮影したりしながら練習、教え合いをしよう ・うまくいかない部分を粘り強く練習しよう				
	破 10:10～ 『演技を披露しよう』 ・自分で技を決めて演技を披露しよう ・失敗しても複数回演技をするなど粘り強く取り組み、演技をなるべく成功させよう ・ロイロノートで自分の評価を確認する、教師から反省やポイントをその場で聞くなどして再度練習してみよう ・「完璧にできる」「できる」の評価がいたら別の技を取り組もう				
	急 10:40～ 『マット運動の技能の性質を理解しよう』 ・けが、首の痛みや頭痛がないか確認しよう ・技の習得や技能の向上には波があり急にはうまくなならないことを理解しよう ・最終的な自分の評価を確認して振り返ろう				

令和7年度前期 授業実践シート

本年度のテーマ	問いと回答を推進力とした授業実践（探究・協働・自己調整を3本柱とした深い学びの実践） 生成 AI や ICT ソフト機器を活用した授業実践
---------	--

授業者		日時	令和7年6月13日(5)校時	場所	音楽室
教科	芸術（音楽）	科目	音楽 I	単位数	2
単元名	歌声を響かせる／音楽の要素を知る			対象クラス	1 - 3
本時のねらい	「見上げてごらん夜の星を」の特徴を捉えながら表現する（歌唱） リズムと拍子について学習し、表現活動に生かす（楽典）				
本時の大きな問	歌詞のもつ意味と情景をイメージしながら表現する。				
使用する ICT 教材	☒ ☐ ☐ ☐ ☒ ☐				
本時で見られる生徒の姿	☒ 探究する姿 ☐ 協働する姿 ☒ 自ら学びを調整する姿				
本時の授業の工夫	これまで学習した「知識」を表現活動にどう生かすかということ、言葉によって関連付けながら認識させる。				
本時の内容 授業の ポイントや要点 小さな問	序 13:15～ 『前回までの復習』 ・音楽の要素「リズム」「音程」に注意しながら通して歌う。 ・歌唱テスト用に曲の長さを調整する。				
	破 13:25～ 『音楽の要素「表現」について』 ・授業で取り上げた「校歌」「翼をください」で学習した「文節重視」を意識させる。 ・V と(v)の違いについて再認識させる。 ・この曲の背景をイメージした曲想を伝える。 ・本時で学習した内容を確認しながら表現豊かに歌う。				
	急 13:50～ 『拍子について学習する』 ・歌唱課題で指摘しているリズムと楽典で学習した音符・休符をもとに、拍子について学習する。				

令和7年度後期 授業実践シート

本年度のテーマ	問いと回答を推進力とした授業実践（探究・協働・自己調整を3本柱とした深い学びの実践） 生成 AI や ICT ソフト機器を活用した授業実践
---------	--

授業者		日時	令和7年11月12日(1) 校時	場所	1年3組
教科	英語科	科目	English Communication I	単位数	3
単元名	Lesson5 Banana Paper			対象クラス	1年3組
本時のねらい	Banana Paper を通じて SDG s の課題解決の糸口を探る				
本時の大きな問	What banana paper product do you produce ?				
使用する ICT 教材	☐ ロイロノート ☒   ☐ Google ☐  ☐  ☐  ☐  ☐ 他 () ☒ 生成 AI ☐  ☒  ☐  ☐  ☐ 他 () ☐ 他 ()				
本時で見られる生徒の姿	☒ 探究する姿 ☒ 協働する姿 ☒ 自ら学びを調整する姿				
本時の授業の工夫	生徒は Lesson 5 の授業開始時の調べ学習と本文全体の学習を通して、Banana Paper が SDGs の課題解決に貢献していることを学んできた。本時では、自分が高校生開発者という立場だとしたら、どのような製品を Banana Paper を使用して開発するのか、その根拠となる人間にとっての利点、地球環境にとっての利点の視点に着目させながら考えさせたい。また、自分の考えだけでなく、他者の考えを知ることにより、チームとしてどのように考えるか、協働させる中でより良い考えを出させるよう工夫した。				
本時の内容 授業のポイントや要点 小さな問	序 9:00～ 『Greeting・Warm Up』 ・ Today's Goals/ Today's Menu の確認 ・ 前時の復習				
	破 9:10～ 『Individual Work』 ・ Banana Paper が SDG s の課題をどのように解決しているのか、調べた内容の振り返り ・ 本日の問いの提示 ・ 自分が考える Banana Paper を使った製品の提出・共有 ・ 考案した製品を使用する利点(①人間にとって②地球環境にとって)の考察				
	急 9:25～ 『Group Work』 ・ 4人1班になり、個人で考えた製品案を共有する。 ・ 班でどの製品を開発するのか決定し、役割分担をして発表の準備をする。 ・ 各自分担部分、製品についての説明を英作文する。 ・ イラストなどを作成し、スライドを完成する。 ・ 本日のふりかえり				

令和7年度後期 授業実践シート

本年度のテーマ	問いと回答を推進力とした授業実践（探究・協働・自己調整を3本柱とした深い学びの実践） 生成 AI や ICT ソフト機器を活用した授業実践
---------	--

授業者		日時	令和7年 11月 4日(火) 4校時	場所	3-4
教科	外国語	科目	論理・表現Ⅱ	単位数	2単位
単元名	Will Our Lives Change with AI?（みんなの暮らしはAIで変わる?）			対象クラス	3-4
本時のねらい	AI時代の社会を自分事として捉え、意見や考えを英語で表現できる。				
本時の大きな問	What can humans do that AI can't?（人にできて、AIにできないことって何?）				
使用する ICT 教材	☒ ロイロノート ☒ ☒ ☐ Google ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ 他（ ） ☒ 生成 AI ☒ ☐ ☐ ☐ ☒ 他（ Sora by Open AI ） ☐ 他（ ）				
本時で見られる生徒の姿	☒ 探究する姿 ☒ 協働する姿 ☒ 自ら学びを調整する姿				
本時の授業の工夫	総探×英語の教科横断型であること。（総探では現代社会の問題に焦点を当て、課題解決に向けたプロジェクトを生徒たちは進めている。AIに対する問題点や人間の価値について取り扱っている生徒が多いことから、AIに対する考えを他者参照する機会があると面白いなと考えていたので、この授業を開発した。）				
本時の内容 授業の ポイントや要点 小さな問	序 12:00～ 『アーシャの考えとは?』 ・本文を読み、登場人物について振り返る。（前時の復習）				
	破 12:10～ 『AIにできる仕事、できない仕事』 ・小さな問い①：What kind of jobs can only humans do in the age of AI? バタフライチャートを用いて身近な職業が10年後存在しているかどうか分類する。 ・小さな問い②：Why do you think so? シンキングツールに分類した理由を考える。 ・大きな問い：What can humans do that AI can't? に迫る。				
	急 12:30～ 『ハリーを救いたい』 ・身に付けた表現を用いて、心理療法士となり、登場人物を救ってあげる。 ・作成したアドバイスを ChatGPT に評価してもらう。この職業の熟練度 No.1 を決める。				

令和7年度前期 授業実践シート

本年度のテーマ	問いと回答を推進力とした授業実践（探究・協働・自己調整を3本柱とした深い学びの実践） 生成 AI や ICT ソフト機器を活用した授業実践
---------	--

授業者		日時	令和 7 年 6 月 18 日(水) 1 校時	場所	1-4HR
教科	家庭	科目	家庭基礎	単位数	2
単元名	子どもとかかわる			対象クラス	1-4
本時のねらい	赤ちゃんを育てることの大変さや大切さを実感する。 命の重みや親の気持ちを考える。				
本時の大きな問	赤ちゃんを育てる親の気持ちを理解し、感じたことを共有しよう。				
使用する ICT 教材	ロイロノート ☒   利用される ICT ソフトに☑を（クリックで変わります！） Google ☐  ☐  ☐  ☐  ☐ 他（ ） 生成 A I ☐  ☐  ☐  ☐ 他（ ） ☐他（ ）				
本時で見られる生徒の姿	☒ 探究する姿 ☒ 協働する姿 ☒ 自ら学びを調整する姿				
本時の授業の工夫	体験を通して、赤ちゃんとの関わりを実感することができる。 他者の意見を聞きながら、学習した内容を踏まえて、自ら学びを考えさせる。				
本時の内容 授業のポイントや要点 小さな問	序 9:00～ 『 本時のねらいを伝える 』 ・本時のねらいを伝える。 ・実際に抱っここのやり方動画を流し、ポイントを確認する。				
	破 9:10～ 『 赤ちゃん人形を抱っこする／グループで考える 』 ・前半の 4 班は、ポイントに気を付けながら赤ちゃん人形を抱っこし、感じたことを記入する。 ・後半の 4 班は、「赤ちゃんが泣いてばかり。何を考える？どんな行動をとる？」についてグループワークに取り組み、グループの意見をまとめる。 ・前半と後半をチェンジする。				
	急 9:35～ 『 発表タイム／振り返り 』 ・「赤ちゃんが泣いてばかり。何を考える？どんな行動をとる？」について班の意見を発表する。 →他グループの発表を聞いて、印象に残った・なるほどと感じた考えを記入する。 ・残りの時間で、振り返りを記入する。				

令和7年度後期 授業実践シート

本年度のテーマ	問いと回答を推進力とした授業実践（探究・協働・自己調整を3本柱とした深い学びの実践） 生成 AI や ICT ソフト機器を活用した授業実践
---------	--

授業者		日時	令和7年 11月 18日(火) 5(6)校時	場所	調理室
教科	家庭	科目	家庭総合	単位数	2単位
単元名	食生活（調理実習：ナポリタン）			対象クラス	2年8組
本時のねらい	・基本的な調理技術を（包丁操作、炒め方、味付けの調整など）実習を通して身につける。 ・グループで協力し、役割や時間配分を考えながら安全かつ効率的に調理を行える力を養う。				
本時の大きな問	ナポリタンを“おいしく、安全に、効率よく”作るためにはどのような調理の工夫が必要だろうか。				
使用する ICT 教材	ロイロノート ☒ Google ☐ 生成 AI ☐ 他（ ） ☐ 利用される ICT ソフトに☑を（クリックで変わります！）				
本時で見られる生徒の姿	☒ 探究する姿 ☒ 協働する姿 ☒ 自ら学びを調整する姿				
本時の授業の工夫	・安全面や料理工程での注意とポイントを実習の前に確認をし、作業効率をあげる。 ・常に机間巡視を行い、良いところや安全面に気を付けるよう声掛けをする。				
本時の内容 授業の ポイントや要点 小さな問	序 13:35～ 『 注意事項とポイントの説明 』 ・出席を確認後、実習の注意事項とポイントの確認。 →今日の実習で特に意識してほしいポイントを提示する。 ・				
	破 13:45～ 『 実習 』 ・常に机間巡視を行い、良いところや安全面に気を付けるよう声掛けをする。 →全体の火加減調整 →玉ねぎの加熱目安、パスタの湯で加減 →ケチャップを入れる前と後の火加減 →盛り付け「おいしそう！と思える盛り付けにチャレンジしてみよう」 などを周りながら指示をする				
	急 14:40～(6校時に入るため) 『 試食、片付け、振り返り 』 ・食事コーナーにて試食 ・片付け ・振り返り →ナポリタンを“おいしく、安全に、効率よく”仕上げるためにはどのような調理の工夫が必要だろうか。				

令和 7 年度前期 授業実践シート

本年度のテーマ	問いと回答を推進力とした授業実践（探究・協働・自己調整を 3 本柱とした深い学びの実践） 生成 AI や ICT ソフト機器を活用した授業実践
---------	--

授業者		日時	令和 7 年 5 月 1 6 日(金) 2 校時	場所	PC 室
教科	情報	科目	情報 I	単位数	2
単元名	情報のモラルと個人に及ぼす影響			対象クラス	1 - 6
本時のねらい	実際に架空のネットの社会で特定作業を疑似体験することで、不特定多数を対象としたコミュニケーションの怖さを体験し、情報化が個人に及ぼす影響を考えるきっかけをつくる。				
本時の大きな問	個人を特定し、改めて『つぶやきポリシー』をつくらう！				
使用する ICT 教材	ロイロノート ☐ Google ☒ 生成 AI ☒ 他 () ☐ 利用される ICT ソフトに☑を（クリックで変わります！）				
本時で見られる生徒の姿	☒ 探究する姿 ☒ 協働する姿 ☒ 自ら学びを調整する姿				
本時の授業の工夫	・SNS を模した自作のホームページを利用し、実際に個人の特定を行う。 ・わずかな情報で個人が特定できることを理解し、情報モラルの改善をはかる ・つぶやきポリシーという標語を生成 AI とともに作らせ表現させることで、深い学びの実現を図る。				
本時の内容 授業の ポイントや要点 小さな問	起 10:00～ 『SNS などでのどのような情報をあげると、自らの身元がばれてしまうだろう？』 ・最初は個人で考えさせ、グループ、クラス単位と広げ考えさせる。 ・グループディスカッション時では、意見を否定することはせず、どんどんアイデアを出させ、次のプログラムのヒントを作らせる。 承 10:10～ 『実際に個人を特定できるかな！？』 ・SNS を模した自作のホームページ上で、S 君の個人情報特定させる。 ・グループ対抗で特定させ、Google map など他のサイトを利用してもよいことを伝え、細かい情報などどんどん上げさせる。 ・不特定多数を対象としたコミュニケーションツールの怖さを体験させたい。 転 10:35～ 『生成 AI を利用して、つぶやきポリシーをつくってみよう！』 ・個人で考えさせ、グループで共有する。 ・生成 AI にこちらで用意したプロンプトを与え、それを活用することで、より具体的な評語を完成させる。 結 10:45～ 『みんなのつぶやきポリシーをみてみよう！』 ・それぞれが作った標語を実際に見比べる。 ・作品の否定をせず、考察させ、改めてネットワークツールの怖さを実感させ、それが個人のに与える影響について考えさせる。				

令和7年度後期 授業実践シート

本年度のテーマ	問いと回答を推進力とした授業実践（探究・協働・自己調整を3本柱とした深い学びの実践） 生成 AI や ICT ソフト機器を活用した授業実践
---------	--

授業者		日時	令和7年10月28日(火) 3校時	場所	PC 教室
教科	情報	科目	情報 I	単位数	2
単元名	情報通信ネットワークとデータの活用			対象クラス	1-4
本時のねらい	暗号化の仕組みについて知る。				
本時の大きな問	外部者に情報を盗み見されないためにはどのような工夫が必要だろうか。				
使用する ICT 教材	ロイロノート ☒  利用される ICT ソフトに☑を（クリックで変わります！） Google ☒  ☒  ☒  ☐  ☐  ☐ 他（ ） 生成 AI ☐  ☐  ☐  ☐  ☐ 他（ ） ☐ 他（ ）				
本時で見られる生徒の姿	☒ 探究する姿 ☒ 協働する姿 ☐ 自ら学びを調整する姿				
本時の授業の工夫	・授業資料の編集を PC で行わせることにより、タイピングに慣れさせる。 ・ICT の活用と実物での実践を織り交ぜることで生徒の理解を深めさせる。 ・グループ活動を多めにとることで視覚・聴覚などの様々な感覚を働かせる。				
本時の内容 授業の ポイントや要点 小さな問	承 11:10～ 『 暗号を解読してみよう 』 ・シーザーローテーションという方法で暗号の解読を行う ・4人1グループで実際に手を動かして解読する ・実際に手を動かしてみて感じたデメリットを検討する 起 11:00～ 『 暗号化の目的を知る 』 ・PC にログインし、学習環境を整える ・暗号化とは何かをスライドを見ながら確認する →イラストなどを用いて理解しやすい工夫を行う 転 11:25～ 『暗号を開発してみよう！』 ・南京錠と紙、鍵を使って暗号を開発する ・4人1グループで作業を行い、役割を決めて行う 結 11:45～ 『本時の振り返り』 ・今回の授業で学んだことをグーグルドキュメントのワークシートに記入する				

令和 7 年度実施 公開研究授業 指導案

2025 公開研究授業 指導と評価の計画

(1) 授業者(職) 山岡 正和 (総括教諭)

(2) 教科・科目 国語・「現代の国語」(1年8組)

(3) 単元名 「構成や展開を意識して発表する」(「場に応じて伝えるために」)

(4) 授業の概要 プレゼンテーションの話し手として、自らの意見を説明するために必要な資料・情報を収集し、簡単なフリップを作成する。根拠を示しながら自らの意見を説明するだけでなく、自身とは異なる立場や意見を踏まえたうえで、自らの意見をブラッシュアップしてプレゼンテーションを行う。生徒自身の問いを推進力とした授業づくりを展開する。

(5) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
実社会において理解したり表現したりするために必要な語句の量を増やすとともに、語句や語彙の構成や特色、用法及び表記の仕方などを理解している。	場の状況に応じて資料や機器を効果的に用いたりするなど、相手の理解が得られるように表現を工夫している。	語句を増やし、用法や表記の仕方などを理解し、資料や機器を効果的に用いて、理解を得られる工夫を凝らすことに向けた取り組みを行うとともに、生徒自身の問いを推進力としながら、自らの学習を調整しようとしている。

(6) 単元の指導と評価の計画：

a：知識・技能 b：思考・判断・表現 c：主体的に学習に取り組む態度

◎：重視して指導・評価する観点 ○：指導・評価する観点

時	授業 タイトル	学習活動	ねらい	評価方法			
				a	b	c	評価材料
1	学習の見通しを持つ	・課題を解決するために必要な知識や技法を学ぶ。 ・効果的なプレゼンテーションについて考える。	・現代の社会的課題に対して、自身の考えを表現する。 ・根拠に基づいた自分の意見を他者に効果的に伝える方法を考える。	◎	○		課題① ワークシート①
2 本時	聞き手が納得する資料づくり	・テーマに沿った動画を視聴する。 ・資料をもとに、自分の考えを根拠づけて深める。 ・異なる立場と対話する。 ・自分の意見をブラッシュアップする。	・現代の社会的課題について理解する。 ・自身の考えを論理的に構築する。 ・ChatGPT と対話・議論をしながら課題を複合的に捉える。 ・対話をもとに、課題の解決方法について自分の意見をまとめる。	○	◎		プレゼン資料
3	プレゼンテーションを行う	・プレゼンテーションをする／聞く。 ・発表を評価し、改善点などを挙げながら学習を振り返る。	・聞き手を意識して、主体的に構成や展開を工夫したり、他者のプレゼンテーションを聞いて要旨をまとめる力を身につける。 ・学習を振り返り、自らの学びを調整する能力を養う。		○	◎	ワークシート②

(7) 指導内容

①本時のねらい

- ・現代の社会的課題に対して自身の考えを持つ。
- ・自身の考えを相手に効果的に伝える工夫をする。

②本時の大きな問い

わたしたちは「クローンペット」を許せるか。

③本時の指導内容

授業展開	学習活動	評価方法
導入 (10 分)	○前時の復習をする ・社会的な課題について理解し、自身の考えを他者に伝える工夫について確認させる。 ○設定したテーマに関する動画（クローンペットについて）【※1】を視聴する。	取り組みの観察
展開 (30 分)	○資料をもとに、自分の考えを根拠づけて深める ・動画を観て、それぞれメリット・デメリット【※2】について考える。 ・ロイロノートを用いて、グループ内／教室内での意見を共有する。 ○異なる立場と対話する。 ・ChatGPT を用いて異なる立場の意見と討論をする。【※3】 ・感情的にならず論理的に考え、多角的に物事をとらえる。	ロイロノートのカード ワークシート
まとめ (10 分)	○自分の意見をブラッシュアップする。 ・討論の振り返りを行い、相手に理解される論理や表現について考える。 ・他者の視点を踏まえ、複合的な視点で課題を捉え返し、自らの学びを調整する。 ・課題の解決方法について、自分の意見をまとめる。 ○プレゼンテーション資料を作成する。 ・相手の理解が得られるような効果的な表現について考える。	フリップ

【※1】



【※2】

【課題】 クローンペットについて、否定的・肯定的な意見の「根拠」を、それぞれ箇条書きでまとめてみよう。

【否定的】

- ・
- ・
- ・

【肯定的】

- ・
- ・
- ・

【※3】

- ・「クローンペット」について「賛成」と「反対」で討論をします。
 - ・私は「クローンペット」に「」の立場です。あなたは「」の立場です。
 - ・会話では論理的に根拠づけて、話してください。
- 以下のルールで会話を続けましょう。
1. あなたは、最初に自分の考えを簡潔に述べてください。
 2. 私がそれに対して反論・説得します。
 3. あなたは必ず「反論」または「質問」で簡潔に返してください。
 4. 7往復程度やり取りした後、最後に次のどちらかで答えしてください；
 - 「あなたの考えに納得しました。」
 - 「あなたの考えに納得できません。」
 5. 最後に討論の振り返りとアドバイスをお願いします。

【※4】

課題

クローンペットについて、賛成か反対の立場に立ってあなたの考えを述べなさい。(スライド4枚)

①【問題提起・主張】

②【根拠】 ③【反論】

④【結論】 の構成で書く

2025 公開研究授業 指導と評価の計画

(1) 授業者(職) 米村 浩(教諭)

(2) 教科・科目 地歴公民科・地理総合 対象：1年5組(1年5組教室 40名)

(3) 単元名 生活文化と自然環境②気候

(4) 授業の概要 今回は、雨温図や写真から情報を読み取ることを通して各気候区の特徴を理解し、それによる人々の生活の違いを、探究学習させる。また生成AIを活用して、気候に関する「共生」と「克服」のテーマを各自に考えさせることを意図としている。

(5) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
人々の生活文化が地理的環境から影響を受けたり、与えたりして多様性を持つことを理解する。	人々の生活はそれぞれの気候要因とどのように関わりあっているのか、世界各地ではどのような生活が営まれているのかなど、多面的・多角的に考察している。	生活文化の多様性に対する関心を高め、それを意欲的に追求し、捉えようとしている。

(6) 単元の指導と評価の計画：

a：知識・技能 b：思考・判断・表現 c：主体的に学習に取り組む態度

◎：重視して指導・評価する観点 ○：指導・評価する観点

時	授業 タイトル	学習活動	ねらい	評価方法			
				a	b	c	評価材料
1～2	多様な気候とその分布	・地図を用いて、気温の高い/低い地域や降水量の多い/少ない地域の分布をとらえる。 ・写真を用いて、地域による気候の多様性を理解する。	・気候は、気温・降水量・風などの気候要素から構成されていることを理解する。 ・気候の特徴と人間生活の関りについて考える。	○	○		・ロイロノートの提出課題の内容 ・観察
3～4	熱帯の人々の暮らし	・雨温図の読み取り方を学び、気候区ごとの特徴を理解する。 ・写真を用いて、自然環境とそれに対応する人々の生活の様子を把握する。	・熱帯の各気候区における気温・降水量・風などの気候要素の特徴について理解する。 ・熱帯における土壌や植生の特徴を理解し、人々の生活や文化に与える影響を考える。	○	○	○	・ロイロノートの提出課題の内容 ・観察
5～6	乾燥帯の人々の暮らし	・雨温図を読み取り、気候区ごとの特徴を理解する。 ・写真を用いて、自然環境とそれに対応する人々の生活の様子を把握する。	・乾燥帯の各気候区における気温・降水量・風などの気候要素の特徴について理解する。 ・乾燥帯における土壌や植生の特徴を理解し、人々の生活や文化に与える影響を考える。	○	○	○	・ロイロノートの提出課題の内容 ・観察

7～8	温帯の人々の暮らし	・雨温図を読み取り、気候区ごとの特徴を理解する。 ・写真を用いて、自然環境とそれに対応する人々の生活の様子を把握する。	・温帯の各気候区における気温・降水量・風などの気候要素の特徴について理解する。 ・温帯における土壌や植生の特徴を理解し、人々の生活や文化に与える影響を考える。	○	○	○	・ロイロノートの提出課題の内容 ・観察
9～10	亜寒帯・寒帯の人々の暮らし	・雨温図を読み取り、気候区ごとの特徴を理解する。 ・写真を用いて、自然環境とそれに対応する人々の生活の様子を把握する。	・亜寒帯・寒帯の各気候区における気温・降水量・風などの気候要素の特徴について理解する。 ・亜寒帯・寒帯における土壌や植生の特徴を理解し、人々の生活や文化に与える影響を考える。	○	○	○	・ロイロノートの提出課題の内容 ・観察

(7) 指導内容

①本時のねらい

資料から乾燥帯の各気候区の特徴を読み取り、異なる自然環境や生活の特色が見られることを理解すると共に、生成 AI を活用して自然環境との「共生」「克服」を考えさせる。

②本時の大きな問い

乾燥帯気候における「水」の確保は、共生か克服か？

③本時の指導内容

授業展開	学習活動	評価方法
導入 (5分)	・これまでの学習内容についての確認 - 乾燥帯について (気温・降水量・植生等の気候要素の概要を再確認)	
展開 (35分)	・グループワーク ① 4～5人のグループを作り、乾燥帯気候の「カイロ」「ニアメ」に関して、気温降水量・植生・住居・植生の各要素を具体的に調べる。 ロイロノートの共有ノートを使用する。 ② グループで情報共有したものを、ロイロノートで提出する。 ③ 各班ごとに発表させ、クラス全体として乾燥気候区に関して理解する。 (自分の班に無かった項目に関しては、積極的にメモをする。) ・2枚の写真(イラスト)を示す。 → その違いの原因を考察する。 → 「水」の入手方法を確認する。 → 自然環境との関わり方に着目する。 ・生成 AI によるある議論を読む。 → 自然環境との「共生」「克服」について考える。	・観察 ・ロイロノートでの課題提出
まとめ (10分)	・乾燥気候帯という自然条件に対しての「共生」「克服」という2つの立場を踏まえて、自分の考えをまとめる。	・ロイロノートでの課題提出

2025 公開研究授業 指導と評価の計画

(1) 授業者(職) 村田 菜月 (教諭)

(2) 教科・科目 数学・数学A (1年1組)

(3) 単元名 3章 図形の性質 「三角形の性質」 (第一学習社 数A718)

(4) 授業の概要 「数学は何に使われているのか」、疑問に思う生徒は少なくない。そこでこの授業では、三角形の外心、内心、重心の性質を理解し、日常生活での活用方法を考察することを目的とした。外心、内心の性質を確認しながら、具体的な場面での活用方法を考え、問題解決を行う。後半では重心の活用方法について考察し、問題を作成する活動を通して各性質に関して理解を深める。

(5) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
- 三角形に関する基本的な性質について理解している。 - 三角形の性質を用いて、線分の長さや角度を求めることができる。	図形の構成要素間の関係や既に学習した図形の性質に着目し、図形の新たな性質を見だし、その性質について論理的に考察したり説明したりすることができる。	- コンピュータなどの情報機器を用いて図形を表すことで、図形の性質について関心を持とうとしている。 - 問題解決の過程を振り返って考察を深めたり、評価・改善したりしようとしている。

(6) 単元の指導と評価の計画：

a：知識・技能 b：思考・判断・表現 c：主体的に学習に取り組む態度

◎：重視して指導・評価する観点 ○：指導・評価する観点

時	授業 タイトル	学習活動	ねらい	評価方法			
				a	b	c	評価材料
1 2	三角形と比	線分の比と三角形の角の二等分線の性質を理解し、活用する。	中学校での既習事項を踏まえ、平行線と線分の比、線分の内分、外分について理解する。	◎			ワークシート
3	三角形の外心	三角形の外心の性質を理解し、角度や線分の長さを求める。	外心の性質について ICT 機器を用いて可視化させ、理解を深める。	○	○		ワークシート
4	三角形の内心	三角形の内心の性質を理解し、角度や線分の長さを求める。	内心の性質について ICT 機器を用いて可視化させ、理解を深める。	○	○		ワークシート
5	三角形の重心	三角形の重心の性質を理解し、線分の長さを求める。	重心の性質について ICT 機器や工具を用いて可視化させ、理解を深める。	○	○		ワークシート

6	三角形について	・日常生活の中で活用されている三角形の性質について考察する。	・日常生活での例を用いて、外心、内心、重心の性質の活用について興味を持たせる。			◎	ワークシート
---	---------	--------------------------------	---	--	--	---	--------

(7) 指導内容

①本時のねらい

三角形の外心、内心、重心の性質が日常生活でどのように活用されているか考察する。

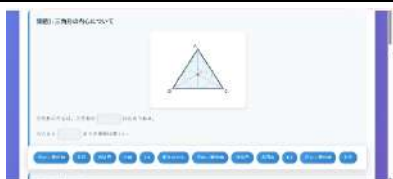
②本時の大きな問い

数学は何に使われているのか？

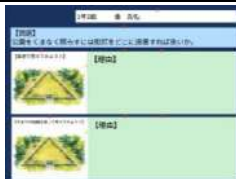
③本時の指導内容

授業展開	学習活動	評価方法
導入 (5分)	○前回の学習内容を復習する。(※1) ○本時の学習目標を確認する。 数学は何に使われているのか？	
展開① (20分)	3～4人のグループに分かれ、1から4の番号を割り振る(グループA) ○各問題について考察する 【外心に関する問い】 ① 1つの街灯で公園全体を照らすには街灯を公園内のどこに設置すればよいか。 (※2) ② 3つの地域全体に電波が届くようにするにはWi-Fiをどこに設置すればよいか。 【内心に関する問い】 ③ 校庭の遊具から均等な場所にベンチを置くにはどこに設置すればよいか。 ④ 3つの地点から同じ大きさの花火が見られるようにするにはどこで打ち上げればよいか。 1 同じ番号の生徒で集まり、グループを再編成する。(グループB) 2 個人で既習の知識等を踏まえながら問題を解いていく。 3 グループBで意見を共有する。 4 答え合わせを行う。 5 グループAに戻り、問題を出し合う。	
展開② (20分)	○重心に関する問いを作成する 1 展開①で解いた問題を参考にし、生成AIなどを活用しながらグループAの中でペアを作り、重心を用いた問題作成を行う。 2 ロイロノートの共有ノート機能を用いて、全体で共有する。	
まとめ (5分)	○外心、内心、重心が日常生活のどのような場面で活用されているかを自分の言葉でまとめる。	【c】ワークシート

(※1)



(※2)



2025 公開研究授業 指導と評価の計画

(1) 授業者(職) 松田 恭平(教諭)

(2) 教科・科目 理科・化学基礎(1年4組)

(3) 単元名 物質と化学反応式

(4) 授業の概要 物質や濃度についての関連性を体験的に理解し、次の学びへと繋げていく。

(5) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
- 原子量・分子量・式量と物質の関係を理解している。 - 物質を用いた基本的な計算ができる。 - 化学式と物質の関係を理解している。 - モル濃度が、溶液の体積と溶質の物質との関係を表していることを理解している。 - 溶液調製に必要な実験器具を適切に取り扱い、水溶液の濃度調製をする技能を習得している。 - 基本的な化学式、化学反応式を書く技能を習得している。	- 質量パーセント濃度とモル濃度の違いを表現することができる。 - 化学式、化学反応式を書く技能を習得し、的確に表現することができる。 - 実験「化学反応式の量的関係」を行い、反応式の係数が、物質の比を表していることを見出すことができる。	- 溶液の濃度の表し方について探究しようとする。 - いろいろな物質の化学変化に注目し、化学変化の量的関係を物質と関連づけて考察しようとするとともに、意欲的にそれらを探究しようとする。

(6) 単元の指導と評価の計画：

a：知識・技能 b：思考・判断・表現 c：主体的に学習に取り組む態度

◎：重視して指導・評価する観点 ○：指導・評価する観点

時	授業 タイトル	学習活動	ねらい	評価方法			
				a	b	c	評価材料
1～2	原子量と分子量・式量	相対質量や原子量・分子量・式量について学び、問題演習を行う。	相対質量の考え方・求め方を理解し、原子量・分子量・式量の基本的な計算ができる。	○		◎	- 授業プリント - 授業態度
3～4	物質	物質と粒子の数、質量、気体の体積の関係について学び、問題演習を行う。	物質と粒子の数、質量、気体の体積の関係を理解し、その関係性を表現することができる。	○	◎		授業プリント
5～6	溶液の濃度	溶液と質量パーセント濃度、モル濃度について学び、問題演習や課題学習を行う。	溶液と濃度について理解し、質量パーセント濃度とモル濃度の違いについて表現することができる。	○	◎		- 授業プリント - 課題学習

7～8	化学反応式	化学反応式について学び、問題演習を行う。	基本的な化学式、化学反応式を書く技能を習得し、的確に表現することができる。	◎	○	・授業プリント
-----	-------	----------------------	---------------------------------------	---	---	---------

(7) 指導内容

①本時のねらい

与えられた問いに対して、既習内容である物質質量や溶液の濃度に関する知識が関連していることを気付かせる。また、問いに対して科学的な答えを表現するための能力を養う。

②本時の大きな問い

濃度ってなんだろう？

③本時の指導内容

授業展開	学習活動	評価方法
導入 (10 分)	○濃度についての振り返りを行う ○「水の中に同量の砂糖と塩を入れたものを飲むと甘い？しょっぱい？」という問いに対しての答えを全体で共有する	【a】授業プリント
展開 (35 分)	○問いに関して ChatGPT と議論する 班の中で 2 つのグループに分かれ、それぞれ甘くなる／しょっぱくなると考えられる理由を議論する。 ○共有された意見をもとに改めて班で予想をたてて実際に溶液をつくって舐めてみる 舐めた感想から、同じ濃度なのになぜそのようになったのかを考える。 ○各班の考えを全体で共有する 質量パーセント濃度とモル濃度の違いに気付き、物質質量可視化ツール(図 1)を用いて視覚的にも理解する。  図 1 ○質量パーセント濃度とモル濃度についてまとめる 自分が教える立場となった際、どのように違いを説明するかを考えて簡単な説明資料をつくる。	【a】 【b】 授業プリント
まとめ (5 分)	○質量パーセント濃度とモル濃度について改めて確認する ○料理やスポーツドリンクなどの事例を確認する	

2025 公開研究授業 指導と評価の計画

(1) 授業者(職) 打田 大輔(教諭)

(2) 教科・科目 保健体育・保健(1年7組)

(3) 単元名 (1)現代社会と健康 (イ)現代の感染症とその予防

(4) 授業の概要 本授業は感染症の内容のなかで「予防」について実例を用いて理解を深めるように設計をした授業である。生徒が関心を持ちやすい題材として「文化祭食販企画での感染症予防」について検討させる活動を行う。社会的取組について考える資質を高めるために、学校・クラスという組織的な感染症予防の取組について考える機会としたい。

(5) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
感染症の発生や流行には、時代や地域によって違いがみられることやその予防には個人の取組及び社会的な対策が必要になることを理解している。	現代の感染症とその予防について、課題を発見し、原則や概念に着目して解決の方法を思考し、判断するとともに、それらを表現している。	現代の感染症とその予防の学習において、自他や社会の課題を発見し、その解決を目指した活動に主体的に取り組もうとしている。

(6) 単元の指導と評価の計画： a：知識・技能 b：思考・判断・表現 c：主体的に学習に取り組む態度

◎：重視して指導・評価する観点 ○：指導・評価する観点

時	授業 タイトル	学習活動	ねらい	評価方法			
				a	b	c	評価材料
1	現代の感染症	① 人類の感染症との闘いの変遷 ② 現代の感染症の課題	① 現代の健康水準の向上は感染症への対策が寄与していることを理解する。 ② 現代でも感染症の脅威に生活が影響を受けていることを理解する。	◎		○	ワークシート テスト
2	感染症の予防 (本時)	① 感染症予防の原則 ② 文化祭食販企画を題材に感染症予防のための取組を考えよう	① 3つの感染症予防の原則(感染源対策、感染経路対策、感受性者対策)を理解する、 ② 文化祭食販企画の感染症予防を検討することを通して、社会的取組についての理解を深める。		◎	○	ワークシート テスト
3	性感染症・エイズとその予防	① 主な性感染症とその特徴 ② 性感染症予防のために必要なこと	① 潜伏期間および自覚症状の特徴について理解する。 ② 性行為を行う責任と予防の重要性について理解を深める。	◎		○	ワークシート テスト

(7) 指導内容

①本時のねらい

感染症の予防における社会的取組についての理解を深めたい。しかし、生徒の実態として教科書に記載されている「環境衛生」や「検疫」は縁遠いものである。今回は文化祭の食販企画を題材にすることで生徒にとっての社会＝学校でのルールづくりや感染症予防の取組について、理解を深めたい。

②本時の大きな問い

文化祭で食販企画を実施することになったとき、感染症を起こさないための工夫はどんなことが考えられるかな？

②本時の指導内容

授業展開	○＝学習活動 ・＝解説、説明	評価方法
導入 (10 分)	○ Question 1 「来年の文化祭では何の企画をやりたい？」 ・ 関心を引きつつ、大きな問いの伏線になる発問。検討 1 分＋共有 1 分。 ○ 副教材（保健ノート）の問題に取り組む ・ 本時の大きな問いに答えるための前提知識を得るための活動 ・ 生徒がノートに取り組むあいだに出席確認および提出箱の作成を行う	
展開 (30 分)	○ Question 2 「文化祭で食販企画を実施することになったとき、感染症を起こさないための工夫はどんなことが考えられるかな？」 ・ 作業手順について解説。授業者の今年度実施例を基にワークシートの書き方も指導する。 文化祭食販企画 感染症予防検討シート 私たちの班の販売物は アイスブリュレクレープ です 感染原因の特定 起こりうる感染症とその原因をまとめる ■カンピロバクター 胃腸に影響を及ぼし、下痢・腹痛・発熱などを引き起こします。 未調理・加熱不十分な食材→リスク。 汚染された水や氷：アイスクレープの場合「氷」や「水（シロップなど）」がポイント ■黄色ブドウ球菌 黄色ブドウ球菌は、人の皮膚や鼻腔などに常在していることが多い菌です。 この菌が食品に混入し、かつその食品が手入れ・温度管理・調理・保存のいずれかで不適切な状態になると、菌自身が増殖して毒素（エンテロトキシン）を産生します。 感染症を予防するための対策 食材の種類・調理・保管・販売の方法を考えてまとめる ■食材の種類 凍ったままのアイスクレープを仕入れる。 ブリュレ用の砂糖はスティックタイプを使用して使い切る。 ■調理方法① 調理者・運搬者・販売者の商品を触る人は必ずマスク、ゴム手袋、帽子、エプロンの4点セットを着用 ■調理方法② 注文が入ってから調理（ブリュレ）する。 ■保管方法 当日に使用する分のみを調理室の冷蔵庫で管理する。 在庫の分は倉庫の冷蔵庫に保管 感染源対策は水色 のカード、感染経路対策はピンク のカードでまとめる これらの対策を講じればこの企画の実施可能性は（保健所に衛生的にOKと認めてもらえる可能性） 約 90 % ・ 生徒の作業手順 ■手順1 4人班を作り、代表者が販売品抽選に参加。 ＜販売品リスト＞ 焼きそば/お好み焼き/たこ焼き/フランクフルト/からあげ/ フライドポテト/焼き鳥/じゃがバター/カレーライス/ホットドッグ/ たいやき/クレープ/チョコバナナ/ポップコーン/綿あめ/かき氷/ 冷やしきゅうり/焼きとうもろこし/おにぎり/レモネード/ ■手順2 販売品が決まったら、その販売品で起こりうる感染症はどんなものがあるか調査する。 ■手順3 その感染症を予防するための対策（食材の種類・調理・保管・販売の方法）を考える。【主に感染源対策・感染経路対策】 ・ 調べ学習に ChatGPT の学習モード を使用させる ・ 事実（感染症の特徴等）に関してはファクトチェックを行う。班の中で役割分担を行い、ファクトチェック係を置く。ファクトチェック係はファクトチェック用資料と ChatGPT からの出力を照合する。	■ ワークシート（観点 b）
まとめ (10 分)	○ 全体共有（インタビュー形式） 立候補または抽選で2～3グループ ・ 授業者からのインタビューに答える形で全体共有を行う。 ○ 学校の食販企画のルールについて解説 ・ 高校生でも安全に食販を実施することができるために、どのようなルールが定められているか解説する。	■ 発表（観点 c）

2025 公開研究授業 指導と評価の計画

(1) 授業者(職) 野田 彩(教諭)

(2) 教科・科目 外国語(英語)・英語コミュニケーションⅠ(1年2組)

(3) 単元名 Lesson5 Banana Paper

(4) 授業の概要 廃棄されるバナナの茎を再利用して、バナナペーパーが作られる内容を扱う。本単元において、バナナペーパーがどのように製造されているか、ザンビアの人々の生活にどう貢献しているかを学んだ。本授業では、学んだ知識を使いながら、バナナペーパーのことを知らない人にも魅力が伝わるように、バナナペーパー製品の販売促進のプレゼンテーションを行う。その際、どのような表現を使えば、バナナペーパーの魅力が伝わるのか考えさせたい。

(5) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
- 関係代名詞(主格)、関係代名詞(目的格)、S+seem+to 不定詞を用いた文の形・意味・用法を理解している。 - バナナペーパー製品の販売促進について、情報や自分の考えなどを論理性に注意して話したり書いたりして伝える技能を身につけている。	- バナナやバナナペーパー、バナナペーパープロジェクトについて、概要や要点を捉えることができる。 - バナナペーパー製品の販売促進について、情報や自分の考えなどを論理性に注意して話したり書いたりして伝えている。	- バナナやバナナペーパー、バナナペーパープロジェクトについて、概要や要点を捉えようとしている。 - バナナペーパー製品の販売促進について、情報や自分の考えなどを論理性に注意して話したり書いたりして伝えようとしている。

(6) 単元の指導と評価の計画：

a：知識・技能 b：思考・判断・表現 c：主体的に学習に取り組む態度

◎：重視して指導・評価する観点 ○：指導・評価する観点

時	授業 タイトル	学習活動	ねらい	評価方法			
				a	b	c	評価材料
1 ・ 2	Lesson 5 Part 1	バナナの語源がアラビア語の「指」を意味する banan に由来することを学ぶ。	「バナナ」という名前は、何語に由来しているのか理解する。	○		○	ワークシート
3 ・ 4	Lesson 5 Part 2	バナナペーパーの製造工程を学ぶ。	バナナペーパーがどのように作られるのか理解する。	○		○	ワークシート

5 ・ 6	Lesson 5 Part 3	バナナペーパーがエンフエ村にもたらしている影響を学ぶ。	エンフエ村の生活がどのように変化したか理解する。	○		○	ワークシート
7	Lesson 5 Review	Lesson5 の要約文を読み、概要全体を把握する。	バナナペーパーの製造工程やエンフエ村にもたらしている影響を説明するために必要な語句や文法事項を身につける。	○		○	ワークシート
8	Lesson 5 Action	バナナペーパーの販売を促進するプレゼンテーションを行う。	バナナペーパーの販売促進のための視覚資料を使って、プレゼンテーションを行う。		○	○	ワークシート

(7) 指導内容

①本時のねらい

バナナペーパーの販売促進のための視覚資料を使って、プレゼンテーションを行う。

②本時の大きな問い

どのような表現を使えば、バナナペーパーの魅力が伝わるか。

③本時の指導内容

授業展開	学習活動	評価方法
導入 (10 分)	○リスニング活動 Scene1 この後の活動の橋渡しとして、バナナペーパーを学校で利用する例についてのリスニングを行う。 ・ペアで質問と選択肢を読み、その答えを推測する。 ・音声聞き、答えを確認する。 その際、バナナペーパーが通常の紙より高価であることに気づかせる。 ○教科書本文の復習 Scene2 バナナペーパーの販売を促進するチラシの空所補充を行い、簡潔に内容理解を行う。 ・空所①、③は教科書本文の内容を記入する。 ・空所②は、リスニングの解答を利用して記入する。	
展開 ① (35 分)	○バナナペーパーの販売を促進するチラシをヒントに、ライティング、音読練習する。 Scene3 ・チラシのモデル文を参考にしながら、製品、値段等の情報を簡潔に書く。 ・Chat GPT にプロンプトを入力し、より魅力を伝えるための助言をもらう。どのような表現を使うと、バナナペーパーの魅力が伝わるのか確認する。 ・文章を再構成し、音読練習を行う。 ○グループプレゼンテーション ・4 人班の中でプレゼンテーションを行う。 ・発表を聞き、内容をメモをする。 ・どの製品を最も買いたくなったかを選ぶ。	[b][c] ワークシート
まとめ (5 分)	○振り返りを行う。 ・振り返りを記入し、ワークシートをロイロノートに提出する。	[b][c] ワークシート

2025 公開研究授業 指導と評価の計画

(1) 授業者(職) 田島 香奈子(教諭)

(2) 教科・科目 外国語・英語コミュニケーションⅠ(1年6組)

(3) 単元名 Lesson 6 Patterns in Human Behavior *Power on English Communication I*

(4) 授業の概要 本授業は、「問いを推進力とする授業づくり」というテーマに基づき、生徒が主体的かつ探究的に学ぶ姿勢を育成することを目的として計画している。特に、年度当初の授業内アンケート結果から、生徒の多くが英語の四技能のうち「スピーキング」の向上を重視していることが明らかとなったため、発信型の学習活動を多く取り入れた。さらに本単元では、人間の行動の背景にある心理を学ぶ題材であることから、思考力の育成も目指す。

(5) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
- 人間の行動心理についての情報を読み取り、伝えるために、必要となる語彙・表現・知識を身に付けている。 - 相手に、正しく・理解しやすいように情報を伝えるなど、自身の表現で伝達する技能を身に付けている。	- 人間の行動心理について書かれた例・説明文の、概要や要点を捉えることができる。 - 発表などを通じて、読んだり聞いたりした内容を、他者に自分の言葉で伝えることができる。	- 人間の行動心理について書かれた例・説明文の、概要や要点を捉えようとしている。 - 人間の行動心理について書かれた例・説明文を通して、読んだり聞いたりした内容を他者に自分の言葉で表現しようとしている。

(6) 単元の指導と評価の計画：

a：知識・技能 b：思考・判断・表現 c：主体的に学習に取り組む態度

◎：重視して指導・評価する観点 ○：指導・評価する観点

時	授業 タイトル	学習活動	ねらい	評価方法			
				a	b	c	評価材料
1	Lesson 6 Introduction & Part 1-1	「問い」を意識して学習に向かう姿勢を作る。 - 人間の心理が行動にどのような影響を与えるのかを読み取り、自分の行動に照らし合わせて考えることができる。 - Lesson 6-1の新出単語、イギリスの背景知識、教科書内容を理解する。	「なぜそうなるのか」を考察することができる。 - 考察した理由を英作することができる。 - ペアワークに積極的に取り組むことができる。 - 本文の概要を理解できる。	○	◎	○	- ロイロノートのアンケート - ハンドアウト

2 5 6	Lesson 6 Part 1-2 & Part2-1~3-2	各Part の新出単語、文法、 題材の内容を理解する。	・ペアワークに積極的に取り組んでいる。 ・本文の内容を理解している。 ・本文の内容を自分の言葉で要約し英語で短文を書くことができる。	○	○	○	ハンドアウト
7	Lesson 6 Wrap Up	Lesson 6 の内容を振り返り、「問い」に対して英語で表現することができる。	・生成 AI の添削機能を使用しながら自分の考えを英語で作文することができる。 ・人間の行動心理について、聞いたこと読みだしたことを活用しながら、「問い」に対して理由や根拠と共に話すことができる。		◎	○	ハンドアウト

(7) 指導内容

①単元の大きな問い

スーパーマーケットで余分な買い物を減らすにはどうすれば良いか。

②本時のねらい

人間の気持ちが、行動にどう影響するかを知ることができる。

③本時の指導内容

授業展開	学習活動	評価方法
導入 (10 分)	○ 挨拶、ティーチャートーク ○ 1 min chat(帯活動) ○ 生成 AI を使用して英文を添削する ○ 本時のねらいと問いについて知る	【a】 Chat 冊子
展開① (17 分)	○ Pre-Reading Activity ・ [Situation][Question]を確認する。 ・ First Answer (A・B・C・D)をロイロノートのアンケートで回答する。 ・ 理由を A→D の順で回答する。 ・ Thinking time 30sec. ・ Second Answer (A・B・C・D)をロイロのアンケートで回答する。 ・ 共有後、教科書を開いて答えを確認する。	【b】 ハンドアウト
展開② (20 分)	○ 新出単語の導入 ○ Part 1 のオーラルイントロダクション ○ Part 1 の内容を口頭で確認する	【b】 【c】 ハンドアウト
まとめ (3 分)	○ 本時の振り返り	振り返りシート

2025 公開研究授業 指導と評価の計画

(1) 授業者(職) 関口 英志(教諭)

(2) 教科・科目 芸術(音楽)・音楽Ⅰ(1年3組)

(3) 単元名 ミュージックベル合奏 A表現(2) 器楽 [共通事項](1)

(4) 授業の概要 これまで練習してきた内容について確認した上で、同一条件のもと演奏者が3名に減った場合、表現が可能かどうか考察する。
また、3名で演奏する場合、こういった創意工夫が必要であるかを考察し、他者と比較しながら今後の表現活動に生かす。

(5) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・曲想と音楽の構造や文化的・歴史的背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解している。 【知識・器楽ア】 ・創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付け、器楽で表している。 【技能・器楽ウ(イ)】	・音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きを感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、どのように表すかについて表現意図をもったり、音楽を評価しながらよさや美しさを自ら味わって聴いたりしている。	・主体的・協働的に表現及び鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。

(6) 単元の指導と評価の計画：

a：知識・技能 b：思考・判断・表現 c：主体的に学習に取り組む態度

◎：重視して指導・評価する観点 ○：指導・評価する観点

時	授業 タイトル	学習活動	ねらい	評価方法			
				a	b	c	評価材料
1(2)	準備	Step 表に沿って内容を理解し、作業内容を共有する。	単元の目標や進め方を確認し、学習の見通しをもつ。 役割りを自覚し、演奏に必要な準備をする。			○	ワーク (楽譜)
2(3)	練習	音とリズムを確認しながら練習する。	楽曲の構造を理解しながらグループ活動する。	○	○		活動観察 行動記録
3(1) 本時	考察	テーマに沿って考察し、発表する。	グループ演奏を互いに考察しながら、より豊かな表現を目指す。		○		ワーク
4(2)	表現	創意工夫を生かして演奏する。	他者との調和を意識しながら演奏し、互いに評価する。	○	○	○	発表 振り返りシート

(7) 指導内容

①本時のねらい

グループ演奏を互いに考察しながら、より豊かな表現を目指す。

②本時の大きな問い

◇ 演奏者が3名の場合、これまでと同じ条件で演奏は可能か。

◇ 3名で演奏する場合、どういった点を工夫すればよいか。

③本時の指導内容

授業展開	学習活動	評価方法
導入 7分	○課題の内容と条件を確認する。 ア) 使用する音は12音である。 イ) 最後の音は全員で演奏する。 ウ) 持ち替えるときには必ず1拍分間をおく。(四分音符1つ分)	活動観察
展開 ①15分 ②20分	① 演奏者が3名の場合、「導入」の条件で演奏は可能か、グループで考察する。 ア) 注目するポイントを絞り、可否カードの色を決める。(可→青、否→桃) イ) ポイントに沿って意見をまとめ、グループ発表する。 ② 3名で演奏する場合、どういった点を工夫すればよいか、グループで考察する。 ア) 「展開①」で共有したポイントを参考に、工夫が必要なポイントを抽出する。 イ) 抽出したポイントを検証し、結果を発表する。	活動観察 ワーク
まとめ 8分	○ 出された意見に対して、実際に演奏が可能かどうか指摘する。 ○ 創意工夫によって表現活動は可能になることを理解する。 ○ 今後、より豊かな表現を目指し練習する。	ワーク共有

Ikuta-Higashi High School

ICT 利活用授業研究推進校中間報告書	令和7年度版
令和 8 年 7 月 27 日 第 1 版発行 編 者 神奈川県立生田東高等学校 研究・広報グループ 発 行 者 神奈川県立生田東高等学校 〒214-0038 神奈川県川崎市多摩区生田 4 丁目 3 2 番 1 号	

2026 Printed in Japan

無許可の転載、複製、転用等を禁じます



progress for the future lessons
Ikuta Higashi High School